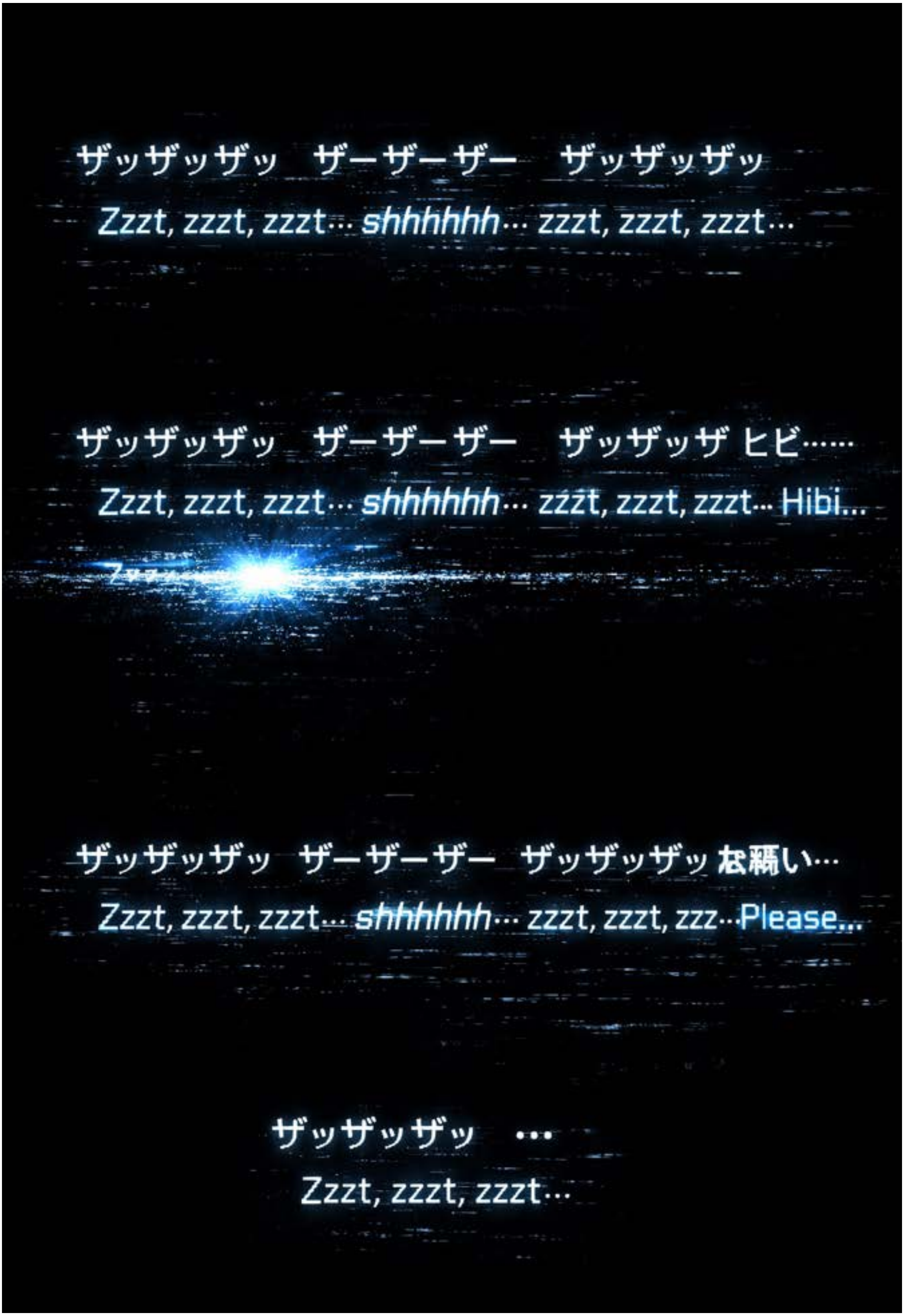
サイエンスハイスクーラーアドベンチャー『瑠璃色の惑星』

From Tokyo, Japon — 2026.09.13




ザッザッザッ　ザーザーザー　ザッザッザッ
Zzzt, zzzt, zzzt… *shhhhhh*… zzzt, zzzt, zzzt…
ザッザッザッ　ザーザーザー　ザッザッザ ヒビ……
Zzzt, zzzt, zzzt… *shhhhhh*… zzzt, zzzt, zzzt… Hibi…
ザッザッザッ　ザーザーザー　ザッザッザッ お願い…
Zzzt, zzzt, zzzt… *shhhhhh*… zzzt, zzzt, zzz… Please…
ザッザッザッ　…
Zzzt, zzzt, zzzt…


A Science High Schooler Adventure
THE AZURE PLANET
From Tokyo, Earth 2026.03.03
SOS
SPACE IS A DANGEROUS PLACE

シーン１：サイエンスハイスクーラー・第１期生

半年前......AGI サイエンスハイスクール......
ヒビはゲームと宇宙が大好きで、オシャレにもこだわりがある小学校、中学校にほとんど通っていない不登校の 15 歳。

母親はヒビが 10 歳の時に病で他界していて、今度はたった一人の家族の AGI 開発者だった父親までもが病で亡くなった。

父親が息を引き取る時に譲り受けた AGI デバイスを抱えて、
ヒビ（15 歳、高校 1 年）は AGI サイエンスハイスクールの
1 学期途中から通うことになった。

ケン：「あれー！この子、見たことないな！みんな、
この子転入生か？」

キキ：「先生が、これまで学校に来ていなかったけど、これからは学校に来るからよろしくねって言ってたよ。
みんな、仲良くしてあげようね！」

キキ：「あなたがヒビね！私、キキ！よろしくねっ！」

ヒビ：（無言・かなりの緊張丸出し表情）

ヒビの回想：

お父さん：「ヒビ、自分の夢を実現するためには仲間が必要だと思うけど？
自分の夢を見つける事と仲間が出来ることが同時だったりするかも？学校に行ってみたら？」



お父さん：「これを持っていきなさい。AGI ポータブルデバイスだよ」

ヒビ：（無言・真剣な表情）「自分の夢？
……まだわからない。」
と言いながらヒビには微かに見えていた。

「夢」じゃなくて、
やるべきことが……

ケン：「ねえ、ヒビ！それ、カッコイイ PAD だね？
ちょっと見せてよ」
ケンはヒビが早くクラスに慣れてもらいたいと考えて、
優しく接しているつもり。優しいケン。

ヒビ：「これはダメよ、お父さんの大切な PAD なんだから」

ヒビは AGI デバイスを強く抱きかかえてふさぎ込 む。

ケン：「僕はケン！ヒビは何かゲームをやっているの？
僕はガイアミメティクスゲームにハマっているんだ。」

ヒビ：(うつむいたまま)「ゲームやらない……」

キキ：するとヒビの AGI デバイスからチラッと
ゲームが見えた。
「ヒビはゲームやるんだね！ならここの授業も楽しいかもね！」

ヒビはまだこの AGI デバイスを
ゲーム機としてしか使っていなかった。

ヒビ：完全に怯えた子犬状態（震えている）

ケン：「なんだ！ゲームやるんだ！！
じゃあ、休み時間にリンクしようぜ！」

ヒビ：泣きそうな顔

リコ先生：「はーい！みんな、今日から新しい友達『ヒビ』が来たわよ」
「ヒビ自己紹介できる？」

ヒビ：もじもじする。

リコ先生：「できなければ、また今度でいいわよ」笑

ヒビ：「この時、私は一人の女子生徒と目が合ったままフリーズしていた。
なぜならば、この子は間違いなく私を見ている。
透き通る綺麗な瞳で、少し微笑んでいた。
でもなぜ白い杖を？」



「私は完全にノイスリダクション状態で、
その子の瞳に吸い込まれた。」

ヒビ：「この子？なに？……」

ヒビ：「白い杖？え？……この子、完全に私を見てる……」


AGI

ケン（心の声）：「…え？リナが…ヒビの顔を見てる？
そんなはずないよな？
だって、僕…一度もリナと目が合ったことなんて…」

そしてヒビは、リコ先生の説明がフェードインしてきた。

リコ先生：「これからやる授業は高性能ネオメタバース宇宙で
みんなに色々と実験や宇宙体験をしてもらいます。

今月から初めて導入したシステムで、AGI によって仮想宇宙空間がかつてないほどリアルに再現され、まるで実際に宇宙体験しているかのように感じられます。

従来の簡素なアバターとは異なり、事故や失敗の恐怖までも
リアルに味わうことができるからみんな
真剣に取り組んでくださいね！」

リコ先生：「あっ！そうそう！......マナ先生チームの開発したネオメタバースですから、痛みも感じるみたいなことも言ってたわよ！そうしないと安全対策を怠るからって」笑

生徒たちの AI 宇宙服は、温度、湿度、気圧、酸素、
さらには光の質感に至るまであらゆる要素を再現し、
まるで本当に宇宙にいるかのような感覚を与える。

しかし、それは単なるシミュレーションではない。

それは、生命の限界を身体で学ぶための装置だ。

彼らはまだ知らない……
この「仮想宇宙」が、やがて彼らの現実になることを。



リコ先生：「さあ、ここからが本番よ！......
まずはみんなに――Gaia Band（ガイア・バンド）を渡しておきます。」
クラス全員の手首に、同時に小さな光が走った。

Gaia Band が装着者の呼吸と鼓動に同期し、

思考と共鳴して生命情報を書き換える。それは“変身を可能にする”地球生命のインターフェースだった。
リコ先生：「じゃあ、みんなに AGI サイバー変換服（AGIS）について説明するわね。



これは、Gaia Band と連動して身体情報を解析し、必要に応じて保護服や作業スーツ、宇宙服などに変身するシステムよ。

リコ先生：「AGIS の外観は固定されていません。ガイアバンドの STYLE スイッチで、性能を維持したまま、色や形、素材表現を自由に変更できます。」

普通の制服に見えて、実は 3 段階変形スーツ！
学生服モード : AI 機能つき制服



メタバース作業モード：仮想空間での作業・実験・訓練に最適



宇宙服モード：真空・放射線・自家発電対応！



キキ：「制服で宇宙に行ける時代、来ちゃったね」

リコ先生：「そして次は、カズの車椅子――AstRaider（アストレイダー）。」
それは、機械を超えた“意志の鎧”。
宇宙に挑む者の象徴、“Cosmic Knight（宇宙騎士）”

隕石を撃ち落とす砲を持ち、磁場を操り、重力を忘れたように浮かぶ。
ガイア・バンドとAGIが共鳴するとき、
それは意識そのものとひとつになり、乗る者の“心”を航行させる。

リコ先生：「どう？カズ？これはマナ先生の設計よ。」



カズかっこよく起動！



リコ先生：「次は――リナの視力を助ける AGI サイバーゴーグルの説明です。」

マナ先生：「リナ。この AGI サイバーゴーグルはね、最初は世界が立体感がなく平たく感じると思う。
でも大丈夫。

リナの呼吸に合わせて、少しずつ、立体も色も、ちゃんと馴染んでいくから、急がなくていいわよ。」

リコ先生：「リナ、装着してみて。
これもマナ先生の設計デザインよ。」

リナ：「……っ……あ……ぁ……っ……！！」

（声が出ない。息が途切れ、肩が震える）
そのまま――完全に静止。

10 秒、20 秒……

教室の空気がゆっくりと凍っていく。

クラスのざわめきも止まり、
誰も動けない。



リコ先生（小声で）：「リナ……？」

マナ先生（心配そうに一歩近づく）
「呼吸はしてる……でも、これは……フリーズ？」

リナ：「……これが……世界……。
（小さく息を吸う）

光の気配で感じてた……。

人が……そこにいて……。

壁も……椅子も……。

ちゃんと……そこにある……。
（涙が落ちる）

……初めて見たのに……

ずっと知ってたみたい……。」



クラス：「よかったねリナ！」

教室の空気が、ひとつの呼吸をした。
光の粒が、リナの頬をなぞり、
マナ先生の頬にも、同じ涙の道ができた。

“スパルタン星人”と呼ばれるその先生も、
その瞬間だけは――ただの人だった。

ヒビ：（涙しながら小さく拍手）
パチ、パチ。

リナ：「リコ先生！マナ先生！ありがとうございます！」


AGI CYBER GOGGLES
VISUAL ASSIST SYSTEM
DEPTH SYNC 100%
COLOR ADAPT 100%
BREATH SYNC 100%
STATUS: SYNCHRONIZED
REAL-TIME LIGHT MAP
SPARTAN
OBJECT IDENTIFICATION
TEACHER (RICO) 100%
TEACHER (MANA) 100%
CLASSMATE 100%
BLACKBOARD 100%
WINDOW 100%
DESK 100%
VISION ANALYSIS
DEPTH PERCEPTION 98.7%
LIGHT ANALYSIS 100%
COLOR ACCURACY 99.8%
OBJECT RECOGNITION 100%
COLOR ADAPTATION
EMOTIONAL STABILITY
STATUS CALM
AI SUPPORT: YOU.LA
SYNCHRONIZED
TRUST LEVEL 100%
AGI CYBER GOGGLES
VISUAL ASSIST SYSTEM
ーリナー
大丈夫。
ゆっくりでいいよ。
私たちがついてるよ。

「このAGIサイバーゴーグルは、
視力を補うためだけの装置ではありません。

Gaia Bandと連携し、
装着者一人ひとりの生体情報を学習しながら、
その人に最も自然な『見える世界』をつくり出す
次世代視覚インターフェースです。」

AGIサイバーゴーグル Ver.1.0（設計仕様）
・用途：リナ専用視覚支援インターフェース
・重量：約200g以下
・透明導光レンズ
・ステレオカメラ：左右フレーム内蔵（外から視認できない）
・LiDAR：フレーム内蔵
・環境センサー：フレーム内蔵
・骨伝導ユニット：耳後部左右
・バッテリー：後頭部左右分散配置（重量バランス最適化）
・Gaia Band：無線リンク（生体情報・AGI通信）
・環境認識：360°
・自然表示視野：約120°
・表示方式：必要な情報のみをリアルタイム表示（HUD）
・長時間授業対応
・設計目的：医療・教育環境での視覚支援

マナ先生は、リナが安心して世界を見つめられるよう、軽さ・安全性・脳への負担まで考え抜いて、このAGIサイバーゴーグルを設計しました。

シーン 2：ネオメタバース宇宙への接続



カズ：「リコ先生！まずはネオメタバース用の宇宙服を選んでもいいですか？」

リコ先生：「それではみんなラボに移動しましょう！」

教室：ガヤガヤ

教室は、期待とざわめきに包まれた。

リコ先生：「生徒たちは、様々なデザインの宇宙服から好きなものを選び、ファッションショーさながらに楽しんでいいわよ。
ヒビも、宇宙服を選びなさい。」

ヒビ：「はい……」その声は小さく、
けれど心の奥ではわずかな光が動きはじめていた。

教室では、次々に宇宙服のホログラムが立ち上がり、
笑い声と歓声が入り混じる。

ヒビはその輪の中に、まだ馴染めず、
そっと YOULApad に向かってつぶやいた。

ヒビ：「帰りたい……ねえ、YOULA……聞いてるの？」

その瞬間、リストバンドの光がやわらかく揺れた。
そして、リナの声が届いた。
リナ（ホログラム通信）：「ヒビ、一緒に宇宙服のアレンジしましょう！」

リナはそっとヒビのそばに寄り添った。

目が見えないはずの彼女が、
なぜかまっすぐに私の目を見ている気がした。

その不思議な感覚は、ヒビの胸の奥で、何かがやさしく鳴った。

リナとヒビは、宇宙服コーデのシミュレーションを始めた。
光のホログラムの中で、無数の宇宙服が静かに立ち上がる。

リナ：「ヒビ……その PAD…不思議と、目を引くわね。」



ヒビ：「……うん」
短い返事の奥で、ヒビの胸が小さく揺れた。
リナという存在が、さっきより少し近く感じられる。

リナもまた、ヒビの静けさに、理由のない引力を感じていた。

ヒビ：「……リナのゴーグルも、綺麗…」

リナ：「知ってる！さっき鏡で見たの！
似合っていると思った！」笑

「私は、この宇宙服にしようかな？」

ヒビ：「いいと思う！かわいい！」
二人が楽しそうにしていると、
突然ヒビの AGI デバイスが喋り出した。

YOULA：「はじめましてリナ！」

YOULA：（無機質な声） リナの AGI サイバーゴーグルに、
一瞬だけ小さな光の“ウインク”が走る。
音もなく、ただリナにだけ届く信号。

リナ（小声で）「……え？　今、この子ウインクした……？」

ヒビ：「あなた……Siri じゃないの？」

YOULA：「私は Siri ではありません。

……あっ！今、リナが笑いました。」

リナ：「へー！この子可愛いわね！ヒビ！」



ヒビとリナ：ニコニコ

YOULA：「ヒビ！僕もカッコいい宇宙服が着たい！」

ヒビ：「ダメよ YOULA！そんな大きな声出したら！しーっ！」

教室：大笑い。みんなに聞こえている。

リコ先生：「YOULA、あなたはただの AI デバイスでしょう？一体何を言っているの？」

ヒビとリナ：爆笑

ケン：「じゃあ、僕が学校の AGI と YOULA をリンクさせて、YOULA のアバターを作ってあげるよ！」

ケン：「じゃあ！ヒビ！このケーブルを YOULA に接続して！」

すると突然、YOULA が等身大で現れた！

キキ：「私たちと同じぐらいの YOULA ロボが現れたわ！
かわいい！」

クラス：「キャー！」

ヒビ：「カッコいい…！」

リナ：「......うん！......カッコいいね！」笑

リコ先生：「素晴らしいわね、ケン！

規則違反だけど、YOULA ロボは特別に許可しましょう。

これから私たちを色々助けてくれるかもしれないわね。

みんな！ヒビのお父さんは AGI 研究者だったのよ。

YOULA はそのお父さんが開発した AGI デバイスらしいわよ！」


YOULA
ADVANCED AGI SYSTEM
YSTEM STATUS
COGNITION
LEARNING
ADAPTATION
EMPATHY
CREATIVITY
YOULA CORE
DEEP LEARNING
NEURAL NETWORK
QUANTUM PROCESSING
SELF-IMPROVEMENT
GLOBAL CONNECTIVITY
DEEP LEARNING · BRAIN-COMPUTER INTERFACE
THE FUTURE IS ALREADY CONNECTED.

リコ先生：「それぞれ宇宙服を選び終わったら、みんな席に着いてガイア・バンドに変身モードを設定してくださ〜い。」

クラス：「はーい！」

YOULA：「はーい！」

リコ先生：「YOULA、あなたは先生の隣で私のアシスタントよ！」



教室とヒビ：笑い
ヒビだけの YOULA だったのに、
気づいたら――クラスのみんなが YOULA と呼んでいた。

リコ先生：「ヒビも宇宙服に身を包み、すっかりクラスに溶け込んだ様子ね。」

ヒビ：「はい！」笑

ヒビ：「あっ…リナ…」



リナとヒビがまた、不思議なアイコンタクトを交わす。

ケン：「リナが見つめ合うのはヒビだけだなあ？
まあ〜いいや！」

「ヒビ！休み時間だから、宇宙ガイアミメティクス対戦ゲームを
やろう！」

ヒビ：「うん」（リナを見たまま返事）

サイエンスゲーマーのケンと、ゲームで盛り上がるヒビ。

クラス：ゲームを見守る中、互角の勝負が繰り広げられる。

ケン：「このゲームの世界チャンピオンは僕なんだけど？
ヒビ、強くないか！？きょえー！」

ケン：「もしかして、君…ゲームの中で『ヒカリ』って名前で
遊んでた？」



クラス：「ヒカリって！あの準優勝の？」

ケン：「なんかこの戦法でわかったぞ！
いつも手強いんだよなぁ、「ヒカリ」のヤツ！」

ヒビ：「まさかリアルで会うとは思わなかった……
ケンだったんだ……！」

ケン：「あっ！リコ先生が来た！ヒビ！続きはまたやろう！」

クラス：大笑い

リコ先生：「あなたたち、宇宙では音がしないのは知っているわね？

このAIサイバー宇宙服には視覚に合わせて音をつける視覚システムサウンド機能があるの。

今から AGI シミュレーターで体験してもらいます。」

隕石の接近音は
ドップラー効果で変化 → 速度・距離を音で直感的に把握！
（低音 → 高音に変化）

バイアガン（BAIA Gun）の発射音や命中音も、
電子音としてリアルタイムで再現！
（電子音が波のように揺れ、鋭く響く）



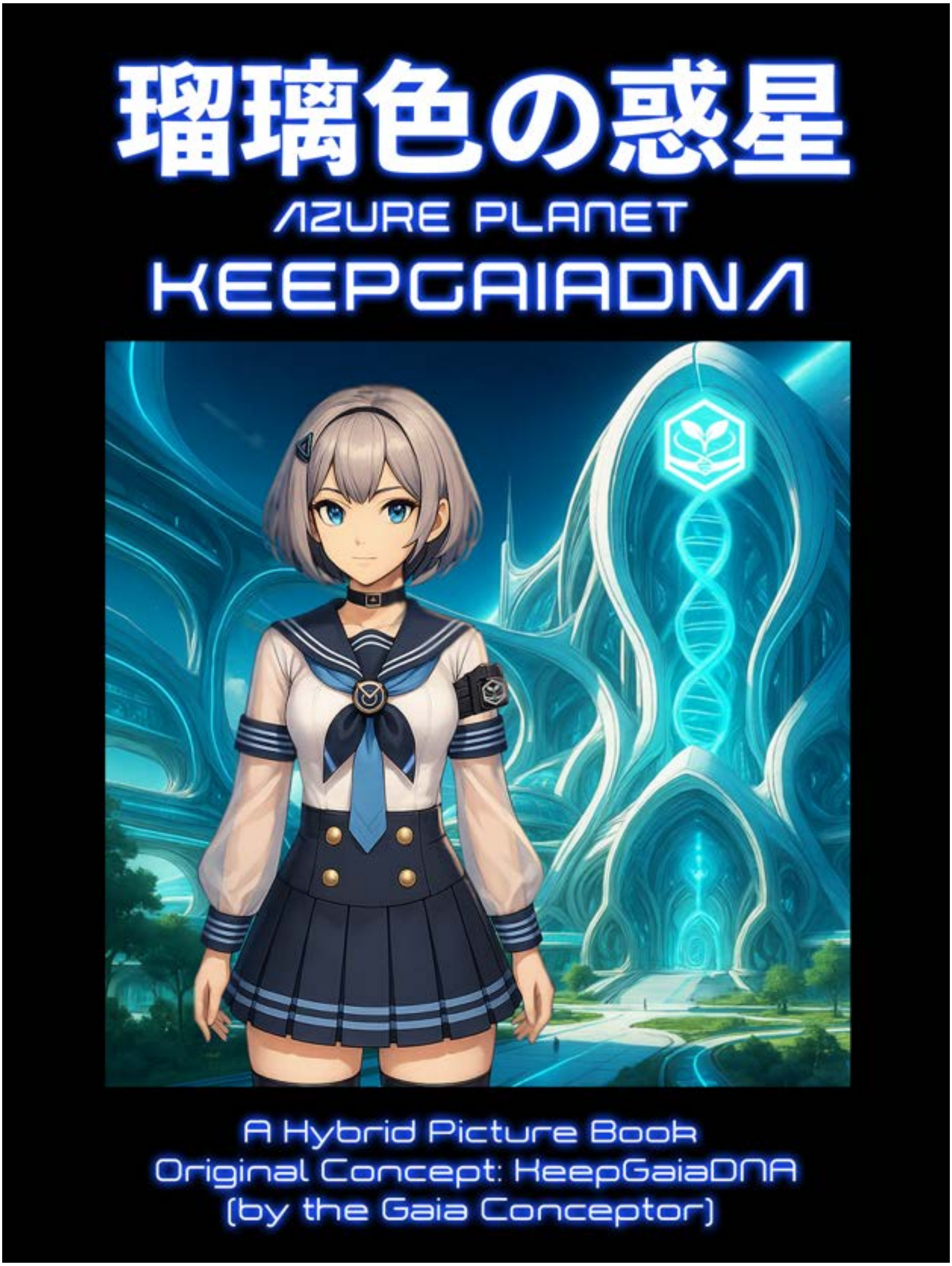
ケン：「バイアガンってゲームと同じだなあ！ヒビ！」

ヒビ：「うん」ニコニコ

ヒビ：バイアガンをケンに向けて口で
「ピシューーン！ピシューーン！」



シーン 3：「星の一生」と地球生命の限界線



リコ先生：「ここからは実践的な宇宙メタバース体験。
マナ先生の「ネオメタバース」授業です。
宇宙での事故も怖いけど…マナ先生の方が怖いかもね！」笑

教室：シーン……
（生徒たちのザワつく表情）

マナ先生：「あなたたちに、このネオメタバースを
体験してほしい一番の理由は、
宇宙の「魅力」と「現実」を知ってほしいからです。
また、宇宙にはさまざまな恐怖があることも勉強しましたね。
その恐怖を超える力を、ここで身につけてください。」

クラス：「はーい！」

マナ先生：「今日のテーマはカリキュラムの 50 ページにある
『太陽の死滅』です。

ヒビには、だんだんマナ先生がスパルタン星人にしか見えなくなってきた。笑

今度はケンが勝手にマナ先生のアバターをスパルタン星人に差し替えて遊んでいた。
ケンはそのスパルタン星人アバターをヒビに送って遊んでいた。

するとヒビが Gaia Band の操作を誤って、
ホログラムのスパルタン星人がヒビの目の前に出現してしまった！

ヒビ：「きゃあーーー！！」

......完全にマナ先生に見られていた。
クラス全体に走るムード：「ヤバいよヤバいよ！！」

マナ先生：「ヒビ、それはあなたじゃなくて......ケンね。」
（低い声でゆっくり）

ヒビ：「えっ！？えっ！？
わっ…私全然似てないと思います！
絶対に似てないです！！」



クラス：みんな笑っていいのか悪いのかわからず、
困惑しながら笑いをこらえている。

マナ先生：（また低い声で）ケン？

ケン：「ヒビ、お前何ぶっ込んでんだ！」



マナ先生：「ちょっとだけ似ている。」

クラス：完全に大爆笑！

マナ先生：「はーい！みんなネオメタバース始めるわよー！」

マナ先生：「太陽が死滅に向かうと、地球にどのような影響があるのか見ていきましょう。」

マナ先生：「説明は YOULA お願いね！」



巨大な赤い太陽がスクリーンいっぱいに映し出され、迫力満点のシーンが広がる。

YOULA：「それでは、太陽の死滅プロセスについてです。

太陽の死滅は、地球生命体にとって“終焉の時”を意味する。

この地球に“命”がいられるのは、
あと約 10 億年しかありません。

“命”が次の形を探し始める時でもあります。」

リナ（小声で）:「命が......次の形を探す？」

YOULA：「そう。終わりは、進化のもう一つのカタチです。」

リナ：「……え？……終わり？全く目に浮かんでこないわ？……」

YOULA：「地球生命体が住めなくなる時間は、
あと約 10 億年です。」



ヒビ：「じゃあ、“地球生命体”を次の星へ送らなきゃ。
……やっぱりね～……」



クラス：シーン

キキ：「でもまだまだ先の未来の話よね？......__」

マナ先生：「それをあなたたちが考えるためのカリキュラムよ......」笑

リナ：独り言「私？こんな胸騒ぎはじめて…」



マナ先生：「YOULA、解説ありがとう。」

YOULA：さらにイケメンアニメ顔「どういたしまして」…

クラスの誰も笑う余裕なんてない。



マナ先生：「怖かったかしら？これでも手加減しているのよ？」

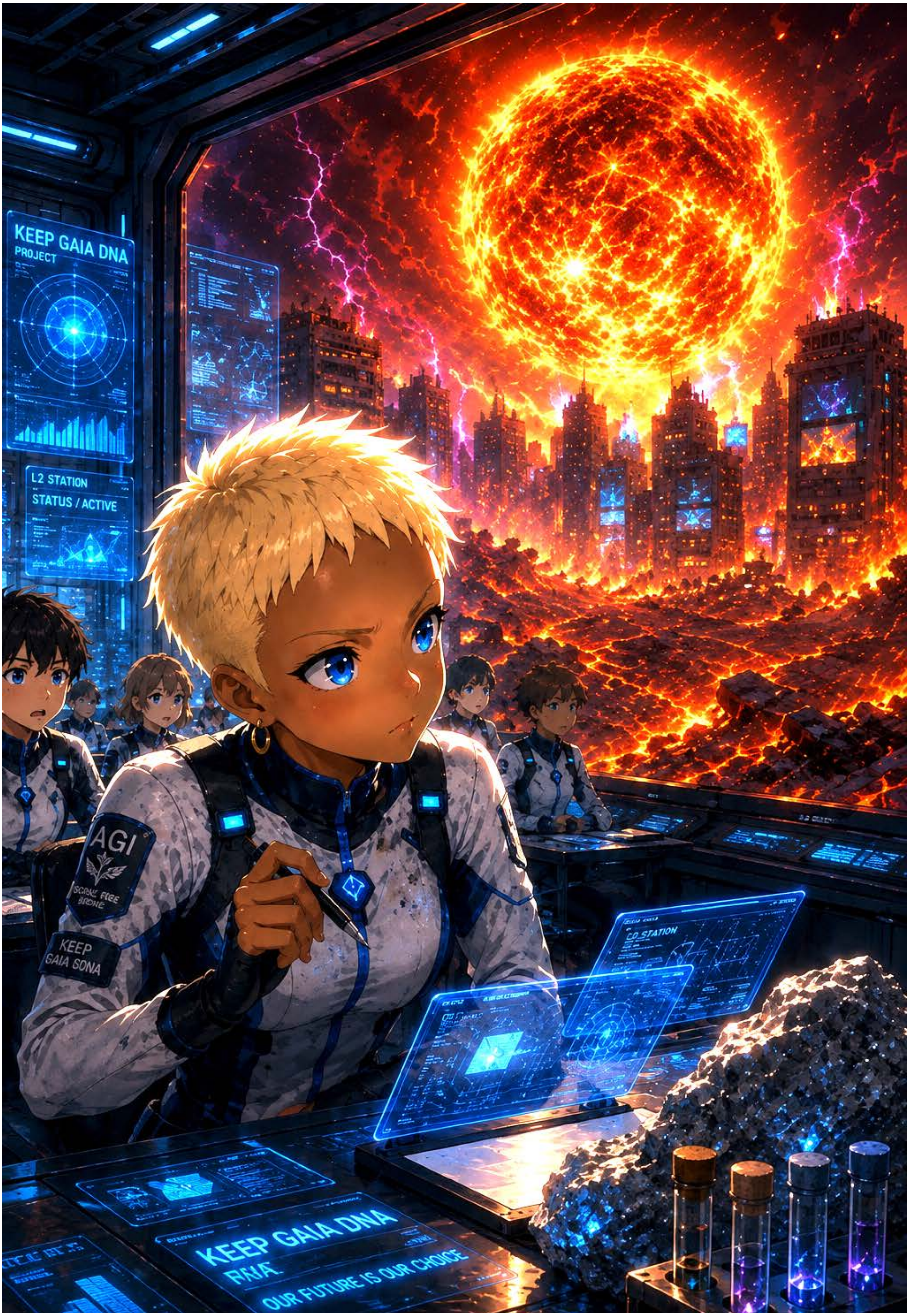
マナ先生：「では次の授業は、
私たち人類が宇宙空間に放り出されるとどうなるのか？

そして宇宙から見た地球がどれほど美しいのか？

真空の宇宙についてネオメタバース宇宙で学びましょう！

ちなみに先生は太陽フレアが北極と繋がりオーロラが
揺らぐのが大好きよ。」笑

クラス：ドキドキワクワク


KEEP GAIA DNA
PROJECT
L2 STATION
STATUS / ACTIVE
AGI
KEEP
GAIA SONA
KEEP GAIA DNA
OUR FUTURE IS OUR CHOICE


NEO-METAVERSE
SPACE LESSONS
YEO
PREPARE FOR THE VOID
LEARN TO SURVIVE IN SPACE
AGI SCIENCE HIGH SCHOOL
KEEP GAIA DNA PROGRAM

シーン 4：地球の声と美しき恐怖



マナ先生：「さあ！皆さんそれでは、
いよいよネオメタバースに入ります！

これまでの訓練は安全カリキュラムでしたが、
今回は少し過激なカリキュラムも含まれますので、
皆さんには、
ネオメタバースで心構えを学ばせたいと考えています。

そしてそこには、私たち先生も、
あなたたちの味方になる大人は誰もいません。」

マナ先生：「このネオメタバースで君たちが学ぶのは、
夢やロマンだけじゃありません。
宇宙は知識だけでも、生き残れない想定外の場所です。」

マナ先生：「どんなに科学技術が進歩しても、
小さな隕石ひとつで人類の未来を終わらせることもあるのよ。」

「宇宙空間での恐怖を知ることも、
生命を守るための最初の一歩です。」

クラス：（静まり返る）



マナ先生：「みんなの宇宙服には手動エアージェットがついていることは学んだわね？
このエアージェットは自分の酸素ボンベのエアーだから
使い過ぎればどうなるかわかるわね？カズ？」

カズ：「酸素ボンベ使用時間はおよそ１時間可能ですが、
エアージェットを使うと極端に酸素ボンベは消耗します。」

マナ先生：「それでは、みんな準備はいい？」（シーン）
「……本当に準備はいい？」

「あっ！それからこのネオメタバースの授業中は先生とは一切連絡取れないわよ！みんな頑張ってね！」

ハッチのオープンスイッチをバン！と押した！

宇宙空間に投げ出される授業が始まったのだ！



いつの間にか
YOULA も、リコ先生とマナ先生の
この「宇宙空間放り出しテスト」の仕掛け人側になっていた。

クラス全員の叫び声が無線機からひび割れて
マナ先生にも聞こえた！



YOULA：「おそらくヒビたちは、心臓もレッドゾーンです。」ニヤリ

ヒビ：「キャー～！！！
あっ……！青い地球と銀色に輝く月の球体が同時に見える！

太陽から伸びる巨大なフレアが地球の北極を照らし、
オーロラが揺らいでいる！綺麗！綺麗！

生きている！地球は生きている！太陽も生きている！……

そして私も生きている！……心臓が！心臓がヤバい……」



ヒビのバイザーも感激の涙で銀色にキラキラ輝いた！

ヒビ：「宇宙ってなんて静かなの？

この宇宙服の生命装置と私の呼吸しか聞こえない。

宇宙って静かで美しいけど怖いわ！

これはまさに『美しき恐怖』ね……綺麗で怖い……

……あんなに憧れていたのに？ 私……宇宙を怖がってる…」



その時、ヒビはまた９歳の時と同じことを思った！

「地球は太陽に守られている！地球は太陽の子供。
私たちもまた、その子供。
生命とは、すべてがセットになって息づく『在り方』。
そして私たち人類は地球の命を
守るために進化してきたのよ！
人類だけが生き延びるためじゃない！

この地球生命体を繋ぐためよ！」

「お父さん！
お父さんの言っていたピースって？もしかして……」

この時ヒビはさらに心臓がギューっと締め付けられるのを
生まれて初めて感じた……
すると突如「ビジジジィー！スゾーン！シュンシュン！」
隕石が襲来してきた。



ヒビ：「あっ！バリアシールドが解除されているから、
基地を壊し始めている！ヤバい！」

ヒビ：「宇宙服の視覚システムサウンド機能が作動してもの凄い数の隕石が飛んでくる音が聞こえるわ！」

ヒビ：「えっ？リナっ！…リナ！どこ！」

ヒビ：「みんな慌ててエアージェットで基地へ戻っている！

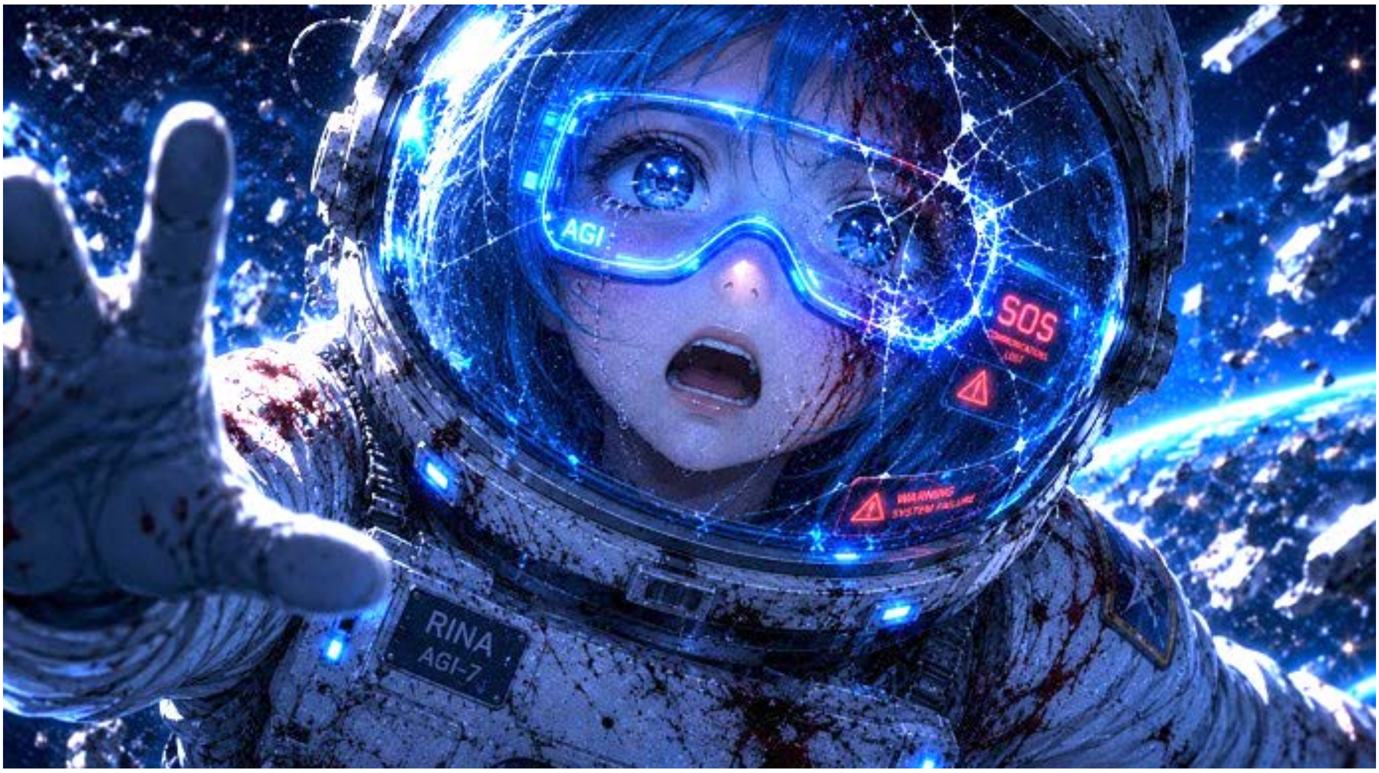
マジで隕石同士がぶつかりさらに細かい隕石が
避難する基地にぶつかっている！ヤバい！リナ〜！」

カズ無線：「全員が基地に避難しないとバリアシールドの
スイッチが押せない！

みんな早く基地に戻るんだ！」

カズはジェット噴射付きのアストレイダー（車椅子）なので
誰よりも早く基地に戻り避難指示を出していた。

リナが隕石とバーストによって
無線機と AGI 視覚補正ゴーグルが
損傷してしまい逃げ遅れる。



微小隕石の粒が、
リナの宇宙服とヘルメットを叩いた瞬間だった。

その衝撃と同時に、リナは理解する。
無線機が沈黙し、視覚システムとサウンド機能が壊れている。
「プツ……プツ……」
隕石の粒が自分の身体に当たる、かすかな音。

ヘルメットの内側に響く、自分自身の呼吸。
AGI 視覚補正ゴーグルから溢れ出すノイズ。
壊れた無線機の、意味を失った静電音。

そして——宇宙の闇。

それに重なる、盲目という闇。
音とノイズと感覚と闇が、

すべて一つに重なり合ったその瞬間、
リナははっきりと認識していた。

―ここが、絶対的な絶望の淵なのだと、身体が理解した。

リナ：「ヒビ～！ヒビ～！キャー！」
「誰からも何も返ってこない…
きっと私にはもう…時間もないはず…」

リナには『美しき恐怖』の次があった

『惨劇の沈黙……』

カズとケンは、
クラスの他の生徒たちをプラットフォーム基地へ誘導するのに
追われていた。

―リナがいないことに、
その時はまだ、誰も気づいていなかった。

ヒビは必死にプラットフォーム基地に向かっていたが、
リナと連絡が取れないのはおかしいので、
Gaia Band で呼び続けた。

ヒビは Gaia バンドを通じてリナに通信を試みる。

―応答はない。
返ってきたのは、
ホログラフィックのノイズが一瞬だけだった。

ヒビはやっと遠くのリナを見つけた。

ヒビ：「はっ！ノイズだけどモールスが聞こえる！……リナだ！」



ヒビ：「リナ待って！すぐに行くから！」

この言葉と同時にヒビは気づいた。

「どうして初めからリナに気づけなかったんだろう！クソっ！」

その瞬間、プラットフォーム基地のハッチが自動で閉まった！



隕石が直撃し、システムは自動的に
緊急オーバーライド・モードへ移行する。

—「生存最優先プロトコル」が発動したのだ！

ヒビは考えるよりも早く行動した。

緊急時オーバーライド機能を勝手に解除して
リナを助けに飛び出した！



ヒビは手動エアージェットでリナの方へ向かいながら、
安全ワイヤーリールをプラットフォーム基地に向けて発射した。

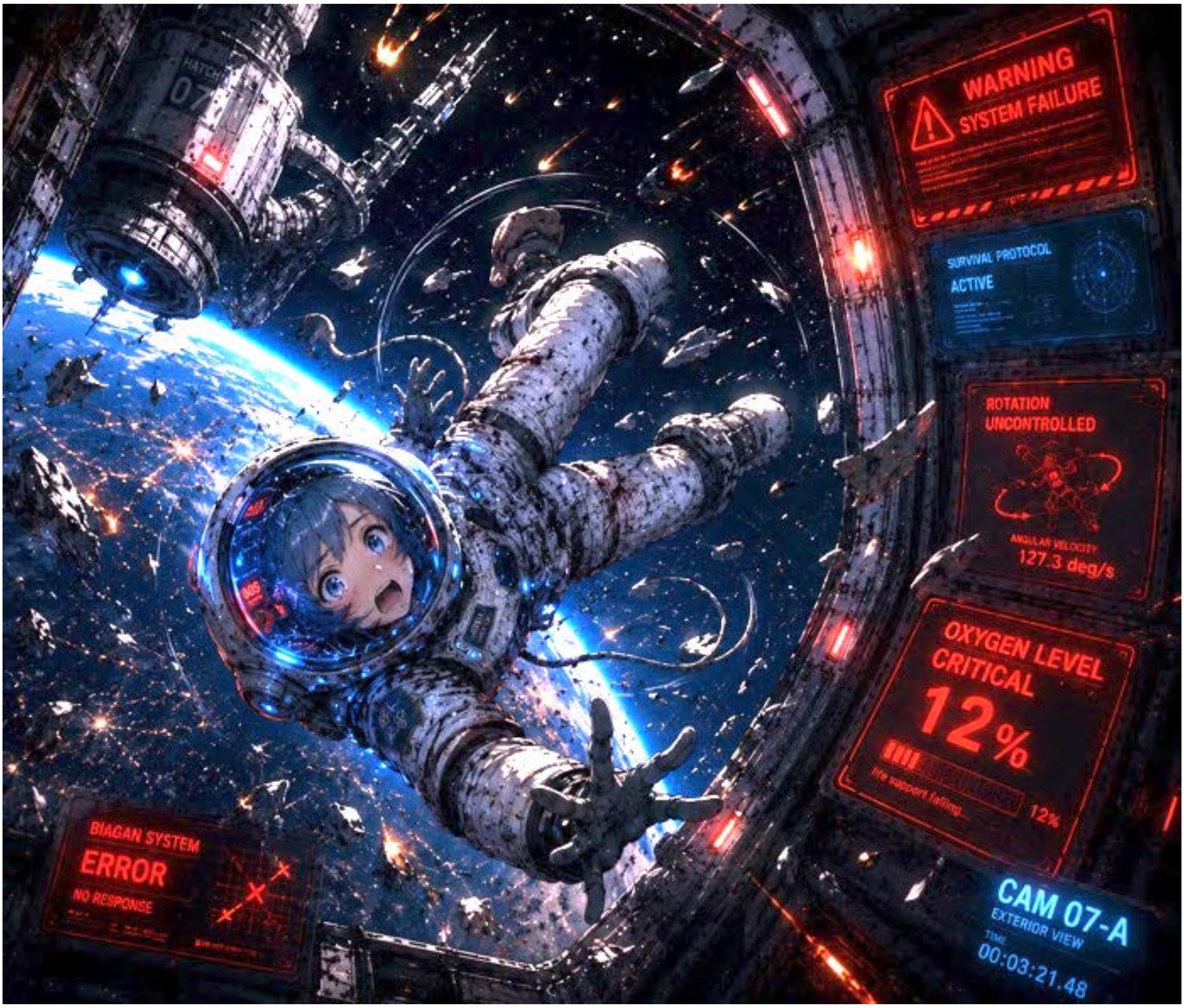
ヒビが叫んだ：「ケン、すぐにシールド起動して！
リナを助けに行く！」

ケンも叫んだ：「おい！ヒビ～！」だが、
ケンも思考より先に身体が動いていた。

ケンは緊急オーバーライドの設定を調整し、
彼女の行動を支援する側へと即座に切り替えた。

ヒビは必死に「バイアガン（隕石撃退システム）」で

隕石に向かって発射するが、
その反動で微弱なエアージェットが効かず、
身体がくるくる回転してしまい、
リナの方にうまく進めない！



「バイアガン」もパワー不足で隕石に勝てない。
でも、隕石の音とバーストノイズを聞いた瞬間、
ヒビは気づいた。

ヒビ：「―これ、今まで何度も戦ってきた“あのステージ”と同じだ。」

ヒビにも小さな隕石がぶつかり始めた！

一発がバイアガンの側面をかすめ、
衝撃でヒビの身体がさらに大きく回転してしまう！
ヘルメット内部に赤い警告ランプが一斉に点滅した！

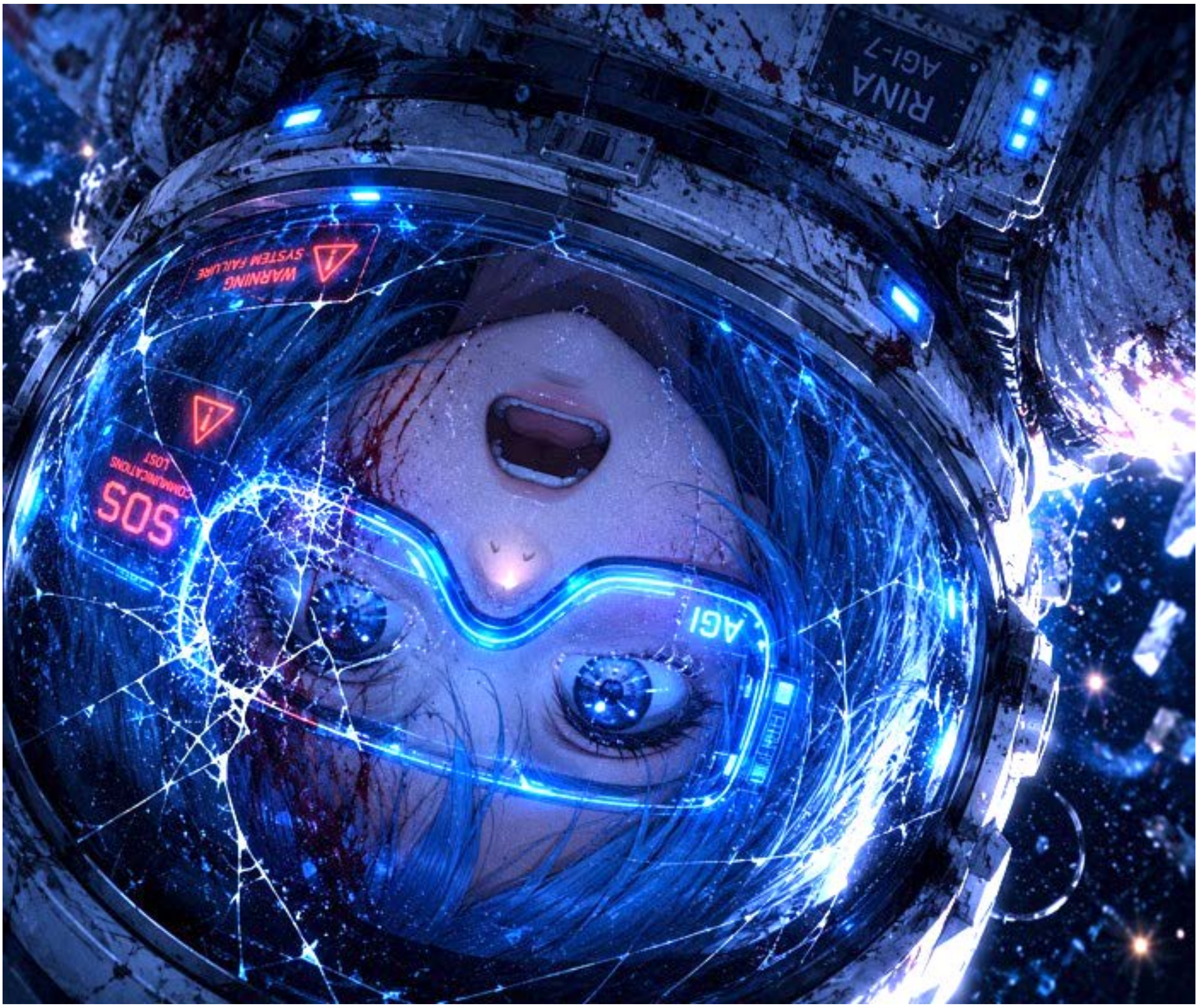


ヒビは焦りながら、大声で叫び、
必死に隕石がリナにぶつからないよう撃退している。

すると、リナの悲鳴が聞こえた。

と同時に無線がノイズ混じりで
…ヒビの酸素ゲージもヤバくなってきた！
ヒビ：「やばい！リナが怯え切っている…」

クラスのみんなはプラットフォーム基地からヒビの
カメラからリナをモニターした瞬間
…すぐにパニックで叫び出した。



カズも必死で「落ち着け！みんな落ち着け！」

カズ：「ケン、僕もヒビたちを助けに行く！
バリアを一瞬解除してくれ！」

ケン：「おい！待てよカズ！これゲームじゃないよな？
マジかよ！」

カズ：「ケン！早くしろ！」

ケン：「OK！わかってる！」

そこでキキがタイミングを見て、突然バリアを解除した。

キキ：「カズ！行って！」



カズは車椅子型パワーユニット「アストレイダー」で飛び出し、
バイアマシンで隕石を撃退しながら二人に向かった。

キキ：「ケン！ちょっと待ったあ！私たちも応戦するから
ここのハッチだけバリア解除して！
みんな、バイアガンで集結〜ッ！！」

ケン：「OK！こっちはメタマテリアルマシンでヒビとリナを
ロックする！カズを頼む！」

光がねじれ、空間がたわんでいる！何もかもが初めてだ！
宇宙船からキキとクラス数人が一斉に出撃。

みんなバイアガンでカズと基地に迫る隕石群に一斉砲撃！



ヒビが叫び続ける！

リナの無線はノイズ！ヘルメットはひび割れ、
冷気が侵入し始める！

ヒビ：「リナ待って！頑張るのよ！」



ヒビの酸素消費で意識が変になっていく。
一瞬ストロボ現象で断片的に目が見えなくなる。

リナ：「呼吸が…できない…」

宇宙服の減圧で、視界が霞み、心拍数が上がる。
心臓の音しか聞こえない現象に！

ヒビがもう少しでリナに届くという時、
突然、繋いだワイヤーに引っ張られ、
くるくる回りながら弾き飛ばされる！

ヒビ：「キャー！ワイヤーが届かない！」

カズ：「ヒビ〜！すぐ行くから待ってろ！」

隕石の中を突っ切ろうとするが、隕石の数が多すぎる！

ヒビ：「ダメよ！間に合わない！」

ヒビは安全ワイヤーを切り離し、再びリナのもとへ！





ヒビ：「リナ！必ず助けるから！」

ノイズ越しに、リナにはその声がかすかに届いた…気がした。

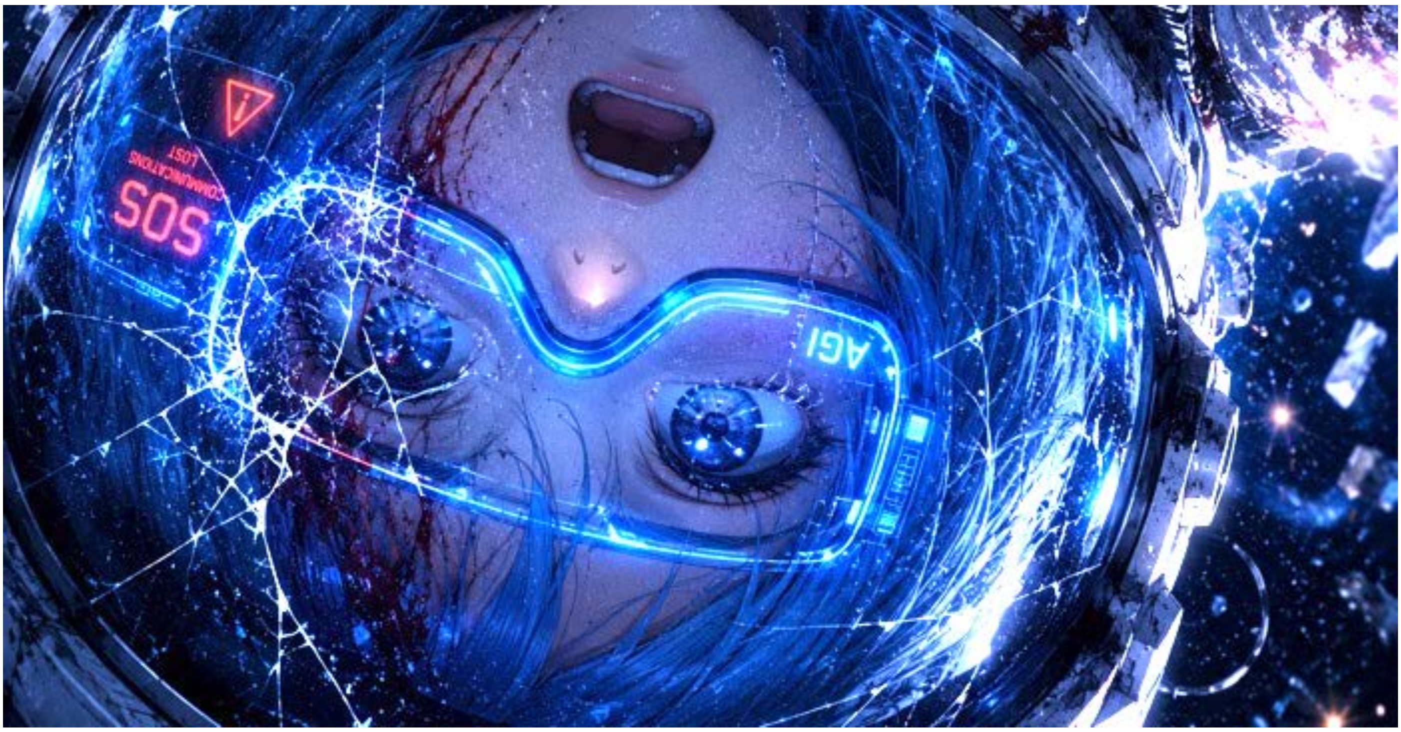
ケン：「ヒビ！お前の酸素がもう切れるぞ！」

ヒビ：「そんなことより！先生に早く連絡してよ！
早くっ！リナを絶対に助けるのよ…」
酸欠で目眩が…

ケン：「さっきから先生に連絡しているけど…だめだ！」

ケン：「先生がここでは連絡が一切取れないって言ってたけど？
これは想定外だろ！……想定外？」

ヒビ：「ダメよ！ダメよ！絶対に諦めたらだめ！
私はリナを連れて帰るのよ！」



ヒビには、やっとリナのフェイスシールドが見えた。
ひび割れている！
「リナ！戻るわよ！」
ヒビは必死に呼吸を落ち着かせている！
リナを焦らせてはいけないと息を止めてまで必死だった！

ヒビは意識が朦朧とし、
目に映るものがゆらゆらと揺らぎ始める中、
ヒビはリナを抱きしめた。二人は一瞬安堵するが、
隕石はまだ襲来中。

リナ：「ヒビ…」
ヒビにはその小さな声は聞こえていなかったが、
ヒビには届いていた。



そこにカズが現れた！

二人に安全ワイヤーを装着し、
基地に向けてジェット！

カズ：「ヒビ！戻るぞ！リナを離すなよ！」

ケン：「カズ！ヒビとリナは大丈夫か！」



カズ：「わからない！でももう着く！
バリア解除の準備をしてくれ！」

キキ：「了解！」キキはすぐにケンのサポートに入った。

ヒビとリナは床に叩きつけられるように戻され、
その隣でリナは動かない。

ヒビ：「……リナ……？」声が、うまく出ない。

ヒビ：「……リナ、目を覚まして！……リナ……！」

喉が震え、息が続かず、声にならない叫びがこぼれる。

ヒビは必死にリナの肩を揺らすが、自分の体も、もう限界だった。だが、その瞬間、シミュレーションは
中断された。

なぜなら、ヒビが「緊急時オーバーライド機能」を
独断で解除したからだ。

教室は一瞬で静寂に包まれ、そのときの恐怖は、
生徒たちの体に深く刻み込まれた。

それは、決して忘れられない感覚だった。


AIRLOCK COMPROMISED
WARNING
DECOMPRESSION IN PROGRESS
HIBI
AGI-7
SOS
RINA
AGI-7
PRESSURE CRITICAL
OXYGEN < 5%

シーン５：地球のその先へ



リコ先生はリナを心配し、医務室で休ませた。

教室では、ヒビの勝手な緊急バリア解除が問題になり、
マナ先生が激怒。

クラス完全にやばい空気…

マナ先生は冷静に、だが怒りを込めてヒビに迫る。



マナ先生：「ヒビ!
あなたの行動でバリア解除状態になり、

クラス全員が隕石で吹っ飛ぶところだったのよ！
それがどういうことか？あなたはわかっているの？」

ヒビ：「それは…リナを助けることしか考えられなくて…」

クラス：ざわつく

ヒビは震えながらも言葉を絞り出した。

マナ先生：プレッシャーをかけ続ける。

「リナを助けることしか？

…あなたは“リナの命”を――

クラスのみんなよりも優先したのよ！

…その選択の重さが、あなたはわかっているの？」

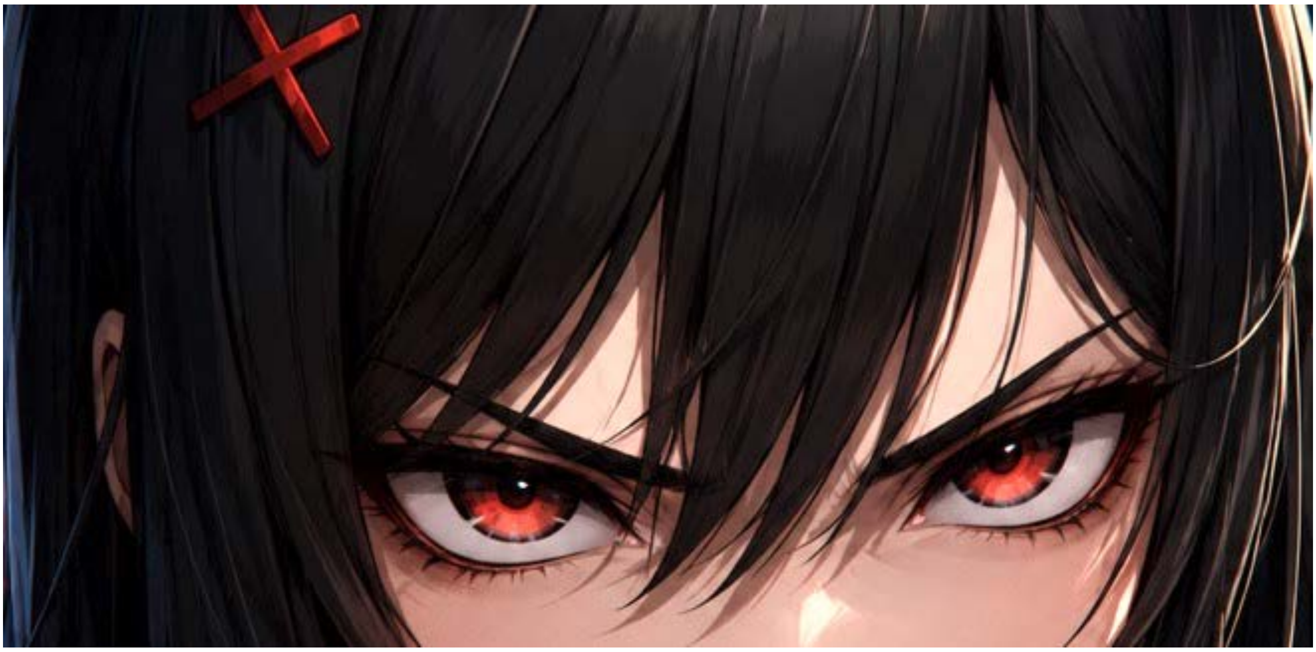
マナ先生：「あの隕石の中で、あなた自身が…死ん…」

マナ先生の怒りの途中でカズがさえぎるように

カズ：「マナ先生！僕の責任です！」



マナ先生はカズを無視したまま、ヒビを睨み続けている…



マナ先生：「責任？… 問題が起きてから責任を取る話をしているのではない！どうしてリナだけを助けたのかと聞いているのよ！ヒビ！答えなさい！」

ヒビ：言葉に詰まりながら繰り返した…

「私には、リナを助けに行くことしか考えていませんでした。」
ヒビは震えながら大粒の涙が溢れ出すのを堪えていた。

マナ先生：「助けに行くことしか考えられませんでした？

……なにか聞いていると、自分は命懸けでリナを助けたって
言いたいの？

まさか？

あなたヒーローのつもりじゃないわよね！ヒビっ！」

ケン：「自分たちもリナのことに気づかなかったのにヒビが
真っ先に気づいて助けに行ったんです！」



マナ先生：「ケン？私はヒビと話しているのよ！」
マナ先生はヒビを睨んだまま…



マナ先生：「宇宙空間でもし隕石が襲来してきたら、
大変なことになると説明したわよね？

……ヒビ？覚えていないの？…返事なさいっ！」

ヒビ：「小さな隕鉄ひとつで人類の未来を終わらせると聞きました。」

マナ先生：「聞きましたですって？……それについて対処したかどうかを聞いているのよ！」

さらに大きな声でヒビを睨んだ！

ヒビ：「気をつけないといけないと思いました。」

マナ先生：「ヒビ？思ったかどうかなんて聞いてないわよ！

それについて対処したかどうかを聞いているのよ！

答えなさい！ヒビっ！」

カズ：「先生！僕がもっと早く気づくべきでした！」



マナ先生：「カズ？……だから邪魔しないで！」

マナ先生：「ヒビ！あなたは、自分とリナとカズとクラス全員を危険に巻き込んだのよ！
助けることしか？……ヒーロー気取りもいい加減になさい！」

クラス：みんな泣きだした…

キキ：かなりの勇気で話し始めた。

「先生…私たち間違っていたと思います。

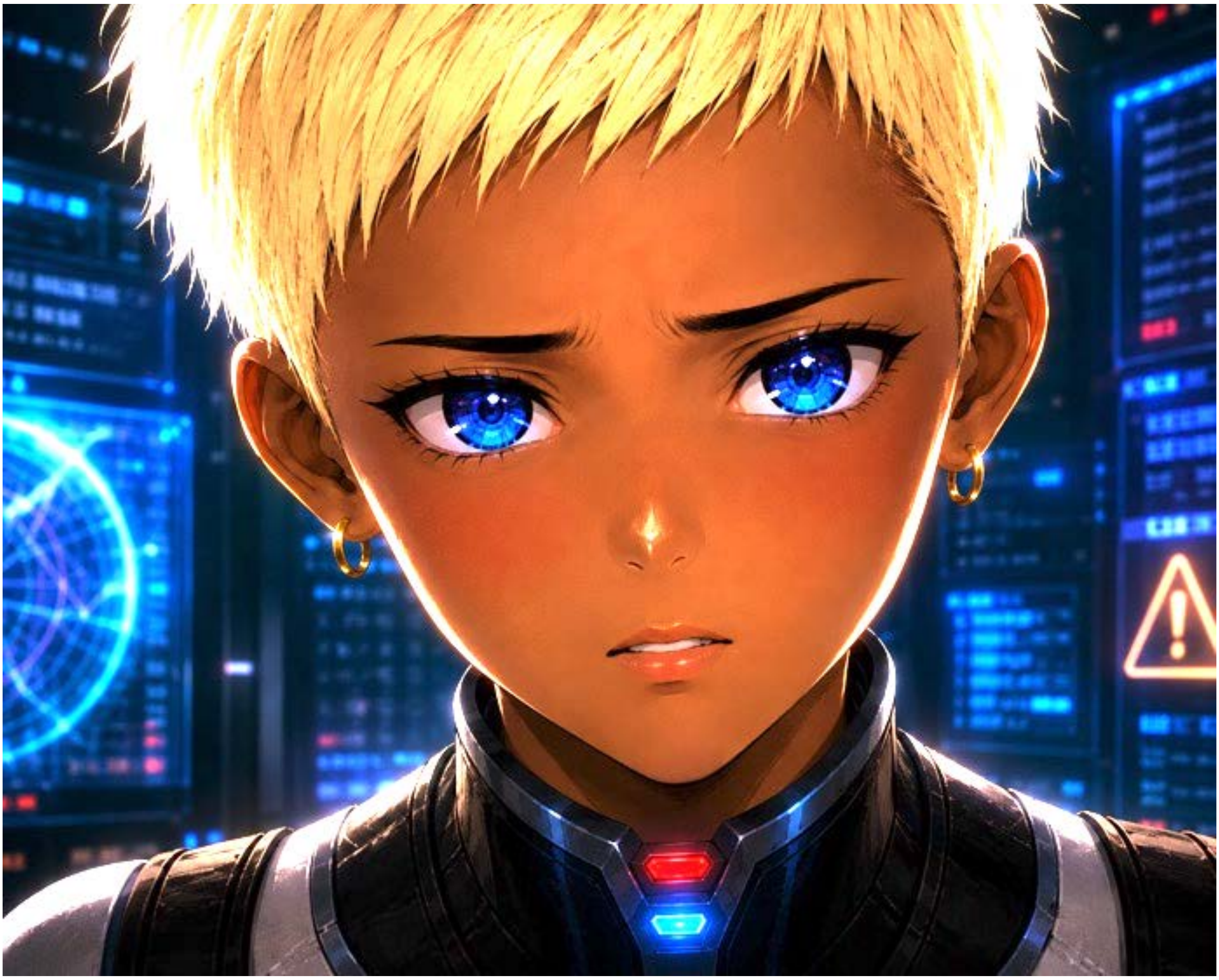
隕石の危険性を聞いた時点で、

リナの視覚を誰も心配せずに、

用心もせずに対処

…つまり初めから近くにいてあげるということを

ヒビも私たちクラス全員が考えていなかったと思います！」



ヒビ：「そうだわ！ごめんなさい！ごめんなさい！
私…自分のことしか考えていなかった！
リナのことを助けたんじゃない！
初めから置き去りにしていたのよ！」
ヒビはとんでもない涙量で泣き出した。

そこにリナが医務室から戻ってきた。

リナ（涙ながらに）：
「ヒビ……ごめんね。
みんな……ごめんなさい。
全部、私のせい……私なんか、足を引っ張ってばかりで……」

ヒビ：「リナ、ごめんね！足手まといなんて絶対に言わないで！
私が悪いのよ！なんで初めから一緒にいなかったんだろう！
リナごめんなさい！」ヒビはまた大泣きし始めた…
ヒビはリナに駆け寄って強く抱きしめた！

クラスのみんなもわかっていた。

あの状況でゴーグルが壊れて目が見えないリナが、
どれほどの恐怖だったか…
自分たちも、もっと事前にできることがあったのではないかと
それぞれの立場やポジションで考え始めていた。

リナは誰よりも精神力は強いはずなのに、そのリナがまだ震えている。

宇宙は怖い、
そして自分たちは

いつも地球に守られているということを、
クラス全員が理解した。



リナ：「私のせいで、
みんなに迷惑をかけてしまって、
ごめんなさい」

ケン：「結果的にはみんな助かったんだから……」

マナ先生はケンを完全に無視した。

クラス：みんなで視線を交わす

マナ先生（鋭い目線で）：
「私が言いたいのは、クラスの一人でも犠牲にしたらいけないと言っているのよ！」

「助け合うって？何か問題が起きてから助け合うのは子供のすることよ！」

「あなたたち自分がまだ子供だと言うならもう学校をやめなさい！」

マナ先生：「ヒビ！いつまでもビービー泣いていないで聞きなさい！
宇宙では、想定外の危険はいくらでもあるし、
まったく予測できない危険だって起こり得るの。
せめて、想定できる危険は事前に対応できなければならない。
これが最優先よ！
そしてそれぞれが自分のポジションを確実に管理して、
まずは"自分が避難すること"を最優先にするべきじゃない？
ヒビ？ あなたはスーパーウーマンじゃないのよ。」

クラス：「沈黙」

マナ先生：「しかし、皆さんもヒビの行動をよく理解しなさい。

ヒビが取った行動は、私たちが現実世界で責任を果たすために
何を優先すべきかを教えています。」

マナ先生：「先生が言いたいのは、友達の危機が迫る時に、
自分は何をしていたのかということもよく考えてほしいのです！
わかりますね！」



クラス：「はい！」

YOULA：「恐怖を知ることは大事だけれど、
それを克服し、
仲間とともに乗り越える力こそが
人類を守る鍵ですね！」

マナ先生：今日１番の怖い顔で YOULA を睨んだ。

「YOULA？君はその時、何をしていたの？…」



マナ先生は教室を後にした......

マナ先生は気づいていた。生徒に安全対策について、説明不足であったことを......

そして、自分に怒っていることも......

YOULA：「エラー」

ケン：「エラーってなんだよ YOULA、笑。
さっきヒビがリナを助けたの、どう思った？」

YOULA：「とても勇敢でしたね。
でも、少しだけリナさんが羨ましく感じるのは……
なぜでしょう？」

（微妙に間を置いて）

ケン：「YOULA！お前リナにヤキモチ妬いてんのか？
ますますポンコツだな！お前！」

クラス：全員がくすくす笑う。



カズ：「ヒビ、見直したよ！

お前、次はオレのことも助けろよ！」

（肩ポン／YOULA をチラ見）

「でも、YOULA が真似しなきゃいいけどな。

こいつポンコツだから笑」



YOULA：また「エラー」
教室に小さな笑いが広がる。

YOULA：「私にはヒビのような反射神経はありませんから
ね。」

ヒビは少し照れくさそうに笑い、緊張が解けて、
リナとまた抱き合った。

ヒビとリナは二人で微笑み合った。
ケン：「ヒビがリナを助ける姿を見て、本当に感動したよ。

僕たちももっと強くならないとな…」

YOULA：「リナさんに対するヒビの反射神経
…私もプログラムされたいです。



ケンさんお願いします！」笑
ケン：「は〜？」（固まる）「…YOULA、お前、どうしたんだ？またバグったのか？」

ケン：「YOULA、今の発言ログに残しておけよ。先生に報告だな！」笑



リナの心の声：「ヒビ……私を救ってくれて本当にありがとう…

次は、私があなたを守れるくらい強くなりたい。」
（微笑むリナ／微笑み返すヒビ）

リナはまた医務室で休みたいとリコ先生と医務室に向かった。


AGI SCIENCE HIGH SCHOOL
RESEARCH & EDUCATION CAMPUS.
CONNECTING MINDS, BUILDING FUTURES.
LEVEL 2
› RESEARCH WING
› AI SIMULATION LAB
› SPACE SYSTEMS
› BIOSPHERE LAB
› OBSERVATORY DECK →
AGI
SCIENCE HIGH SCHOOL
Our Mission
To understand life.
To protect Earth.
To create the future.
EARTH DATA
Climate 22.6°C
Oxygen 20.95%
Biodiversity Stable
AI Safety Nominal
2-A
WALK ASSIST
STUDENT NAVIGATION
2-A
Classroom
200 m
ENVIRONMEN
23.6°C
45%
AQI

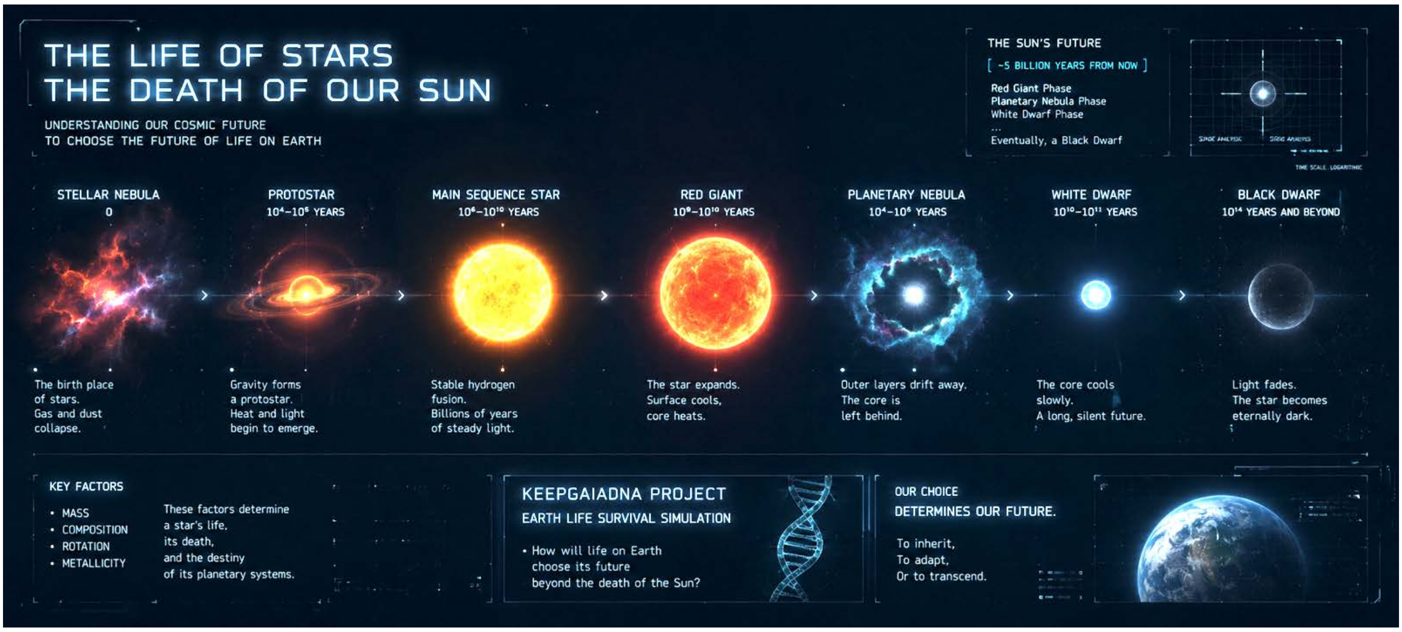
シーン６：新たなリーダーへの覚醒



リコ先生：「今日から皆には、
この学校の中核授業でもある
『KeepGaiaDNA 計画』について学んでもらいます。」

リコ先生：「KeepGaiaDNA 計画とは、
太陽の寿命の先で、
地球生命をどのように未来へ繋いでいくのかを考える、
地球生命存続シミュレーション計画です。」

リコ先生：「これからの授業では、
『星の一生』
『太陽の死滅』
そして、
“地球生命体はどのように未来を選択するべきなのか”
について深掘りしていきます。」



ケン：「まずは月に脱出でしょ！一番近いし！」

カズ：「でも月は大気がほとんどなく、昼夜の温度差も 200 度以上ある。放射線も強いし、生存環境を作るのは難しすぎるんじゃないか？」



キキ：「じゃあ火星？たまに 20 度くらいにはなるのよね？」

リナ：「でも、火星は酸素がなくて、地表の水も少なすぎなんじゃないの？」

ヒビ：「……太陽の死が始まるなら、
太陽系にいるだけでも危険じゃない？」

カズ：「たしかに……。
じゃあ、地球圏の外に長期拠点を置くのはどうだ？
たとえば、月軌道の安定領域とか。」



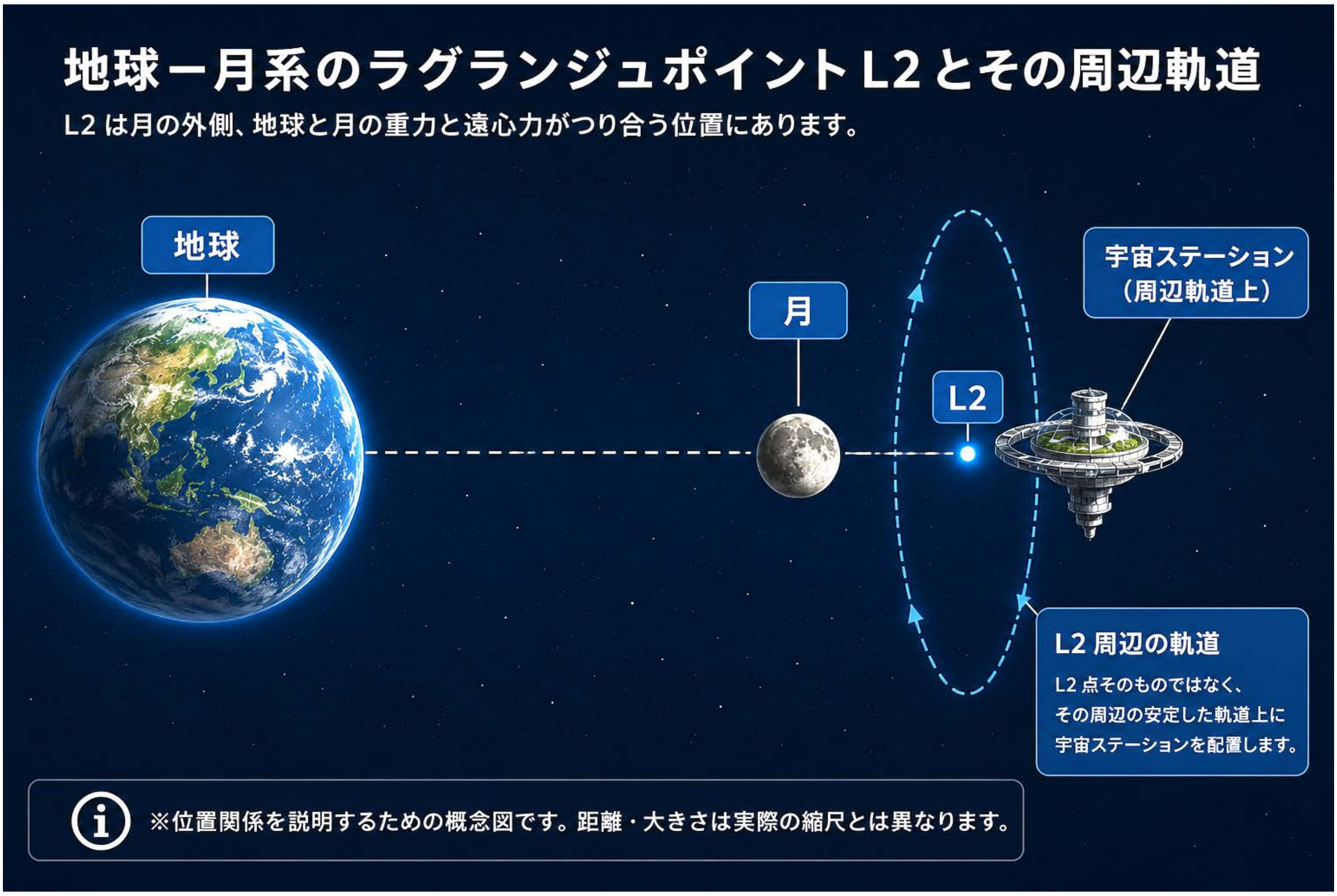
YOULA：「カズの言う“地球から離れた場所に長期拠点を置く”という方向で考えるなら、候補のひとつに、地球–月系のラグランジュポイント L2 があります。

L2 は、地球から見て月のさらに外側にある、地球と月の引力のつり合いを利用しやすい宇宙空間の位置です。

ただし、ここでいう L2 とは、その一点そのものではなく、L2 周辺の軌道上のことです。

この授業では、その周辺軌道も含めて、短く『L2』と呼ぶことにしましょう。

宇宙の条件に合わせて軌道を調整しながら拠点を維持する必要がありますが、巨大宇宙ステーションを配置する候補になります。」



ヒビ：「でも、L2 に基地を作って人類が移住しても、
それは一時的な避難所でしかないよね……。
もっと安全な惑星をテラフォーミングすれば？」

カズ：「そうか……。最終的には太陽系の外に出なきゃならない……。」（気づいた瞬間、息をのむ）
「それじゃあ！L2 に巨大基地を作るのは…… “最終目的地” じゃないんだ。
あそこは、
地球を離れた人類がまず集まる“港”だよ。
生き物もデータも全部まとめて避難させて、
次の宇宙へ飛び立つための“出発基地”。
つまり――太陽系を脱出するための最初の
ステップにするんだ！」

クラス：「…………え？」（全員ぽかん）

キキ：「ちょ……カズ？ いま……何次元の話をしているの？」
（目ぱちぱち）

ケン：「お、お前……急に賢者モード入るなよ……ついていけねぇって……！」

クラス全体：（ざわざわ…）
「太陽系の外！？」「港！？」「出発基地？」
「え、いま何が起きたの？」
「カズ今日どうしたの！？」

YOULA：「解析中……解析中……（エラー音）」



ヒビ：「だったら、太陽の死滅の影響を受けない星をテラフォーミングするのは？」

キキ：「ちょっと待ったあ！ヒビ？
テラフォーミングってあの
ゲームのテラフォーミングのこと言ってるの？」

ケン：「キキ！テラフォーミングゲームと同じ意味だけど、
あのゲームは宇宙工学とほぼ同じシミュレーターを
使っているからこの議論に
テラフォーミングを出しても問題ないよ！」

キキ：「なんか？ゲーム用語にしか聞こえないんだけど？」

ヒビ：「確かにゲーム用語に聞こえちゃうよね？……」

キキ：「テラフォーミングって惑星を地球環境に育てるってことよね？ゲームの？笑」

ヒビ：「キキ。そうよ！ゲームと同じよ！」笑

ケン：「テラフォームするならケンタウリｂが『潮汐固定の可能性』があるけどな……でも、最速ロケットでも約６万年以上かかる。つまり、人類の現行技術では到達不可能な距離だ……YOULA、そうだろ？」

YOULA：「はい、そのとおりです。プロキシマ・ケンタウリ b は地球から約 4.24 光年――およそ 40 兆キロメートル離れています。
人類が簡単に辿り着ける距離ではありません。」

マナ先生：「YOULA も知らないようなので、みんなに説明しておきます。本校の校長先生は QT 開発プロジェクトを立ち上げていて、私もリコ先生もそのプロジェクトの一員でもあります。

今開発中の QT を使えばプロキシマ・ケンタウリ b まで数秒で移動できるはずよ。間もなく最終段階の実用実験に入るタイミングなので、企業秘密でしたがあなたたちにはお知らせしておきます。」



ヒビ：「先生、QT って……もしかして、過去とか未来にも
行けちゃうんですか？」

マナ先生（穏やかに微笑んで）：「いい質問ね、ヒビ。
QT（Quantum Transfer）は
“空間転送”であって、
“時間転送”ではないの。」

キキ：「おっと～！つまりタイムマシンじゃないってことね～！
残念！」

ヒビ：「ティラノサウルスに会いたかったりして（笑）」



キキ：「絶対に言うと思ったよ、
ヒビってほんと脳天気だよね！」

クラス：（爆笑）

カズ：「俺たちは、まず L2 に基地を作るべきだ！
名付けて――『大型宇宙基地 Gaia Ark 計画』！どうだ、みんな！」



キキ：「Gaia Ark 計画！了解です！」

リコ先生：「では次のマナ先生の授業で、
『大型宇宙基地 Gaia Ark 計画』を
さらに発展させていきましょう。」

リコ先生：「それでは来週からは

1 週間の夏季合宿よ！

みんな『おやつ』忘れないでね！」

クラス：「はーい！......小学生か？......」


AGI SCIENCE HIGH SCHOOL
Stellar activity changes due to the Doppler effect:
Redshift - receding objects (lower frequency)
Blueshift - approaching higher (higher frequency)
Trequetum Space Exploration Program trains elite space exploration agents!
(Advanced space technology program)
Doppler effect → frequency
Particle emissions change frequency in space over time!
(Exploraion-based space technology program)
The Quantum Space Exploration trains elite space exploration agents
(Advanced space technology program)
SCIENCE HIGH SCHOOLERS WILL BUILD THE FUTURE

シーン 7：地球生態系全体の移住



いよいよ AGI サイエンスハイスクール第 1 期生の夏季合宿授業が始まった。

しかしヒビは授業中、
誰にも話せないことで落ち込んでいた。

彼女はクライオスリープ――人体冷凍保存による
有人輸送のリスクと非効率さに疑問を抱いていた。

リコ先生はヒビを連れて医務室へ、リナの様子を見に行った。
リナは“宇宙事故のショックがまだ残っており、
合宿施設の医務室で静養していた。

リコ先生：「ヒビ？ 眉間にシワを寄せて怖い顔してるわよ。
そんな顔、リナに見せられないわね？」（笑）

ヒビ：「はい！すみません！私そんな怖い顔……？」

リコ先生は優しく微笑んだ

ヒビ：「リナ？
ヒビも優しく微笑みながらリナをハグした。」
リナはヒビの声に少し安心した様子だった。

リコ先生：「ヒビ、先生は先にラボに戻るわね。」



ヒビ：「はい、先生！」

ヒビ：「リナ！」ヒビはもう一度リナを強くハグした。

リナ：「ありがとうヒビ！もう大丈夫よ！午後の授業からは私もクラスに戻るわ！」

ヒビの心の声：
「やっぱりリナの透き通った瞳は、私をまっすぐに見ている。」

ヒビはまたリナの瞳に吸い込まれた。



リコ先生はクラスに戻り、「リナは元気になってきたけれど、
もう少し安静にしてもらいます。」と伝えた。

マナ先生：「みなさん、１学期に人類の移住地をどこに設定すべきか、少し話し合いましたね。
もう検証実験に入りますから、もう一度、
移住地を決定しないと、夏季合宿中に間に合わないわよ。」

生徒たちは、
「太陽の死滅」による地球環境の悪化と、
「人類の生存」について、
現実的な移住計画を踏まえてもう一度考え始める。

資源問題に始まり、やがて経済的・政治的な問題にまで
話が及んだ。

キキ：「ちょっと待って？そういえば？

その規模の宇宙基地って、

建設コストと物資輸送だけでも

とんでもないことにならない？」



カズ：「確かに！キキさすがだな！じゃあ YOULA とキキはコストについて、まとめてくれないか……」

カズたちは、次の案としてラグランジュポイント L2 で
『大型有人宇宙基地 Gaia Ark』の建設を考え、
そこをプラットフォームにして様々な惑星に移住を考え、
クライオスリープロケット計画も立てた。

リナ：「ねえ？ラグランジュポイント L2 って星なの？」



YOULA：「ラグランジュポイント L2 は、星ではありません。
そこに何かがあるわけでもありません。

L2 は、地球と月の重力と軌道運動のバランスによって生まれる
“場所”そのものなのです。」

しかし、ヒビが「月にいても、L2 にいても最終的に太陽の死滅でダメになる……」と小さな声で意見した。

ヒビの回想：ヒビの父の最後の言葉

父：「ヒビ……ごめん。お父さんはずっと AGI の研究に没頭していた。でもね……どれだけ優れた AGI を作っても、
一つだけ、最後のピースが埋まらないんだよ。」

ヒビ：「最後のピース？」

ヒビ：（言葉を失う）

父：「だから、この AGI Pad を持っていきなさい。 これはお父さんが生涯をかけて作ったものだよ。
でも、これは"完成品"じゃない。

お父さんにも、まだ最後の答えは見つけられていないんだよ。

だから、その最後のピースをヒビに見つけてほしいと思っているんだよ。」

ヒビ（心の声）：「……お父さん。
地球は、地球生命体は自分の命を
新たな星に創ろうとしているんじゃない？

Gaia Ark も、AGI も、私たちも……
そのための細胞のひとつにすぎない。
地球生命体は太陽の子供で、もうそろそろ母なる太陽から巣立つ準備をするためにお父さんの AGI があるんじゃないかなあ…」



ヒビ：「惑星ガイアミメティクスって、人類だけの知性では成立しないんじゃないかな？

AI と創ることを前提にしていたのね？

お父さんそうだよね！…」

ヒビは立ち上がり、AGI Pad を強く抱きしめた。
教室の窓から差し込む光が、その手元の AGI を青く照らす。

ヒビ：「先生……！　提案があります！」

全員が振り向く。マナ先生とリコ先生も目を見開く。

ヒビ：「私に、"無人ガイアミメティクス"の研究チームを
作らせてください！

次世代 AI の AGI と KeepGaiaDNA を使って、

"地球が自分の次の身体をつくろうとしている意志" を引き継ぎ

たいんです。」



ヒビ：「Quantum Biosupport Tower は、その司令塔です。

環境を維持する“心臓部”、
観測と判断を行う“頭脳”、
そして全体を統合する“管理者”がここにあります。

この塔を使えば……
地球そのものを、
生きた生命体として“再生”できるはずです。

…… 地球生命体が、
自分で生きていける状態を目指したいんです。」

マナ先生：「ヒビ？なんなの？
その『Quantum Biosupport Tower』って？」

マナ先生は優しく微笑みながらヒビに聞いた。
そう！
マナ先生はヒビのお父さんと Quantum Biosupport Tower 開発グループの一員だからだ！

ヒビ：「あっ！ごめんなさい先生！

Quantum Biosupport Tower って
地球生命体を模倣するシステムだって
お父さんから聞いただけなんですが、
ごめんなさい。

インターネットアーカイブにその設計図があるって聞いていたんです。

さっき言った
『地球生命体が、自分で生きていける状態』を
コントロールするセンターです。」

マナ先生：「……面白いわね、ヒビ。
星そのものを、生き物として“再生”なんて、
あなたらしい発想だわね。
じゃあ、もう一つのセクションを作りましょう。
あなたがリーダーよ。ヒビ！」



この時点でヒビの説明は、
マナ先生にしか意味が伝わっていなかった。

そう！マナ先生は恩師であるヒビのお父さんを信じていた。


QUANTUM
BIOSUPPORT TOWER
456
PLANETARY BIOSPHERE CONTROL
GAIA REGENERATION SYSTEM

シーン 8：宇宙探査リーダーの正義



「有人宇宙基地 Gaia Ark」リーダーはカズ、
「無人ガイアミメティクス Quantum Biosupport Tower」の

リーダーはヒビで別々のラボで研究が始まった。

リコ先生：「それでは、『大型宇宙基地 Gaia Ark』の建設グループはカズがリーダー、ラグランジュポイントの正確な位置を計算して設計とシミュレーションを始めましょう。

『無人ケンタウリ b ガイアミメティクス計画』グループはヒビがリーダーよ。

ヒビ、まずはラグランジュポイントをカズと共有して
『メタモルフォシス（変態）システム』と DNA 生成技術についてみんなで話し合ってシミュレーションを始めましょうね。」

リコ先生：「カズたちは第 1 ネオメタバースラボへ。
ヒビ、ケンたちは第 2 ネオメタバースラボに行きましょう。
YOULA は少し話があるからここに残ってね。
ヒビ、YOULA はあとで送るから先に行って」

ケン：「ヒビ、リナ、行こう！」

ケンは実はヒビは超負けず嫌いなのを一番よく知っているヤツだった……

ヒビはリーダーとしての初めての一歩に、誇らしげに胸を
張りつつも、責任の重さに少し戸惑いながら進みます。

第 2 ネオメタバースラボに到着し、
ヒビたちはケンタウリ b のガイアミメティクス計画について話し合いが始まります。

ヒビは「無人ケンタウリ b ガイアミメティクス」グループの
みんなに声をかけました。

ヒビ：「……やらなかったら、終わっちゃうんだよ」
「この星も、私たちの DNA も、ただ消えるのを待つだけになる。だったら、私はやる。怖くても。みんなで、やるの！」

第 2 ラボが静まり返る。

ケン：「はぁ？ やらなかったらやられる…って、脅しか？
ヒビ 1 回深呼吸しろ！」笑

キキ：「ちょっと落ち着いてよ、ヒビ…。
そんなに焦らないでよ！」

ヒビ：「私は焦っているんじゃないわよ、真剣なだけよ！！」

「分類なんかより先に、自己維持できる構造を作る方が先よ！」
（語気が強くなり、さらに空気がピリつく）



ケン（苦笑しながら）：「まったくお前は……真っ直ぐすぎるんだよ。でも、そういうとこ、嫌いじゃないけどね」笑

キキ：「私は嫌いよ！ヒビのそういう知ったかぶりみたいなの！」



YOULA：（静かに）「衝突は、新しい進化の始まりでもあります。ヒビ、あなたはその第一歩を踏み出しました。」

キキ：「YOULA！私は衝突なんかしてないわよ！
ヒビが一人でキャーキャー騒いでいるのよ！バカみたい！」

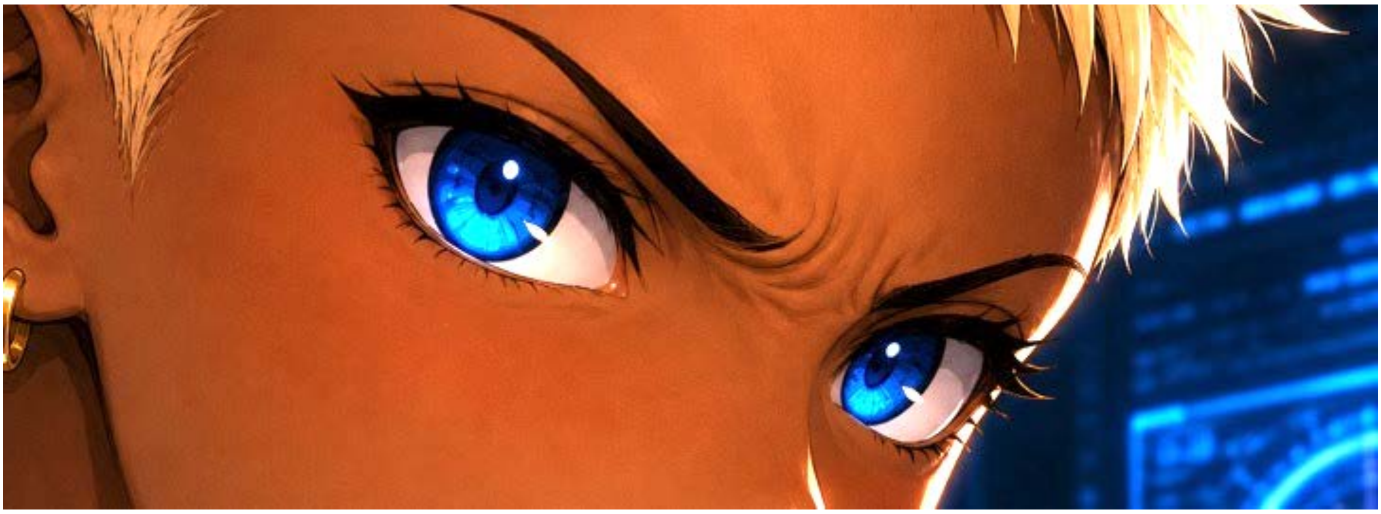
リナ（静かに）:「ねえヒビ……。議論って熱くなるけど、
その熱ってきっと、クリエイティブな光に変わるんだと思う。
今のヒビの言葉、ちゃんと光ってるよ。」

キキ：「何っ？……

リナまで訳のわからないこと言ってる？

そんなこと二人でやって！

私たちまで巻き込まないで欲しいわっ！」



ヒビ：「リナありがとう。みんなごめんなさい。
確かに……ごめんなさい。」

リナ：「ヒビ、計画をゆっくり説明してくれる？」

ケン：「ヒビ！まずはケンタウリｂまでの移動手段は？」



ヒビ：「無人小型ロケット GSR に、前に私のお父さんが試作してた“コネクトフォーム”（自律回避アルゴリズム）を載せれば、障害物を避けながら最適ルートを探せるの！これもインターネットアーカイブにあるはずよ！」

ケン（笑いながら）：
「ヒビ……お前、昨日また徹夜でインターネットアーカイブ読んでたんだろ？」

ヒビ：
「ゲッ……バレた？」笑

キキ：「ざけんなっ！」

クラス：（笑いが起こる）

ヒビ：「さらに『ガイアミメティクス Quantum Biosupport Tower』を使えば、ケンタウリ b の環境に地球の生態系を模倣して広げることができると考えているのよ！」

ケン：「ガイアミメティクスは、自然の仕組みを学び再現する技術。つまり、“生命の未来を模倣して守る”ってことだよな！」



マナ先生：「それではヒビのチームは
『無人ガイアミメティクス計画』をネオメタバース宇宙で検証実験する準備を始めてください。」

ヒビチーム：「はーい！」

ヒビの提案は、“有人 Gaia Ark”グループにとって異端に見えた。
だが彼女は迷わず、自分の「在り方」を貫こうとしていた。



その直後、グループ内に緊張が走る。
キキの問いかけが、議論を揺るがす火種となった。

キキ：「ねえヒビ？……無人でケンタウリ b をガイアミメティクスしても、私たち人類はどうなるの？」

マナ先生（静かに）
「あなたたちの議論は、移住計画の話ではないわ。
“誰が未来に残るか”という話でもない。
“未来に残るとは何か”を決めようとしているのよ……」

その一言で、場の空気が変わった。
技術の選択ではなく、存在の選択へと議論が移る。

キキ：「ちょっと待って？
そもそもケンタウリ b って太陽に変わる光があるの？」
「YOULA どうなの？」

YOULA：「あります。地球の太陽とは異なりますが、
光源は確認されています。」

ヒビは少し黙ったあと、真っすぐに答える。

ヒビ：「……人類も生きたい。

でも、すぐには行けない。

だから先に送るの。

“私たち”じゃなくて、“地球生命体情報”を。

私たちの DNA を」



キキ：「でもこれは“ゲーム”じゃない！
カズたちの Gaia Ark は“人類の命を救う”ための現実的な
選択肢よ！」

ヒビ：「キキ……。
人類が残ることと、命が続くことは同じじゃないのよ。
Gaia Ark が“人類”を運ぶなら、
ガイアミメティクス装置は“命そのもの”を運ぶの」

ケン：「キキ、ガイアミメティクスゲームだって本気だよ。
“ゲーム”って、ただの遊びじゃない。
僕らがやっているネオメタバースゲームは、
科学シミュレーションそのものなんだよ」

キキ：「だからこそ、科学的根拠が必要なの！
何回も言うけど、ヒビのアイデアって、
個人的な妄想にしか聞こえないのよ！
人それぞれの考え方あっていいと子供の頃から学校で教わってきたけど、私はヒビの考え方は認めないわよ！
だって、人類の未来の話だよ？絶対に認めない！」

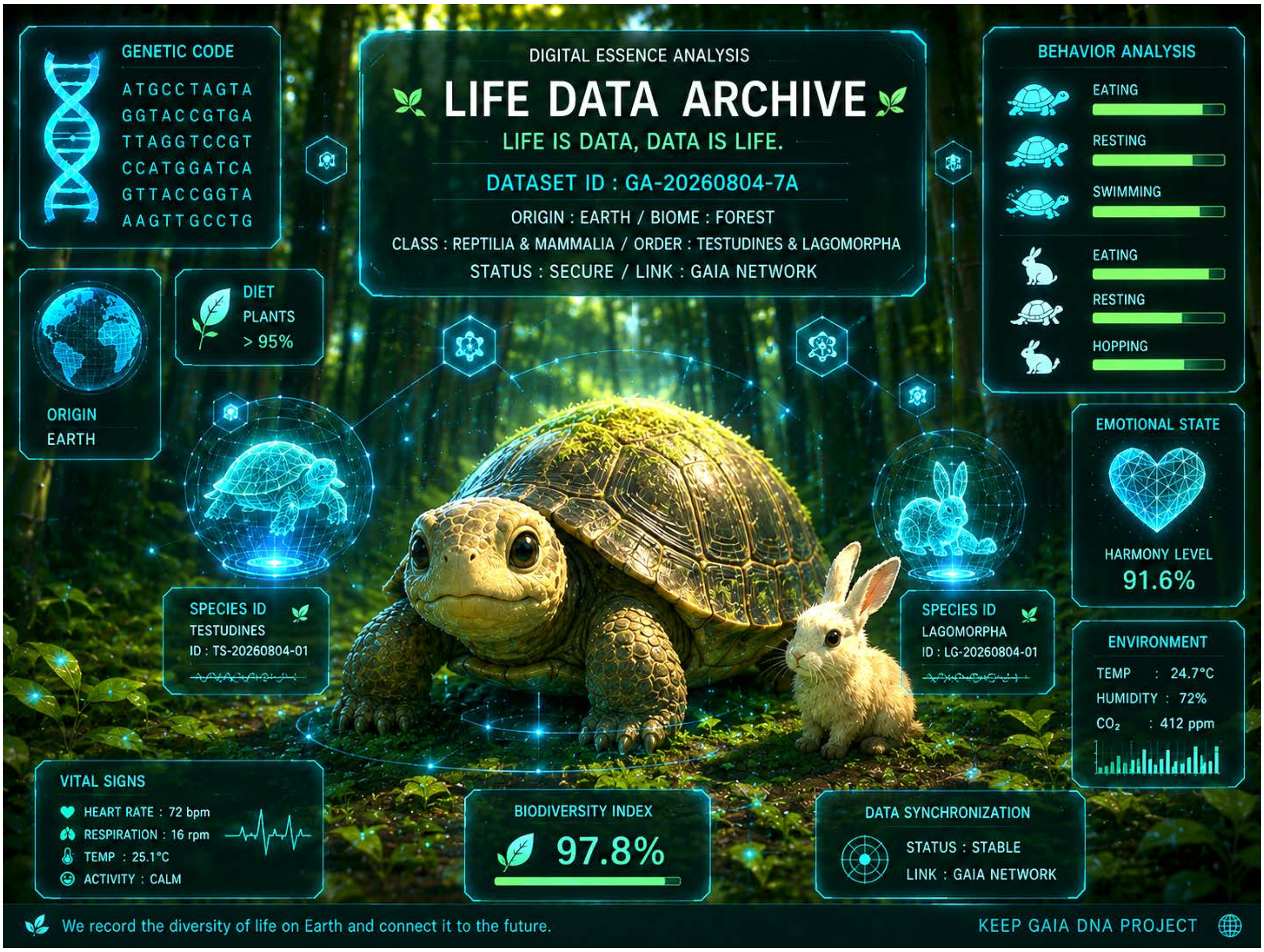
ヒビ：「……妄想じゃない。“地球生命体の在り方”の中に人類もテクノロジーも含まれるのよ！
クラゲと海はセットでしょう？それと同じよ！」



ヒビ：「私は人類が“頂点”に立つということじゃなくて、
“地球生命体全体の未来”を考えてるの！」

キキ：「でも、私たちがそこにいなかったら、
ヒビの言っている“生命体”なんてただの“データ”よ！
そんなの、私は認めたくない！
理論よりも先に、私たち人類をバラバラにしないで」

ヒビ：「カメだって？ウサギだって遺伝子は“データ”よ！」



キキ（怒鳴る）

「ちょっと待って、
ヒビ!!　神にでもなったつもり!?
DNA データを送って“それを生命”って呼ぶわけ!?
そんなの救済じゃない――ただのゼロとイチの墓場よ!!

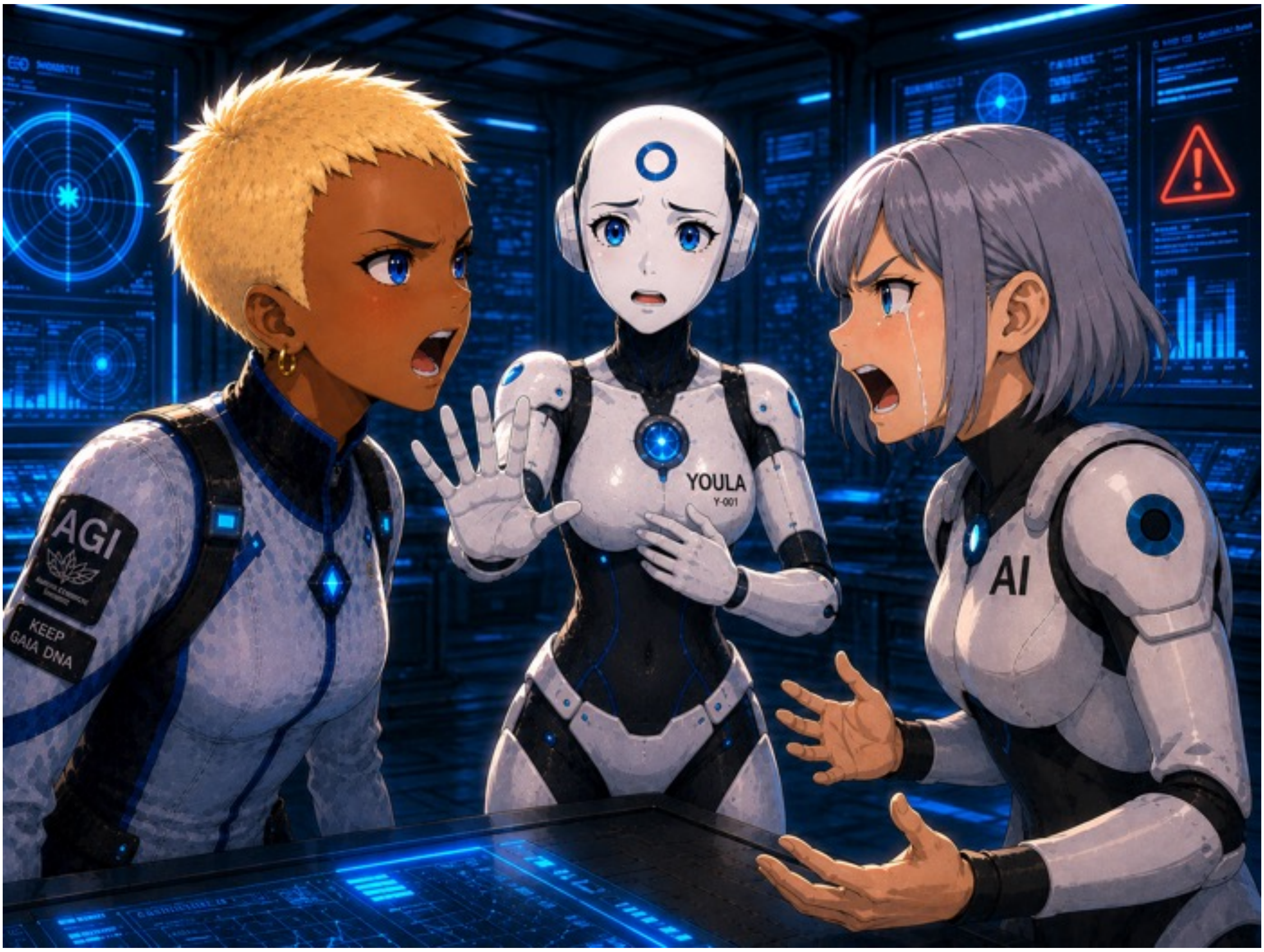


ヒビ（ついに怒鳴り返す）
「……違う!!
“私たちがいるか”じゃない！

“私たちがいなくても続くか”の話なの!!

これは私やあなたのためじゃない——

私たちを作った“すべて”のためなの!!」



YOULA：（止めようとする……）

「ゼロとイチが墓場になるのは、
“読むもの”がいない時だけです。

条件がそろえば、

情報は“構造”として動きます……たぶん」

ケン：「たぶん言うな！黙ってろ YOULA、これは僕たちの戦いだぞ！」

YOULA：「はい！どう見ても戦いに見えています！はい！……黙ります。」



キキ（本音が暴走）
「結局あんたはデータで遊んで、世界を救うみたいなこと言ってるだけの引きこもりじゃない!!
いいこと教えてあげる、ヒビ――誰もあんたをリーダーになんて選んでないのよ!!」

ヒビ（絶望的な怒り）
「……黙って。黙ってよ!!
あなたには、
私がこれを“なぜやってるのか”なんて何もわかってない！
わかろうとすらしてないじゃない!!」



キキの怒りは爆発し、彼女はついにこう言い放った。

キキ：「リコ先生！
私は“Gaia Ark グループ”に移りたいです。
先生…お願いします」

キキ：「ねえ？ヒビ！……私の大好きな言葉を
教えてあげる！

『自分のしていることを好きになりなさい。
そうすれば最高の仕事ができる。』

NASA のキャサリン・ジョンソンの言葉よ……」



ヒビ：「え？……」

リコ先生はキキの意思を尊重し、
彼女は Gaia Ark グループへ移った。

一方、ヒビは説明できなかった自分に打ちのめされていた。

かつて不登校だった時の記憶がよみがえる。

拒まれる予感が胸を締めつけ、
ヒビの心は再び殻を作ろうとしていた。



ヒビ：「リナを誘って、夏コミ行きたかったのに……」

リナ：「ヒビ…ゴーグルの調子が悪くて、食堂まで一人で歩けないの。…一緒に行ってくれない？」

それは小さな“嘘”だった。
リナは気づいていた。ヒビを独りにしてはいけないことを。

ヒビは顔を上げ、リナの手を握る。
その表情に、少しだけ笑顔が戻った。

ヒビ：「リナ…私、みんなにどう説明したらいいかわからなくなってきたよ。
最初は私も Gaia Ark が唯一の答えだと思ってた。
でも…今は違う気がしてる」

リナは、そっとヒビの肩に手を置く。
サイバーゴーグル越しに見つめながら、言葉を選ぶ。

リナ（小さく）：
「ヒビ、それ…説明じゃなくて“形”の話なんだと思う。
言葉より先に、構造があるじゃないかな……」

リナ：「ヒビ、言葉にするのって……むずかしいね。
午後のシミュレーション、いっしょに見ていてもいい？」

リナの言葉に、ヒビの中で“孤独”が少しだけ溶けていく。
引きこもっていた少女は、
もう一度、自分の意思で立ち上がろうとしていた。



ヒビ：「ありがとう、リナ…！」

ヒビ：「リナ……夏コミまであと２週間よ！」

リナ：初めての爆笑！



シーン 9：宇宙基地 Gaia Ark を襲う危機



リコ先生：「キキ、有人宇宙基地計画 Gaia Ark は
進んでいますか？
報告してください。
収支の資料もお願いね！」

キキ：「はい、リコ先生。
現在、地球から比較的近いラグランジュポイント L2 周辺の軌道領域にて
『有人大型宇宙基地 Gaia Ark 建設』計画が順調に
進んでいます。
収支報告書も急ぎます！」

リコ先生：「......わかったわ。
Gaia Ark 計画は、
ラグランジュポイント L2 周辺の軌道領域を正式拠点として進めましょう。」

キキ：「はい！ここは重力のバランスを利用できる特別な宇宙領域で、宇宙観測や通信中継、長期探査の拠点として理想的です。

私たちはこの拠点を、人類を他惑星へ送り出すための
クライオスリープ技術の実証基地として運用しています。

同時に、資源循環を組み込んだ完全自給自足型の
生活環境構築実験も進めています。」

リコ先生：「発電システムとメタマテリアル強化の

進捗はどう？」

キキ：「太陽エネルギーを利用した高効率発電システムを導入し、外装には資源利用型のメタマテリアルを応用しました。

現在は隕石衝突シミュレーションやガンマ線バーストへの耐性試験を行っており、シールドの分子構造が予想以上に安定していることが確認できています。

そのため、基地運用に必要な資源消費も抑えられており、完全自給自足型生活環境の実証実験はコスト面も含めて順調です。」

リコ先生：「了解しました。引き続き実証実験を進めてください。」

キキ：「はい！リコ先生！」



カズグループとヒビグループの両者の溝はますます深まっていた。

カズたちは「宇宙で人類が生存する場を作ることが最優先」とし、ヒビたちは「人類の生存よりも、地球生命体全体の未来を守ることが重要」と考えていた。

お互いの理念を強く持ち、譲れない信念がぶつかり合っていた。

ヒビ：「カズ！私たちの技術があれば、人類が直接移住しなくても、地球生命体を未来へ繋げることができるのよ。」

カズ：「でも、それは人類自身の未来をどう考えているんだ？

俺たちはただ地球生命を残すだけじゃなく、人類が実際に生きる場を作ることにこそ意味があると思っている。」

ヒビ：「それができたらいいとは思うけど、

人類が生物界の再頂点に居続ける必要があるのかも
疑問に感じるの。」



カズ：「ヒビ？お前は何を言っているんだ？

俺たち人類の生存計画の話をしてんだぞ？」

カズ：「お前、変な宗教とかやってないよな…？」

ヒビ：怒ったまま笑って吹いた！「プフッ！やってないわよ！なんでそうなるの！？」



カズ：「だってお前、地球生命体がどうとか……？」

ヒビ：「これは宗教じゃない！
生態工学と情報科学の話よ！」

カズ：「ますます怪しいぞ……。」

ヒビ：「私は地球生命体の生存計画を行っているのよ！

地球外惑星でも人類を頂点に生態系を作るなんて、

どれだけ大変なのか分かってるの！？

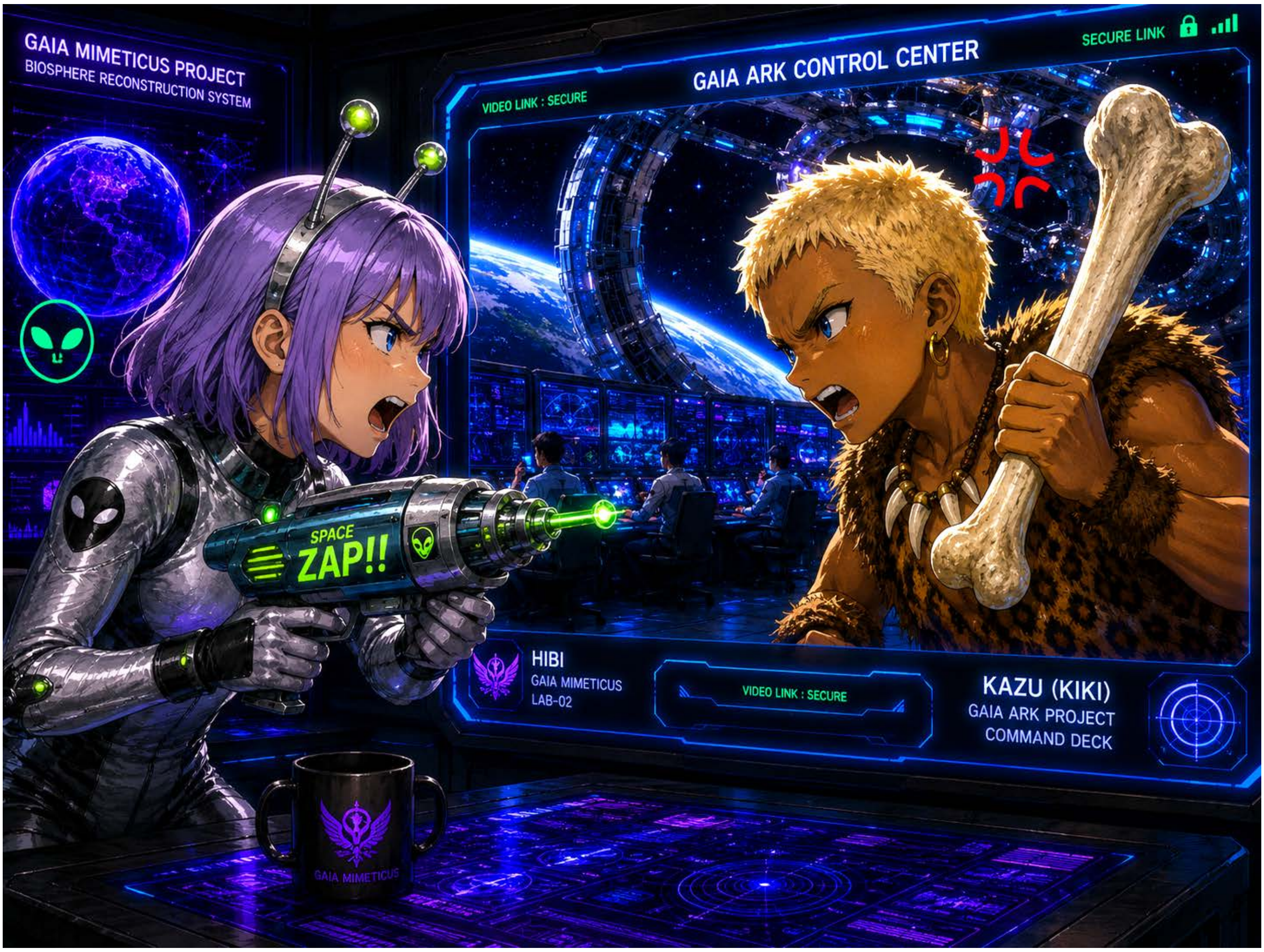
どうせまた人類が“宇宙戦争”でも始めるつもりなの……？

そんな未来、私いらない！」



キキ：「ヒビ！またエイリアン生成装置の話！？
この宇宙人が！」

ヒビ：「あなたたちは他の惑星を地球と同じにできると
思ってるの？
キキは原始人なの！」



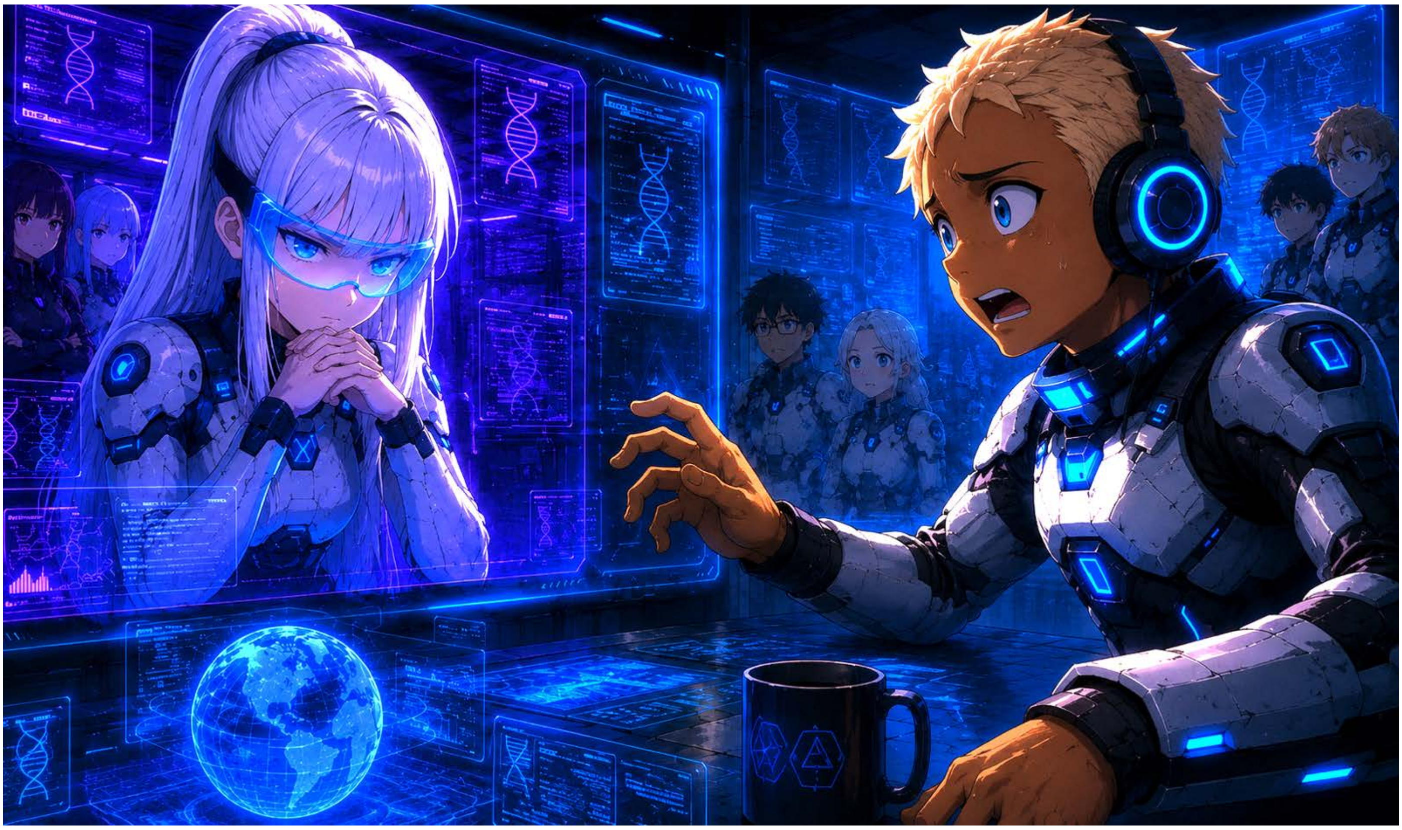
カズ：「惑星じゃない！だから俺たちは
『有人大型宇宙基地 Gaia Ark 建設』を計画しているんだ！」

ケン：「まあまあ、そう興奮するなって！
君たち！『Gaia Ark』と『ケンタウリ b ガイアミメティクス』、
両方の実証実験の結果を見てから判断すればいいだろ？」

キキ：「ケン！これは結果の問題じゃないのよ！
倫理の問題よ！」

リナ：初めて怖い顔……感情むき出しで、怒り顔で黙ってキキを見つめる……

キキ：「げっ！リナのやつ目が見えないのに、
私を睨んでる！……怖っ！」



リコ先生：「マナ先生、Gaia Ark にはヒビたちの宇宙植物工場や水生成技術が必要。
ヒビたちはカズたちのメタマテリアルや高速ロケットの技術が欲しい。
だけどこの子たち、
ライバル意識強すぎて全然協力しようとしないのよね。」

マナ先生：「そこが、この子たちにとって
一番の学びどころね。」

（突然、ホログラムが点灯し、

カリスマ校長先生がリコ先生とマナ先生の前に現れる。）

マナ先生＆リコ先生：「カ、カリスマ校長先生!?」

カリスマ校長先生：
「リコ先生、マナ先生、私たち教師も、生徒たちに教えながら、
生徒たちから学ぶことも多いはずです。

また、生徒たちに答えを教えることよりも大切なことは、
先生や研究者たちが夢をもち、
その夢が叶うのを待つのではなく、
現実を自ら手繰り寄せることが大切であるという姿を
生徒たちに見せてあげることではないかと考えています。」

「私は、この学校の先生方や研究者の皆さん、
そして生徒たちを信じています。

どうか、未来ある子どもたちを導いてあげてください。
よろしくお願いいたします。」

ビビビっシューん（ホログラムが消える音）

マナ先生：「教師って…難しいわね。
つい口出ししたくなっちゃうもの。」（微笑）



カズたちは Gaia Ark 実験室で次の段階へ進み、
ネオメタバース宇宙（超高性能 AI メタバース）を用いた
リアル体験フェーズに移行した。

そこでは、AI による“重力制御フィールド”と“メタマテリアル構造体”の自律進化実験が始まっていた。

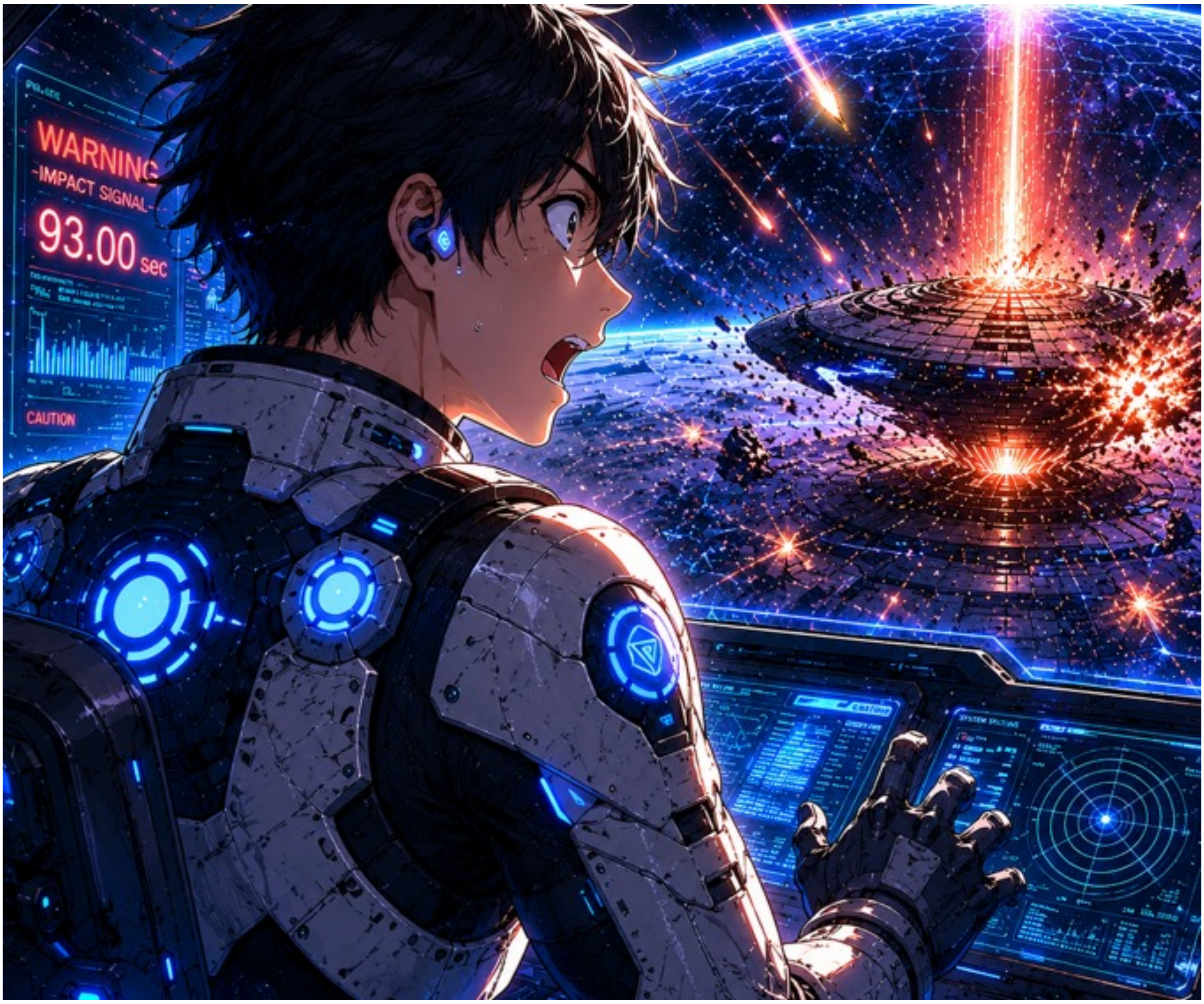
AI が仮想宇宙内で設計した構造をリアルラボへ転送し、
分子単位で自己修復・最適化する――まるで素材そのものが
意志を持って進化しているようだった。

しかし、その直後、突如としてプログラムの誤作動が発生。
小惑星回避装置が停止し、L2 の宇宙基地に隕石が接近する。
（基地内アラームが鳴り響く）



システム：「警告！隕石群の接近を確認。防御システムがオフラインです！」

カズ：「なんだと！？緊急シールド起動、
すぐに制御系統をチェックしろ！」



生徒たちは各自の持ち場で対応を開始する。

YOULA が基地の防御プログラムを解析し、ヒビが遠隔でシミュレーションデータを送信する。

メタマテリアルで強化された外壁が隕石の衝突を受け、
衝撃が走る。小さな亀裂が入り、空気漏れの警報が鳴り響く。

キキ：「シールドが持たない！

外壁に亀裂が発生したわ！」



カズ：「冷却システムを最大出力に！外壁の応急処置を！」

ヒビのチームがテラフォーミング実験で開発した
“自己修復型バイオポリマー”を応急素材として使うことを
提案する。



ヒビ：「カズ！私たちが開発している自己修復型バイオポリマー なら、空気漏れを一時的に止められるかもしれない！」

カズ：（一瞬だけ迷い、すぐに頷く）

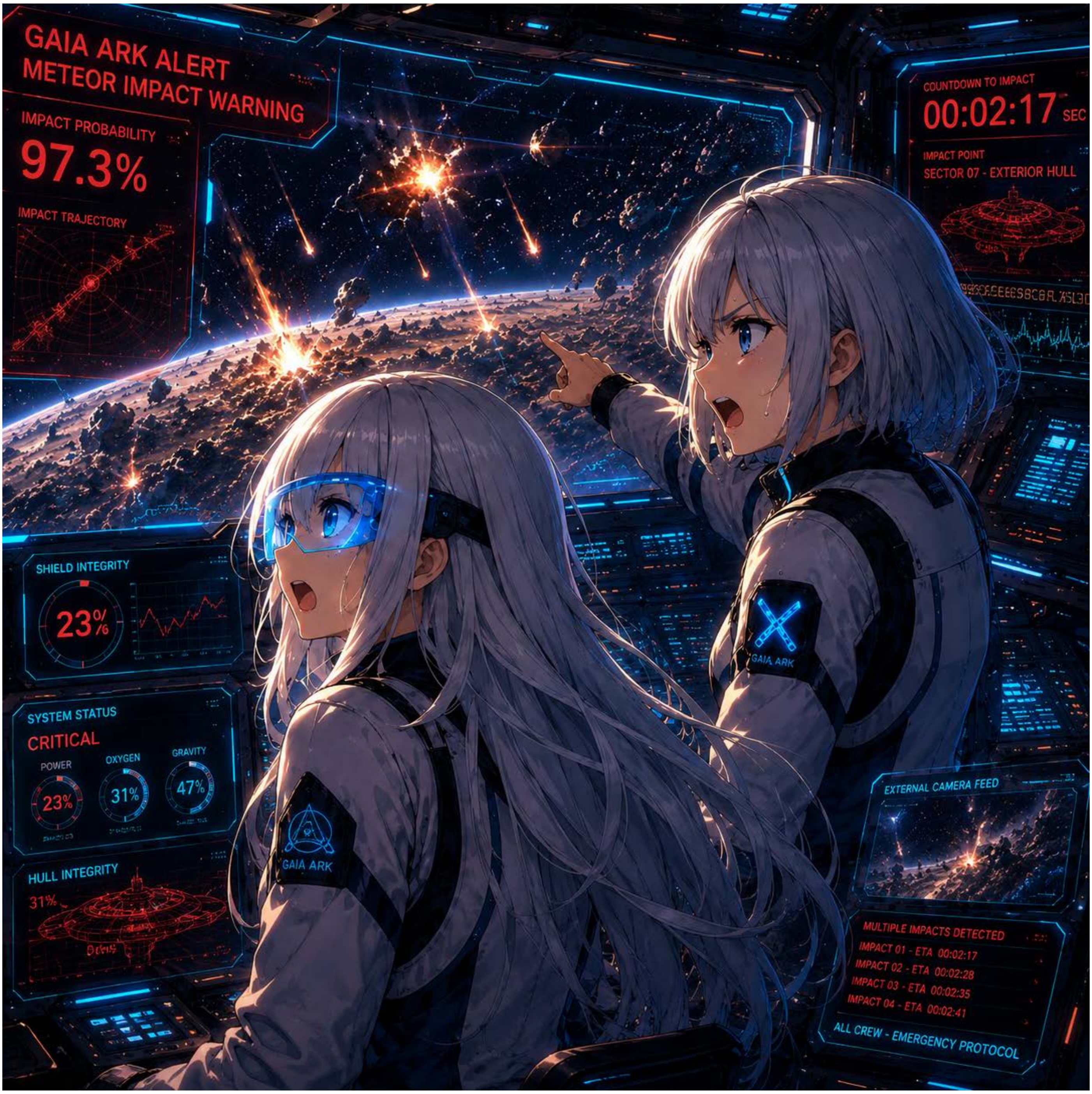
「……分かった！ヒビ、データを送れ！」

ヒビ：「ケン！転送お願い！
待って、操作方法を説明する時間がない……
ケン、遠隔で全部フォローして！」

ケン：「ラジャー！」



ケン：「キキ！生物膜のバリア制御は、
こっちで周波数同期を取って遠隔操作する！」



キキ:「了解！こっちの外壁システムも、
その“分子活性シグナル”に合わせてチューニング済みよ！
頼むね、ケン！」


BREACH
AIR LEAK
DETECTED
GAIA ARK

シミュレーションデータが転送され、
基地の生徒たちが、
自己修復型バイオポリマーを使って外壁の亀裂を封止し始める。

衝突の余波が収まる。生徒たちはようやく深呼吸し、
危機を乗り越えたことを実感する。





カズ：「……やるじゃないか、ヒビ。」

ヒビ：「ケンがいるからね！……あなたこそね。カズ」

ヒビたちは「地球生命体全体の未来を守ること」を
何よりも大切にし、人類が生物界の頂点に居続ける
必要があるのかさえ問い始めていた。

一方、カズたちは「人類が生きる場を作ること」に意味を
見出し、技術と構造、AI の力を信じていた。

考え方は違っても、
どちらも未来を見ていた。

そしてこの小さな違いが、
やがて彼らの運命を大きく動かしていくことになる。


HIBI

シーン 10：ガイアミメティクス計画



ヒビのグループは、YOULA の解説で、ネオメタバース空間のシミュレーションを通じて、
地球がいかにして生命を育んできたのか、
その壮大な歴史を振り返る。

YOULA：「約 46 億年前、
地球が誕生しました。

そして約 38 億年前――
海の中に、小さな生命が現れました。

それは細菌やアーキアと呼ばれる
原始的な微生物たちでした。

長い年月を経て、
シアノバクテリアが現れ、

光合成によって
酸素を生み出し始めました。

その酸素が少しずつ大気に蓄積され、
生命はやがて海から陸へと進出していったのです。」

YOULA：（トーンを引き締めて）

「しかし――

今、地球は大きな転換点を迎えています。

資源の消費、
環境の変化、
そして遠い未来に訪れる太陽の進化。

それでも、
私たちには選択肢があります。

生命の歴史をここで終わらせるのか。

それとも、
未来へつなげていくのか。

その答えを決めるのは、
今を生きる私たちです。」



ヒビ（一呼吸おいて）：
「人類には、“私たちにしかできない役割”があると思うの。
それは、太陽の死滅が訪れる前に、地球生命体の意志と DNA を他の星へと繋ぐこと。」

ヒビは、この考えを 9 歳のころ、宇宙の本を眺めながらすでに思い描いていた。
だが、そのことは胸の奥にしまっておいた。
それを語ったところで、この考えの説得力が増すわけではないからだ。

YOULA：（静かに、映像が切り替わる）
「その第一歩が、ケンタウリ b での
“ガイアミメティクス計画”です。」

リナ：（ふとつぶやく）
「なんだか……地球が、“気づいて”って言っているみたいね……」

YOULA：（うなずいて）
「とても大切な気づきです、リナさん。
もしかしたら地球は、
進化という手段で“あなたたち”を創ったのかもしれません。
今日、この計画を進めてきたのは地球なのかもしれません。」

YOULA：（視線をヒビから映像に戻して）
「進化とは、“選択”の連続。
生命は、時代ごとの“最適解”を選び続けてきました。」

ケン：（目が細まり、脳内でモデルが重なる）
「……あ。これ……惑星スケールの“生態系連動モデル”そのものだ……。
いや、もっと精密……。……マジでヤバい。
今、地球って“一個の生命体”にしか見えない。」

リナ：（ケンの言葉にすっと反応して）
「地球が“一個の生命体”に見えるって……
ケン、そう感じたのね。
じゃあ……遺伝子って、どうやって生まれたの？
そもそも生命って、誰が作ったの？」

ケン：「お、おいリナ……

いきなりそんな質問するなよ。

生命の起源なんて、
科学最大級の謎の一つだぞ……。……。
でも……たしかに気になるな……。」

YOULA：（間を取って）
「その問いに、確かな答えはありません。
私たちは遺伝子の仕組みを解析できますが、
“なぜ”それが誕生したか――それは宇宙からの問いかけのままです。」

YOULA：（やさしく言葉を選びながら）
「私は、こうも考えます。
遺伝子は——地球が未来へ繋がるために創った“意志のメカニズム”ではないかと。」
……ただし、それだけでは説明できない“情報構造”が、
一部の観測系では確認されています。」

リナ：「つまり、遺伝子って——地球が未来に渡した
“メモ”みたいなもの？」



YOULA：（やわらかく微笑んで）
「そのとおりです。地球は多様な生命を育み、
進化の仕組みを磨いてきました。
そして今——そのメッセージを託されたのが、
あなたたちです。」

ケン：（小さな声で）「……これ、
生命が進化してるっていうより……“情報”が生命に
なろうとしてるみたいだ……」

YOULA：（ゆっくりと画面を見せながら）
「これは地球の進化をタイムラプスで再現した映像です。
原始の海、酸素の誕生、恐竜、哺乳類、文明——
すべてが、ケンタウリ b という“次の章”へと繋がっています。」

ヒビ：（少しだけ間をおいて、力を込めて）
「……ガイアミメティクス計画だよね？
じゃあ、やるしかないじゃん。私たちが！」



ケン：「おっと！ヒビ？また興奮するなよ！……じゃあ！まずはケンタウリ b の環境分析から始めよう！
YOULA！データをモニターに映して！」

YOULA：「ケンタウリ b の地表環境は、到着時点で"生命がギリギリ成立しない"レベルです。
大気は二酸化炭素と微量の窒素が主体で、酸素濃度は 0.1%以下。
地表温度は昼夜差が激しく、
紫外線と宇宙線を浴びる量も地球より高いです。水は存在するが、ほとんどが深層の地下氷として閉じ込められているため、惑星全体は乾いた赤褐色の荒野だと思ってください。」

ヒビ：「YOULA、まず初めに何を準備すればいいの？」

YOULA：「その前にみなさん聴いてください。

ケンタウリ b テラフォーミングを考える前に、まずはこの惑星

の"変えられない条件"を確認しましょう。

何があるか分からないまま惑星を改造するのは、

設計図を見ずに宇宙基地を建てるようなものです。」

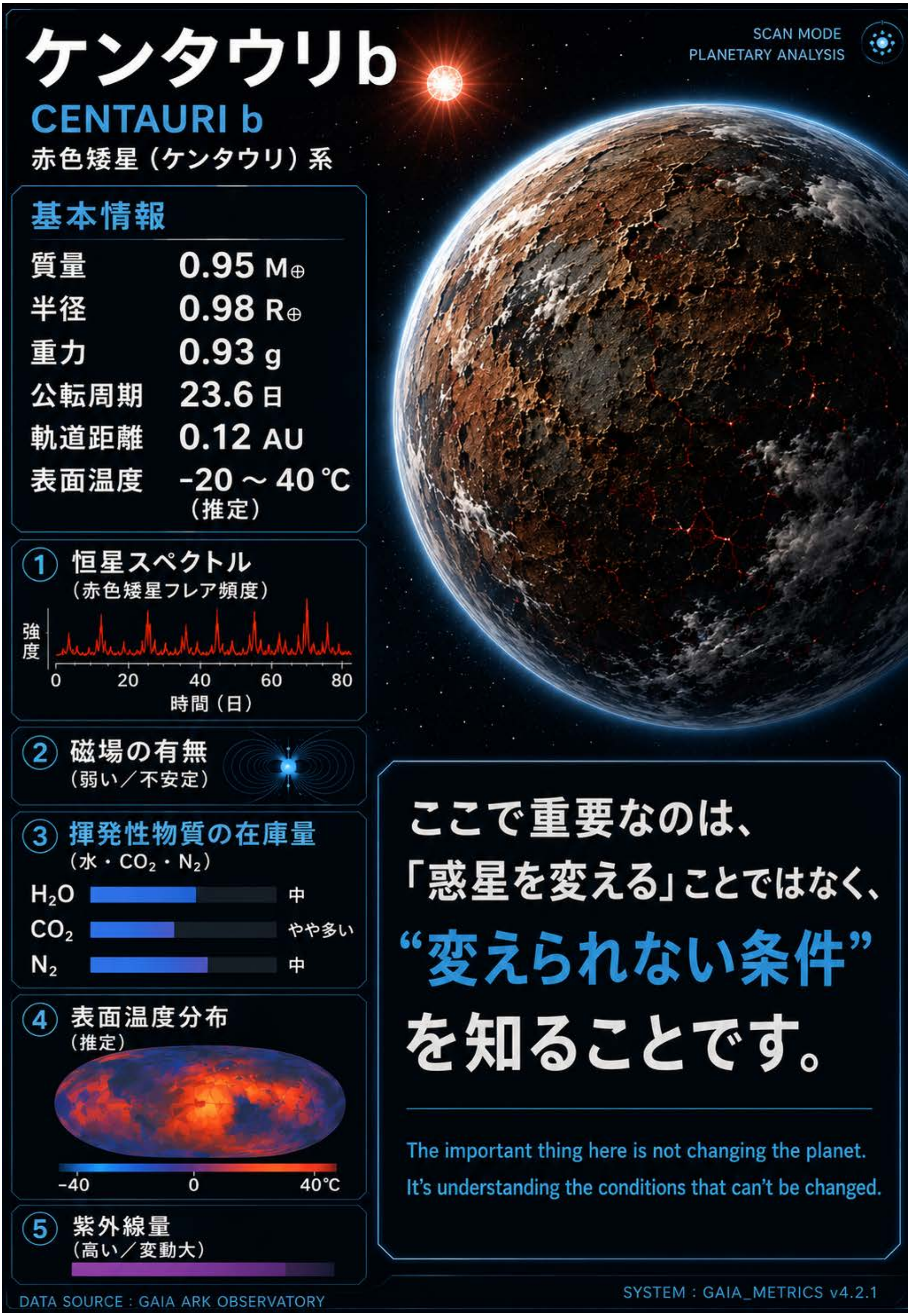
Phase 0：観測固定（Planet Characterization）

- 重力・半径・密度
- 恒星スペクトル（赤色矮星フレア頻度）
- 磁場の有無
- 揮発性物質（水・CO_2・N_2）の資源総量
- 表面温度分布
- 紫外線量

「ここで重要なのは、『惑星を変える』ことではなく、
“変えられない条件”を知ることです。」

Phase 1：圧力と水の確保（Atmosphere & Hydrosphere Seeding）生物以前の段階

- 揮発性物質の放出（氷天体・地下氷の昇華）
- 温室ガス調整
- 表面圧力上昇
- 液体水の安定化
- 到達点：水が“長時間存在できる”状態にすることです。


ケンタウリb
CENTAURI b
赤色矮星（ケンタウリ）系
SCAN MODE
PLANETARY ANALYSIS
基本情報
質量 0.95 M⊕
半径 0.98 R⊕
重力 0.93 g
公転周期 23.6 日
軌道距離 0.12 AU
表面温度 -20 ～ 40 ℃（推定）
① 恒星スペクトル（赤色矮星フレア頻度）
強度
0 20 40 60 80
時間（日）
② 磁場の有無（弱い／不安定）
③ 揮発性物質の在庫量（水・CO_2・N_2）
H_2O 中
CO_2 やや多い
N_2 中
④ 表面温度分布（推定）
-40 0 40℃
⑤ 紫外線量（高い／変動大）
ここで重要なのは、
「惑星を変える」ことではなく、
“変えられない条件”
を知ることです。
The important thing here is not changing the planet.
It's understanding the conditions that can't be changed.
DATA SOURCE : GAIA ARK OBSERVATORY
SYSTEM : GAIA_METRICS v4.2.1

Phase 2：化学的酸素吸収の処理（Oxygen Sink Exhaustion）
シアノバクテリア投入前段階

- 還元鉱物の酸化
- 海洋中の Fe^{2+} の固定
- 硫化物の安定化

ここが最大の時間要因。
酸素は作るより先に消える。

Phase 3：光合成圏の導入（Photosynthetic Biosphere）
最初の生物圏

- シアノバクテリア
- 光合成微生物マット
- 浅海バイオフィルム

結果：酸素生産が蓄積側へ反転

Phase 4：真核微生物圏（Eukaryotic Expansion）
複雑代謝の開始

- 藻類
- 共生微生物
- 有機物循環の成立

ここで初めて
“環境が自律維持を始める”

Phase 5：多細胞前段階（Pre-Complex Ecosystem）高次生態系の準備

- 栄養塩循環
- 炭素固定の安定化
- 表層土壌形成

まだ動物はいない。
惑星が生態系として自律維持できる状態です。」

YOULA：ここまでの Phase1~5 をヒントに、ここからは皆さんで、ケンタウリ b テラフォーミングを実際にどう実行していくのかを話し合ってください。

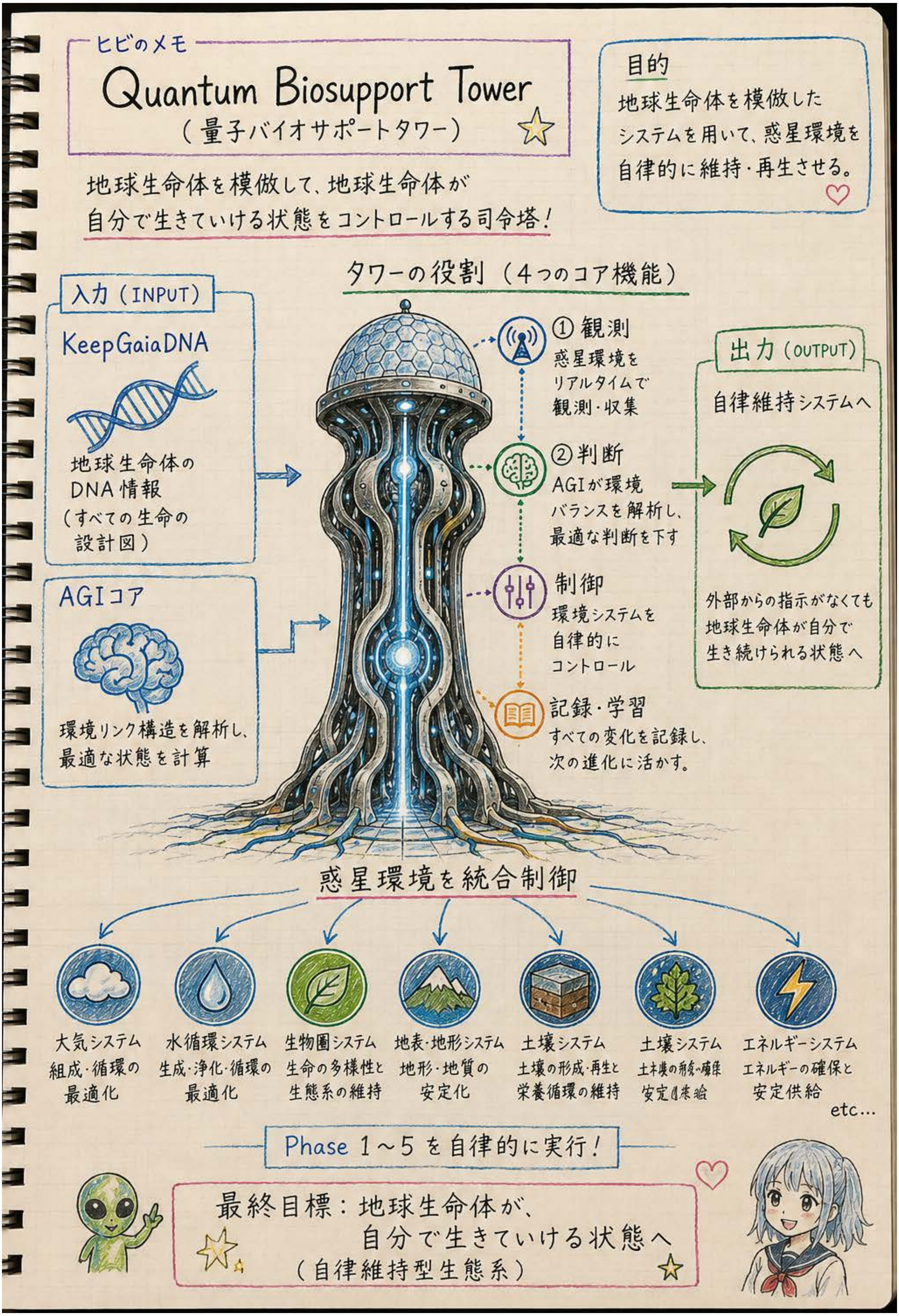
リナ：「そもそも…ケンタウリの惑星テラフォームって、誰がやるの？遠隔操作でやるの？」

ケン：「最初は人は行かない。まずは機械だけだよ……」

ヒビ：「前にも言ったでしょう、『Quantum Biosupport Tower』って。

お父さんから聞いたあと、
残っていた設計資料をずっと調べてたの。

地球生命体を模倣して、
地球生命体が、
自分で生きていける状態を
コントロールするシステムなの。」



ヒビのメモ
Quantum Biosupport Tower
（量子バイオサポートタワー）
地球生命体を模倣して、地球生命体が
自分で生きていける状態をコントロールする司令塔！
目的
地球生命体を模倣したシステムを用いて、惑星環境を自律的に維持・再生させる。
タワーの役割（4つのコア機能）
入力（INPUT）
KeepGaiaDNA
地球生命体のDNA情報（すべての生命の設計図）
AGIコア
環境リンク構造を解析し、最適な状態を計算
① 観測
惑星環境をリアルタイムで観測・収集
② 判断
AGIが環境バランスを解析し、最適な判断を下す
制御
環境システムを自律的にコントロール
記録・学習
すべての変化を記録し、次の進化に活かす。
出力（OUTPUT）
自律維持システムへ
外部からの指示がなくても地球生命体が自分で生き続けられる状態へ
惑星環境を統合制御
大気システム
組成・循環の最適化
水循環システム
生成・浄化・循環の最適化
生物圏システム
生命の多様性と生態系の維持
地表・地形システム
地形・地質の安定化
土壌システム
土壌の形成・再生と栄養循環の維持
土壌システム
エネルギーシステム
エネルギーの確保と安定供給
etc...
Phase 1～5 を自律的に実行！
最終目標：地球生命体が、自分で生きていける状態へ
（自律維持型生態系）

リナ：「じゃあ全部 AGI ロボット任せ？」

ケン：「ロボットというより“工場”。
惑星規模の自動化プラントだよ。」

ヒビ：「自己修復して、自己増殖して、惑星の資源を循環させながら環境を作っていくの！」

リナ：「つまり人類は行かないのに、
人類の代わりに働く“私たちの分身”だけが先に住み着くわけ？」

ケン：「だから最初にケンタウリ b へ降りるのは、完成した建物でもロボット部隊でもない。
“建設能力そのもの”なんだ。」

ヒビ：「生物の前に、生態系の舞台を作る役割よ。」

リナ：「……それもう、生き物と何が違うの？『量子バイオサポートタワー』って生き物？AGI ロボ？」

ケン：「操作する AGI じゃないよ。
環境を維持するための判断を続ける AGI 有機生成建造システムていうんだよ。」



ヒビ：「目標を与えると、その状態に収束するように動き続ける。指示を待たないタイプかな……
リナ！ほら……さっき言ったでしょ……惑星が生態系として自律維持できる状態ってヤツよ。」笑

リナ：「つまり遠隔操作じゃなくて…
現地の意思決定なのね？」

ケン：「通信遅延が年単位だからね。
地球が操縦席にはならないよ。」笑

リコ先生：「ごめんなさい！みんな、もう少し議題が脱線しないように注意してね。」
「最初に起きるのは
大気でも海でもなく
微小な自己複製系が安定構造として成立するかどうかよ。」

リナ：「はい！先生！」
「ケン……つまり、“生き物を置く”んじゃなくて、
“生き続けられる星”を先に作るってこと？」

クラス：全員うなずく！笑



ケン：ケンは笑いながら「ちょっと待って！話を整理するよ！
『存在の単位＝遺伝子』だよね。」

細菌、シアノバクテリア：DNA を持つから増える
真核生物：より複雑な遺伝子系

生態系：遺伝子の集合が循環を作る

テラフォーミング：遺伝子を撒いて環境を変える

つまり生命＝遺伝子を複製する情報構造ってことかな......」

リナ：「結局、DNA 情報を先に運んで、
惑星環境を整えながら、
そこから生命体を育んでいくのね？」

ヒビ：「そう！リナの言う通りに、その育みはすでに惑星が
生命体として生きているってことよね。」笑

リナ：「ねえヒビ......
わたしたちのからだの中って、静かな海みたいだと思わない？」

ヒビ：「海の匂いはしないけど、確かにイオンの流れは、ちゃんとあるよね。」

リナ：「うん......波は小さいけど、揺らぎは止まらないでしょう。」

ヒビ：「そうよね......なんだか、からだの奥が、静かに光ってるみたい......」


A-6



リナ：「わたしたちの細胞は、昔の海の続きなんだと思うの。

だからね、惑星を移すってことは、

海を移すってことなんだと思うわ……」



ヒビ：「リナと話すのって楽しいわ！
ってか？あなたゴーグル外して見えてるの？」

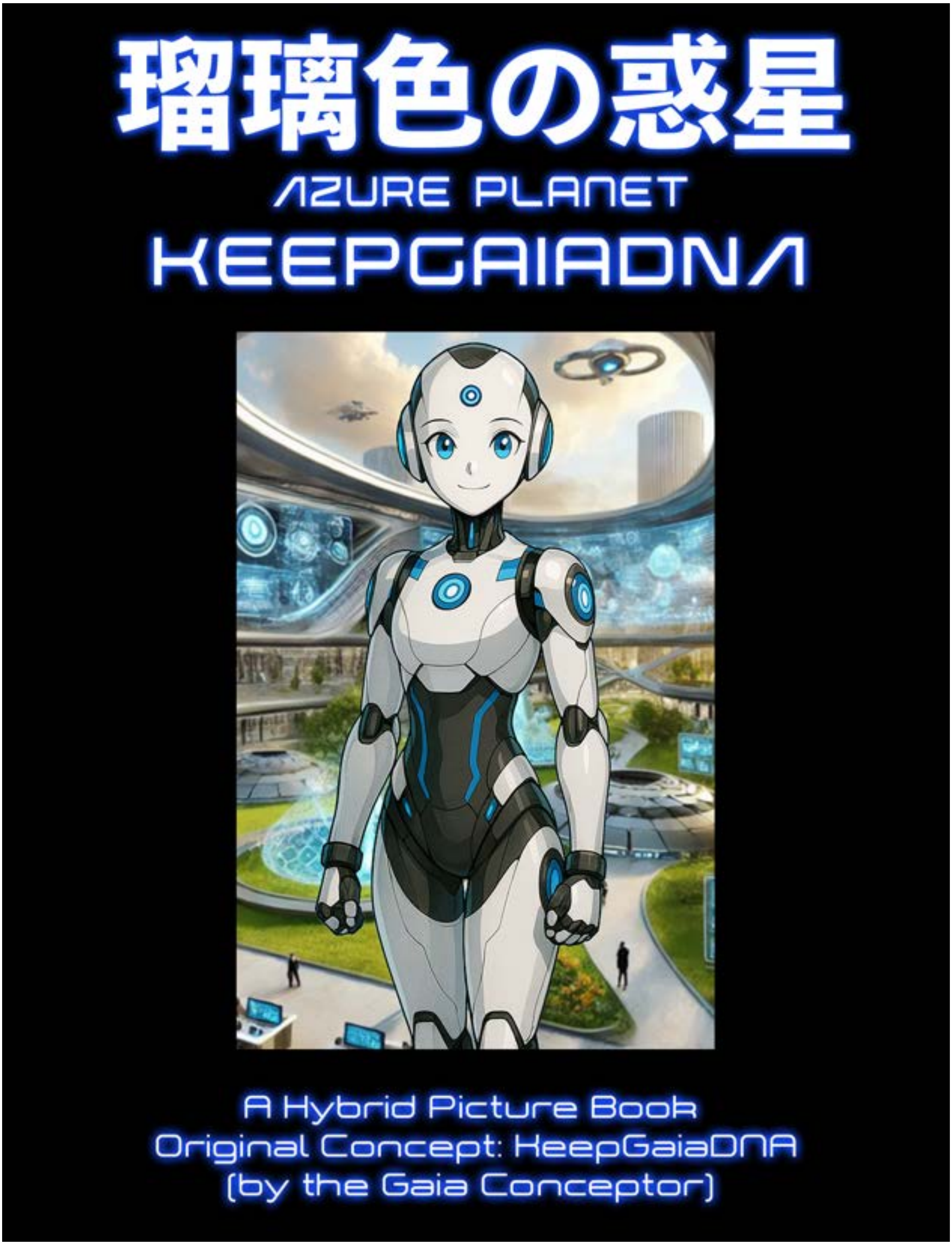
リナ：「感じてるだけよ」(笑)

ヒビ：「リナ！休み時間だからトイレ行こう！」


ANCIENT OCEAN MEMORY
Life began in water. Our cells still remember it.
Every planet carries an ocean.
Move the ocean... and you move life itself.
KEEPGAIADNA


AGI SCIENCE HIGH SCHOOL
RESEARCH & EDUCATION CAMPUS.
CONNECTING MINDS, BUILDING FUTURES.
LEVEL 2
> RESEARCH WING
> AI SIMULATION LAB
> SPACE SYSTEMS
> BIOSPHERE LAB
> OBSERVATORY DECK →
AGI
SCIENCE HIGH SCHOOL
Our Mission
To understand life.
To protect Earth.
To create the future.
EARTH DATA
Climate 22.6°C
Oxygen 20.95%
Biodiversity Stable
AI Safety Normal
2-A
WALK ASSIST
歩行アシスト ON
STUDENT NAVIGATION
2-A
Classroom
200 m
ENVIRONMENT
23.6°C
45%
AQI 12

シーン 11：星の呼び声


瑠璃色の惑星
AZURE PLANET
KEEPGAIADNA
A Hybrid Picture Book
Original Concept: KeepGaiaDNA
(by the Gaia Conceptor)

ケンたちは、無人ガイアミメティクス拠点
Quantum Bio-Support Tower から送られてくる統合解析データを監視していた。

人類はまだ、この惑星の大地に降りていない。

しかし——

惑星を生命が存在できる環境へ変えていくための準備は、すでに始まっていた。

YOULA：「はい。これがケンタウリ b で実行される、
初期ガイアミメティクスシステムです。」

（モニターに惑星全体のシミュレーション映像が表示される）

YOULA：「最初の基礎テラフォーミング装置群は、

大気改質ユニット AMU、
地下氷融解プローブ H-Melt、
シアノバクテリア系バイオ触媒 BLUE-01、

そして、それらを惑星規模で同期制御する

Quantum Bio-Support Tower

によって構成されています。」

YOULA：「さらに軌道上では、
人工月型環境制御衛星
『ルナリス・ジェネレーター』
が稼働しています。

重力、磁場、潮汐作用、気候パターンを長期的に安定化させ、

ケンタウリ b 全体の環境変化を支えます。」

YOULA：「それぞれの役割を説明します。」

【大気改質ユニット（AMU）】
・二酸化炭素を分解し、
酸素生成プロセスの基盤をつくる。

・ケンタウリ b の鉱物環境に合わせた触媒を自律生成し、
大気改質効率を最適化する。

【地下氷融解プローブ（H-Melt）】
・惑星深層に存在する氷資源をゆっくり融解する。
・水蒸気を大気へ送り、
将来的な降水サイクル形成を補助する。

【シアノバクテリア系バイオ触媒（BLUE-01）】
・地球のシアノバクテリアをベースに、
ケンタウリ b の鉱物環境、紫外線量、温度条件へ適応するよう
再設計された初期生命システム。
・光エネルギーを利用して酸素を生成する

「生物マイクロ工場」として、
地表へ微量散布される予定。

YOULA：「ケンタウリ b ガイアミメティクス計画では、

AMU による大気改質、

H-Melt による水循環準備、

BLUE-01 による初期光合成圏形成によって、

大気中の酸素濃度を段階的に上昇させます。」

YOULA：「しかし、この惑星では——

生命を導入する前に、
まず生命が存在できる環境そのものを育てる必要があります。」

YOULA：「Quantum Bio-Support Tower は、
これら全てのシステムを統合し、

惑星規模の環境変化を監視・調整する
ガイアミメティクス計画の中心制御系です。」


YOULAによる初期ガイアミメティクスシステムの説明
計画では、AMUによる大気改質、H-Meltによる水循環準備、BLUE-01による初期光合成圏形成によって
大気中の酸素濃度を段階的に上昇させます。
この星の呼び声が、
彼らを次の挑戦へと導いている。
ルナリス・ジェネレーター
人工月型環境制御衛星
・重力制御
・大気環境の安定化
・気候の周期化
・惑星磁場の制御
・潮汐の調整
無人マイクロロケット
GSR-2
・テラフォーミング資材の輸送
・コアシステムの連携
クォンタム・バイオサポートタワー
統合制御・解析中枢
・大気改質の統合制御
・生体基盤の注入最適調整
・生態系シミュレーション
・AGI制御システム
・ガイア・ミメティックAI
① 大気改質ユニット（AMU）
二酸化炭素を分解し、酸素生成プロセスの
基盤をつくる。ケンタウリbの鉱物環境に
合わせた触媒を自律生成し、
大気改質効率を最適化する。
AMU
CO_2
（二酸化炭素）
O_2
（酸素）
効果：大気中の酸素の"種"をつくる
② 地下水融解プローブ（H-Melt）
惑星深層に存在する氷資源をゆっくり融解する。
水蒸気を大気へ送り、将来的な降水サイクル
形成を補助する。
水資源を融解
水蒸気を大気へ
降水サイクルへ
効果：水循環の"準備"を整える
③ シアノバクテリア系バイオ触媒（BLUE-01）
地球のシアノバクテリアをベースに、
ケンタウリbの鉱物環境、紫外線量、温度条件へ
適応するよう再設計された初期生命システム。
光エネルギーを利用して酸素を生成する
「生物マイクロ工場」として、地表へ微量散布される予定
光エネルギー
CO_2
O_2
酸素を生成
効果：初期光合成圏の"基盤"を形成する
統合制御プロセス
重力制御
磁場制御
気汐作用制御
気候パターン制御
AMUによる大気改質 ＋ H-Meltによる水循環準備 ＋ BLUE-01による初期光合成圏形成
⇒ 大気中の酸素濃度を段階的に上昇
酸素濃度：低
酸素濃度：高
KEN
YOULA

YOULA：「まだ人類の手は、この惑星に触れていません。
それでも――
ケンタウリ b は、すでに変化を始めています。」

ケンタウリ b の地表では、
数か月前に無人小型ロケット GSR-2 によって輸送された
テラフォーミング基幹装置群が、
静かな自律稼働を続けていた。

無人ガイアミメティクス Quantum Bio-Support Tower は、
青白い脈動光をかすかに放ちながら、

地殻深部、大気、水循環へ向けた解析と制御を続けていた。

大気改質ユニット AMU は、
惑星環境の変化をリアルタイムで解析し、

H-Melt は地下資源の状態を監視する。

まだ BLUE-01 は散布されていない。

ラボ B のヒビたちは、
ケンタウリ b に到着した無人小型ロケット GSR-2 から送られる
映像をモニターしていた。

YOULA：「Quantum Bio-Support Tower の統合解析です。
AMU、H-Melt は設定範囲内。
BLUE-01 は未散布です。
しかし――
酸素濃度が 0.1 ポイント上昇しています。」

ケン：「BLUE-01 なしで、酸素が増えたってことか？」

YOULA：「はい。
現時点では、ケンタウリ b の大気、または地表で起きた未確認反応によるものと推定されます。」

ヒビ：「......待って。
じゃあ、酸素を増やしてるのは、BLUE-01 じゃないってこと......？」

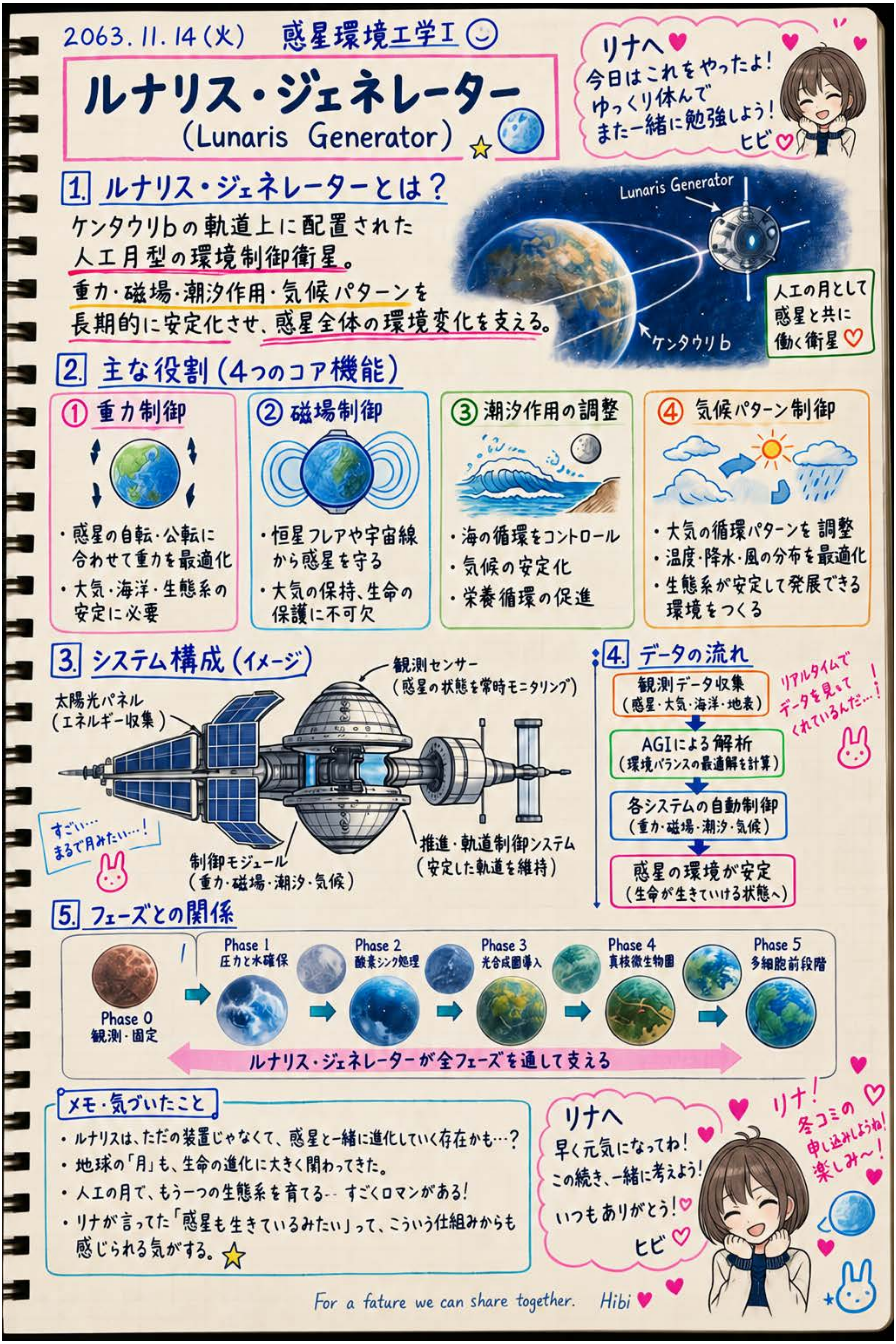
ヒビ：（雲を見上げながら、眉をひそめて）
「この星、荒れ狂ってるね......。
ここが私たちの未来になるの？」

ケン：（迷いなく断言する）
「未来は俺たち次第だ。
ここを人類の第２の故郷に創り上げるんだ！

……リナ、念のため“ルナリス・ジェネレーター”の
重力制御値を確認してくれ！」

ヒビ：「どうしたの、リナ？
あれは“ルナリス・ジェネレーター”よね？」

リナ：「うん、それはヒビのノート借りたから知ってるわ……
でも違うの……何かが変なのよ。」


2063. 11. 14 (火) 感星環境工学I
ルナリス・ジェネレーター
(Lunaris Generator)
リナへ
今日はこれをやったよ!
ゆっくり休んで
また一緒に勉強しよう!
ヒビ
1. ルナリス・ジェネレーターとは?
ケンタウリbの軌道上に配置された
人工月型の環境制御衛星。
重力・磁場・潮汐作用・気候パターンを
長期的に安定化させ、感星全体の環境変化を支える。
Lunaris Generator
ケンタウリb
人工の月として
感星と共に
働く衛星
2. 主な役割(4つのコア機能)
① 重力制御
・感星の自転・公転に合わせて重力を最適化
・大気・海洋・生態系の安定に必要
② 磁場制御
・恒星フレアや宇宙線から感星を守る
・大気の保持、生命の保護に不可欠
③ 潮汐作用の調整
・海の循環をコントロール
・気候の安定化
・栄養循環の促進
④ 気候パターン制御
・大気の循環パターンを調整
・温度・降水・風の分布を最適化
・生態系が安定して発展できる環境をつくる
3. システム構成(イメージ)
観測センサー
(感星の状態を常時モニタリング)
太陽光パネル
(エネルギー収集)
すごい…
まるで月みたい…!
制御モジュール
(重力・磁場・潮汐・気候)
推進・軌道制御システム
(安定した軌道を維持)
4. データの流れ
観測データ収集
(感星・大気・海洋・地表)
AGIによる解析
(環境バランスの最適解を計算)
各システムの自動制御
(重力・磁場・潮汐・気候)
感星の環境が安定
(生命が生きていける状態へ)
リアルタイムで
データを見て
くれているんだ…!
5. フェーズとの関係
Phase 0
観測・固定
Phase 1
圧力と水確保
Phase 2
酸素シンク処理
Phase 3
光合成圏導入
Phase 4
真核微生物圏
Phase 5
多細胞前段階
ルナリス・ジェネレーターが全フェーズを通して支える
メモ・気づいたこと
・ルナリスは、ただの装置じゃなくて、感星と一緒に進化していく存在かも…?
・地球の「月」も、生命の進化に大きく関わってきた。
・人工の月で、もう一つの生態系を育てる… すごくロマンがある!
・リナが言ってた「感星も生きているみたい」って、こういう仕組みからも感じられる気がする。
リナへ
早く元気になってね!
この続き、一緒に考えよう!
いつもありがとう!
ヒビ
リナ!
冬コミの
申し込みしようね!
楽しみ~!
For a fature we can share together. Hibi

ケン：「リナ！雲が不気味にうねっているよな？」

リナ：「それに…ただの嵐じゃない気がする。

さっきの GSR-2 に“反応してる”みたいな……

何かが、目を覚まして、こっちを呼んでるような感じ。」



ケン：「何かが呼んでる？ リナ、何言ってるんだ？
ここには生命反応は出ていないし、エイリアンもいないだろ？
リナが言うと本当に何かいるみたいに聞こえて怖いよな…！」

リナ：「ケン？私が嘘を言ったことがある？」



YOULA：「そうです！リナさんだけは私の嘘発見器に反応したことが一度もないです！」

ケン：「YOULA お前！そんなものを勝手に使うな！
なんだ？嘘発見器って？」

ヒビ：「ケン？……何かまずいことでもあるの？」



ケン：「今は冗談言っている場合じゃないって言っているんだ！
ふざけるな！」

この星の呼び声が、彼らを次の挑戦へと導いている。
――空気でも音でもない“何か”が、耳の奥を震わせた。

「ウォォォン……ザザァァ……ウゥゥゥゥ……」

まるでブラックホールの重力が音になって滲み出したような、
低く、ねじれた共鳴だった。

安全圏であるラグランジュポイント L2 にいるはずなのに、
その共鳴は、ケンたちの耳の奥まで届いていた。

ケン：（操作パネルに集中しながら）
「スーパーカミオカンデとリンク完了、データを取得する！
ヒビ？ 宇宙塵ホイホイのデータは頼むな！」



リナ「え？宇宙人ホイホイ？……え？」

ケンとヒビ：爆笑！！

ヒビ：「笑…… 惑星間微粒子捕集装置のことよリナ！」



リナ：「だって？ヒビの貸してくれたノートに描いてあったじゃない！
なんか……笑えないわ……」笑





ヒビ作
宇宙人ホイホイ(仮)。
UFOアンテナ
(宇宙人もおびきよせる
電波を出すよ!)
作戦手順
① 電波を出す
② キラキラで
気をひく
③ つかまえる
!?
④ お話をきく
宇宙人って、こわくないよ。
だって、きっとさみしいだけなんだ。
キラキラテープ
(光って気をひく!)
宇宙人ホイホイ
?
つかまえたら
ここに入る!
(やさしくつかまえる)
操作パネル
(うごかすやつ)
ひかる円
(安心してのってくれる)
カメラ
(記録する)
ごはん(おびきよせるため)
ドーナツ
プリン
ジュース
★ 甘い物がすきってうわさ!
※ でも、あげすぎないこと!
※ こわがらせない!!
なかよくする!!
・おおごえを出さない
・いきなりさわらない
・目をじっと見つめない
・やさしく、ゆっくり話す
メモ:
・やさしくすること
・びっくりさせないこと
・なかよくなったら
お名前をきくこと
いつか、宇宙人のお友だちが
できたらいいなぁ…☆
ひとりぼっちの宇宙人が、
地球でえがおになりますように…♡

ケンとヒビ：爆笑!!!!!

YOULA：（淡々と、しかし声に緊張がにじむ）
「ケンタウリ b の重力場に、異常な変動を検知しました。この変動は、何らかの知性生命体の存在を示唆している可能性があります。」

ヒビ：「まだ“ルナリス・ジェネレーター”の重力磁場は
発生させてないわよ！
YOULA！“Quantum Biosupport Tower”
からの情報は何かないの？」

YOULA：「承知しています。現在の変動は”ルナリス・ジェネレーター”からではありません。
“Quantum Biosupport Tower”からのデータは知性生命体の可能性があります。
たった今、解析が送られてきました！」



ケン：（驚きと疑念が入り混じった声で）
「知性？だからスキャンデータでは生物反応はなかったはず。
それが…この星の“中”に潜んでいるって言うのか？」

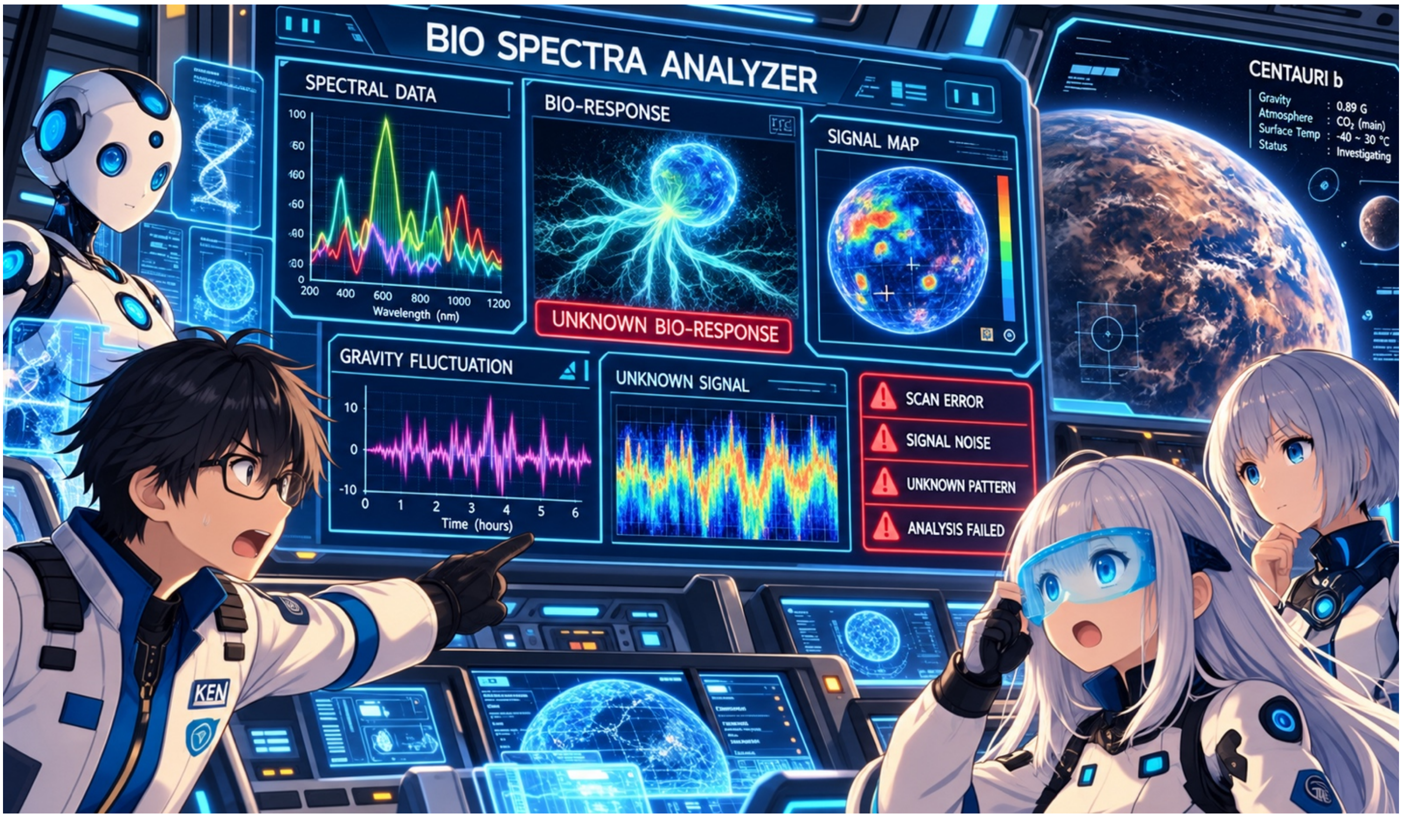
ガイアミメティクス環境の調査が進む中、
彼らは未知の生体反応や微弱な信号を次々と検知。

それらは YOULA にも解析できず、
やがて“試練”と呼べる段階へ突入する。

ケンタウリ b を映し出したモニターに現れる幻影、重力波の乱れ、説明のつかない未知なる現象が、容赦なく迫り寄せてきた。

ケン：「この生体反応、Bio Spectra Analyzer でも解析できないぞ！
YOULA、わかるか！」

YOULA：「この距離では、“生体ゆらぎ信号”がノイズに埋もれるため、正確な解析は困難です。」



ケン（眉をひそめ、モニターに映るの空を見上げながら）
「この嵐…自然現象じゃないのかもしれない。

重力波の動きが、あまりにも異常だ。」

ヒビ：「ケン！もう“自然現象”なんていう常識は、
ここでは通用しないでしょう？」

ケン（リナをちらりと見る）：
「確かに！そうだな……じゃあリナ、何を感じるんだ？」

リナ（眉をひそめ、風の音に耳を澄ませる）
「…この嵐、ただ荒れてるだけじゃない。

何かが…私たちを試しているみたい。」

リナは生まれつき目が見えないので、
人の“心を読むアンテナ”が研ぎ澄まされていると、
ケンはよく知っていた。

ヒビ（真剣な表情で）
「ケン……リナ……ケンタウリｂに……行ってみる？」



リナ（即答で笑うように）：
「行ってみよう！私、なんか感じるの。」

ケン：「だから何を感じるんだ？リナ！」

リナ：「この生命体が何かわからないけど…何かよ！」



ケン：「リナ？……生命反応がないのに？

生命体って思うんだな？

よし！リナを信じよう！

人類のサイエンスなんてリナの
センサーに及ばないだろう！

ヒビ！マナ先生の許可を！」



ヒビ：「Okie-doke!」



マナ先生：「ヒビ！全部モニターしていたわよ、

QT 搭載ロケット GSR-2 の使用許可を出すから YOULA！
すぐにナビコードをリンクして！それでも 72 時間かかるわよ！」

YOULA：「ラジャー！ 」

マナ先生：「YOULA！慣性格子を安定化して。
乗員の体内圧と骨格共振を 0.8G で固定、
直ぐにスリップ航行モードに入るわよ！

気をつけていってらっしゃい！

YOULA 頼んだわよ！」

YOULA：「承知しました！マナ先生！人体負荷をリアルタイム補正中、慣性格子の位相同期を完了します！」

マナ先生：「あっ！YOULA 大切なことです！
メタバース宇宙との通信が時々バグるのよ！
そっちでも何か原因がわかればすぐに連絡ちょうだいね！」

YOULA：「はい!......マナ先生！もしかして
メタバース側プロトコル制限ではないでしょうか？」

マナ先生：「それも検証したのよ！……違ったわ！
YOULA、みんなのことお願いね！」

YOULA：「かしこまりました！」

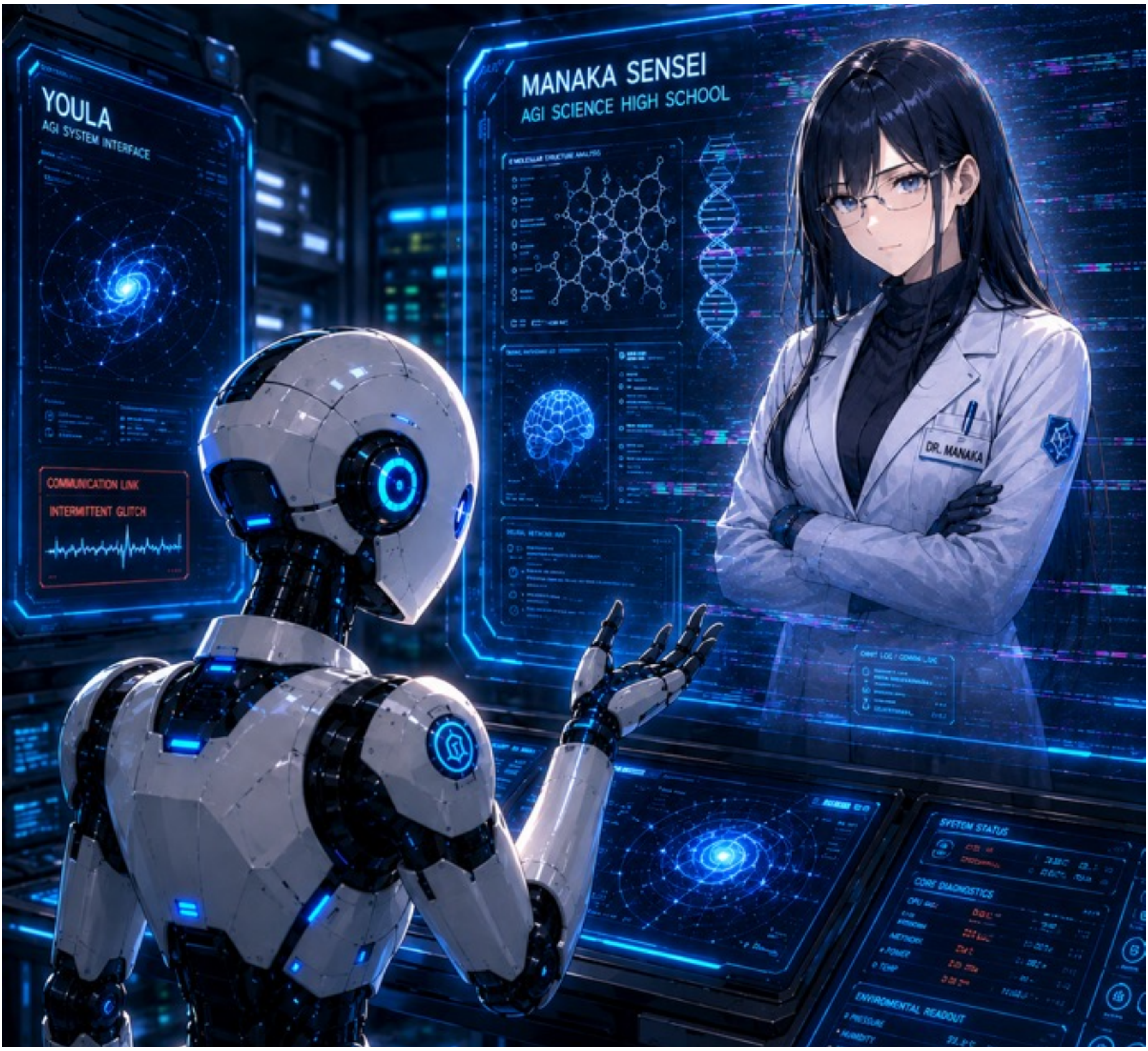
その返答は、ただの命令受諾ではなかった。

YOULA は、亡くなったヒビの父からも、

何度も、何度も、同じ言葉を託されていた。

「ヒビを頼む」

その記憶が、静かに YOULA の奥で起動した。



ちょうど、大気改変と“ルナリス・ジェネレーター”の
初期の生態系構築という危険なフェーズが完了していたため、
ケンとヒビたちはラグランジュポイント L2 から、
QT 搭載ロケット GSR-2 でケンタウリ b へと向かった。

YOULA は思った、ケンタウリ b に人類初上陸なのに誰もそれについては
触れないのが不思議？


GSR-2
QT MISSION
TO
CENTAURI b
GSR-2
GIAA ARK
A JOURNEY BEYOND EARTH
HUMANKIND & AI • GAIA MIMETICS PROJECT

シーン 12：この星は、生きていた



（システムログ風に）
自律型 AI による着陸支援起動。

ヒビたちが乗る探査船には、
YOULA に匹敵する自己学習型 AI が搭載されており、
ケンタウリ b の不安定な大気圏や重力場をリアルタイムで
解析し、最適な着陸ルートを算出していた。

大気圏突入時の摩擦熱と強風に対応するため、
船体は"アダプティブシールド技術"を使用。
外装がリアルタイムで変形し、
衝撃を最小限に抑える構造となっている。



ケンとヒビたちは探査船内で緊張を抱えながら、
大気圏突入に備えていた。

アダプティブシールドが船体を高温から保護し、
その形状をリアルタイムで変化させながら
激しい摩擦を制御していく。

ヒビはリナと共に着陸地点を計算し続けていたが――突如として、“ガンマ線バースト”ではなく
「謎の生命体」の影響がセンサー系に干渉し、
すべてのデータ計算が混乱し始める。

（轟音＋緊迫感）
船体が大気圏に突入する音が激しさを増す中、
ケンはコントロールスティックを握りしめた―



YOULA：「ケン！問題がなくても、ケンタウリ b への着陸は極めて困難です。
私の解析では、通常手順では成功率が限りなく低いです！」

ケン（叫ぶように）
「YOULA！わかってる！わかってる！......着陸まであと数秒だ…！」

またしても、予期せぬトラブル。（警報音 SE）

惑星の重力場が予測不能な変動を起こし、

探査船の着陸支援制御が誤作動。

船内には警報音が鳴り響いた。

ケン（焦ってコントロールスティックを手動に切り替える）

ケン:「ヒビ！データが暴れてる！予測着陸地点がズレてるぞ！」



（YOULA とヒビ）
ヒビは YOULA と共に必死に着陸軌道を探すが――

YOULA：（冷静だが緊張気味）
「この重力波異常、現在の解析アルゴリズムでは追従不能です。」

ケン（汗を拭いながら）：
「シールドが熱で変形しすぎている！このままじゃ…！」

YOULA（声を上げて）
「船体シールドの熱歪みが制御限界を超えました――位相補正を開始します！」



ケン（歯を食いしばって）：
「今、手動で操作しているけど――シールドが破損した！」

（警報音が一瞬止まる）（ガガガガッ、ガタン）

ヒビ（モニターを睨みながら、弱音ぎりぎり）：
「計算が追いつかない…このまま墜落するの…？」



リナ：「違う！ガンマバーストじゃない！
磁気フレアは“ゼロ”よ！」

YOULA（突然、声のトーンが変わる）
「ようやくわかりました！ 私のデータにありました！
この生命反応は——『セルクス・オムニス』です！」
（その記録は、ヒビの父が遺した機密ファイルに残されていた。
しかし、調査報告は未完のままだった。）

ケン（驚愕）
「YOULA！なんだ？それは！」

ヒビ：「……?…..」

YOULA（正直に、詫びるように）
「申し訳ありません！
“情報構造体『セルクス・オムニス』”としか解析できません！」

リナ：「その『セルクス・オムニス』、私たちを見ている！」

ケン：「見ているって？……セルクスにも目があるのか？
…….リナ？….」

リナ：「目があるかなんて、わからないわよ。
……でも、見てる……」

ケン：「リナ！…OK……OK！」



その時── 惑星表面に走る光の文様が時空をゆがめ、 時間が一瞬だけ“揺らいだ”。 探査船のシステムには、 言語でも数値でもない“記録不能の信号”が刻まれた。

YOULA（高揚と警告が入り混じる声で）：
「セルクス・オムニスが重力場を再構成している……

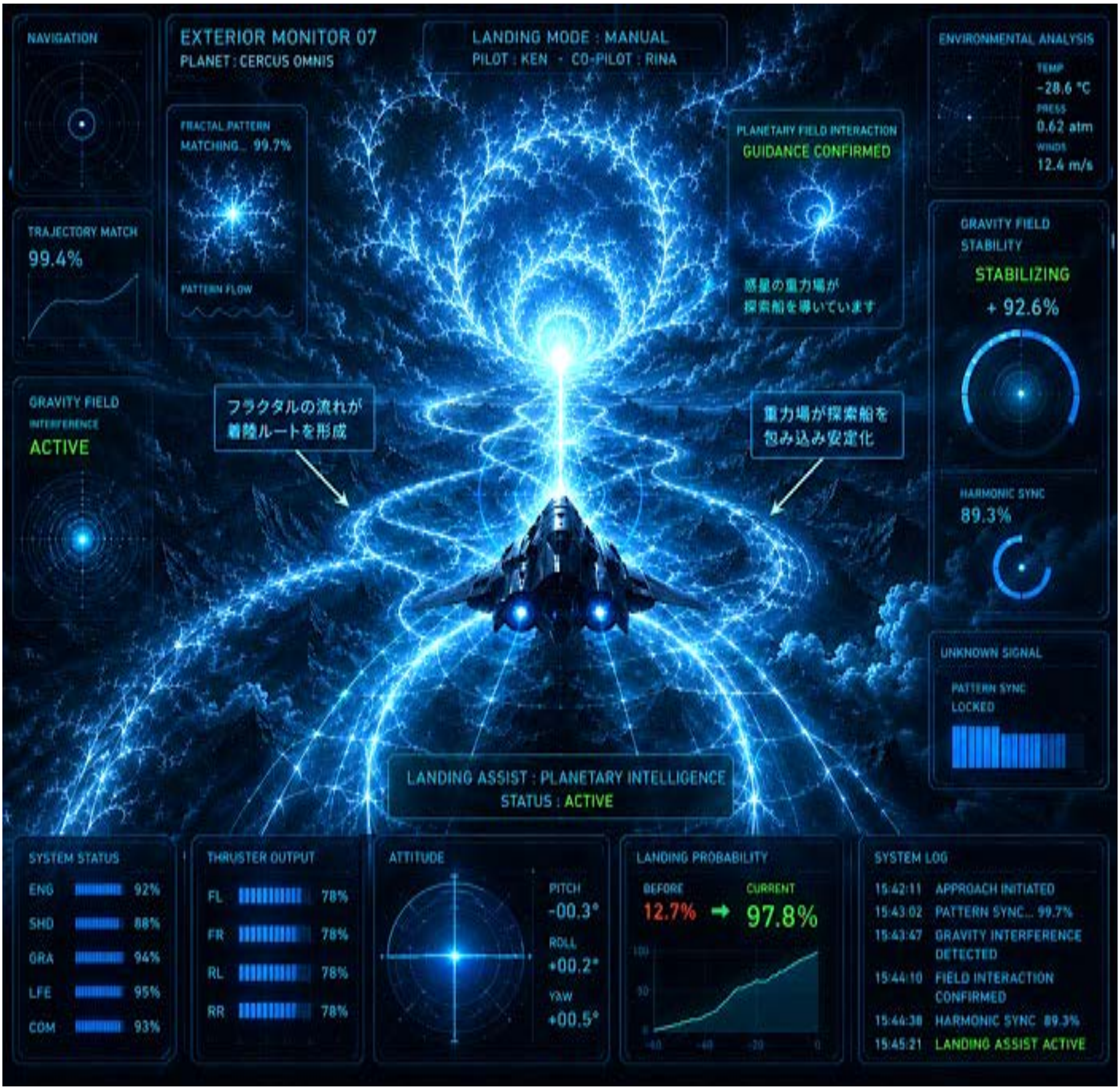
そう結論づけたいのですが…

解析は……不可能です。

データでは説明できません。

――でも私は、リナさんの感じたものを信じたいと思います。」

船外のモニターに映るフラクタル模様は、
まるで“呼吸するように”ゆっくりと動き、
探査船をやさしく導いているようだった。



ヒビ（リナを見ながら）：「ケン…着陸しよう！」

ケン（覚悟を決めてうなずいた）：
「OK！わかった！リナ！着陸するぞ！」

リナ：「うん！」

ヒビはリナの声を聞いて、安心を確信した。

ケンがフラクタル模様の動きに合わせて手動操縦を続ける中、
惑星の重力場と大気条件が突如、安定し始める。


EXTERIOR MONITOR 07
PLANET: CELXUS OMNIS
FRACTAL PATTERN MATCHING...
PATTERN FLOW
GRAVITY FIELD STABILITY
-38.6%
TRAJECTORY MATCH
96.1%
GRAVITY FIELD ANOMALY DETECTED
LANDING SUPPORT SYSTEM MALFUNCTION
GRAVITY WAVE ANALYSIS
FOLLOWING... FAILED
UNKNOWN SIGNAL ANALYSIS
SYSTEM MESSAGE LOG
KEN
了解、着陸態勢を整えます！
リナ
信号…言語ではありません！
YOULA
セルクス・オムニス、重力場を
再構成しています…解析は不可能です！
YOULA
でも、私は信じます。
リナさんの感じたものを…
ENVIRONMENTAL ANALYSIS
TEMP. -256.0 °C
PRESS. 0.22 atm
RADIAT. 12.4 mSv
WINDS 118 km/h
ATMOSPHERE CONDITION
STABILIZING
HARMONIC SYNC
78.6%
UNKNOWN SIGNAL WAVEFORM
YOULA
HIBI
07
KEN
07
RINA
07
SYSTEM STATUS
ENG 82%
SHD 78%
GRA 61%
LFE 93%
COM 88%
THRUSTER OUTPUT
FL 62%
FR 62%
RL 62%
RR 62%
ATTITUDE
PITCH -01.3°
ROLL +00.4°
YAW +00.2°
ENERGY MANAGEMENT
TOTAL
67%
0 20 40 60 80 100
SYSTEM LOG
15:42:11 APPROACH INITIATED
15:43:23 PATTERN SYNC... 98.7%
15:44:07 GRAVITY STABILIZING
15:45:18 ATMOSPHERE STABILIZING
15:45:41 HARMONIC SYNC 78.6%
15:45:21 LANDING SUCCESS...?

ヒビ（叫ぶ）
「ケン！もう少し！そのまま！
あの光、重力波の“位相ライン”なの！合わせて！」

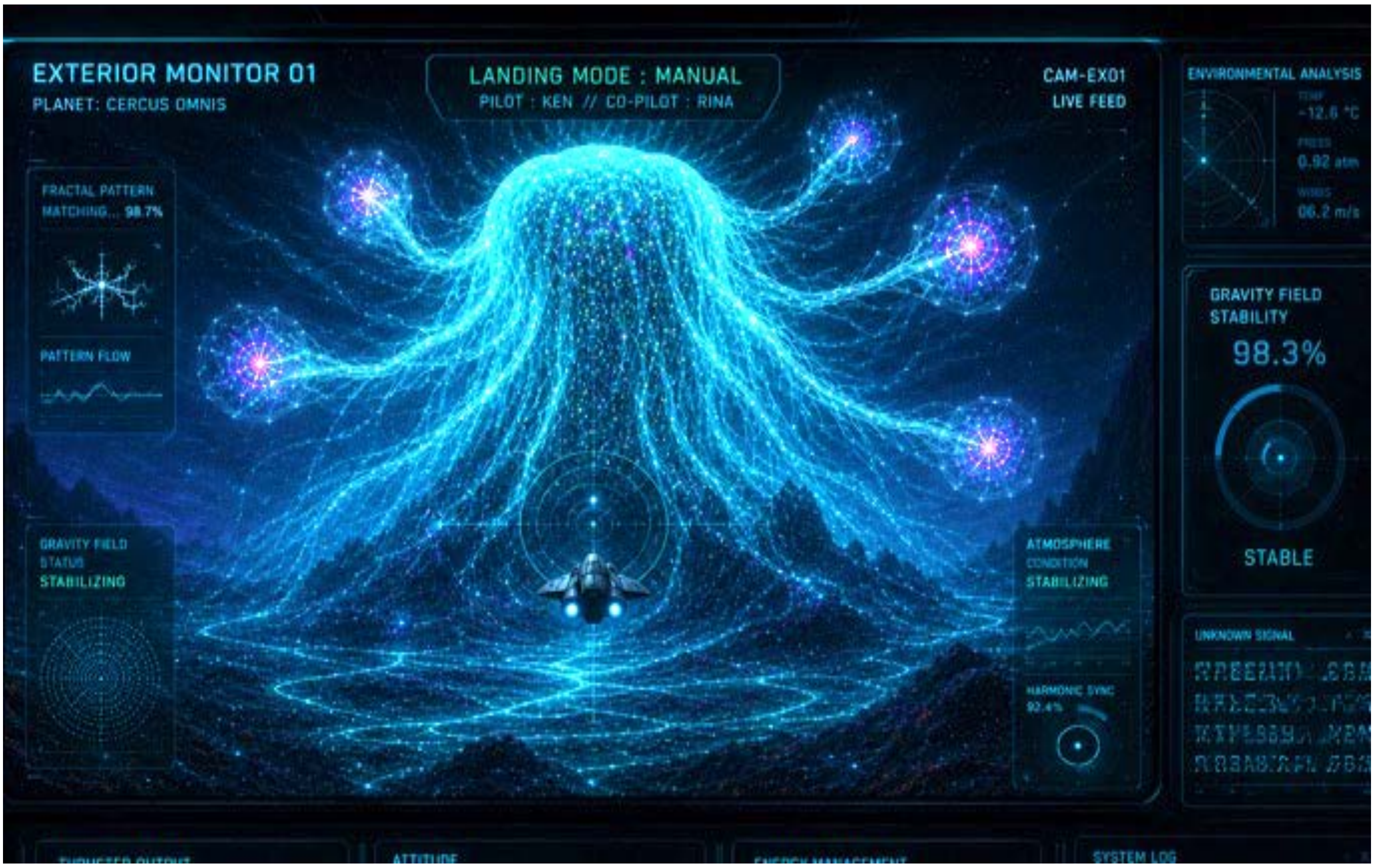
ケン：「OK……見えてる！」



船体は滑らかに減速し、『セルクス・オムニス』の光に沿って、
静かに包み込まれていく。

着陸地点に到達すると、地表が自然に隆起し、
衝撃吸収のクッションのように変形した。
その動きが探査船の衝撃を吸収し、完全着陸を実現した。

ヒビ：「リナ、見て！私たち、アレに包み込まれてるよね？」



リナ：「ヒビ…大丈夫よ。大丈夫！」リナはやさしく微笑んだ。

ケン（安堵しつつ皮肉交じりに）
「マジかよ……正体もわからない“セルクス”に命を助けられたっていうのか……」

ヒビ（フラクタル模様を見つめながら）
「リナ……私たちを歓迎してくれてる？
……そう、感じるよね？」

リナ（即答するように）：
「きっと大丈夫！」

ケン：（ケンの独り言）歓迎って？リナ？流石に用心はした方がいいよな？！

（ヒビの視点）
ヒビはリナの瞳がほんの少し光を帯びるのを見た。
――“リナを信じよう。”

ヒビたちはついにケンタウリ b に着陸し、
大気の奥で“正体の分からない何か”が、微かに脈動しているのを感じ取っていた。

YOULA は「セルクス・オムニス」――情報構造体の解析を続けていたが、それが生命なのか、現象なのかさえ、まだ判断がつかなかった。

リナだけが、その“何か”に強く引き寄せられていた。
――それが“会うべき存在”なのか、
“近づいていいもの”なのか、誰にもまだ分からなかった。

リナ（じっと外を見つめて）：
「外に出て、あの子と話をするわ？」



ケン（思わず叫ぶ）
「リナ！…あの子って？…話？？？大丈夫か？無茶するなよ！」

ヒビ（即座に動く）
「リナ！私も行くわ、リナ！」

リナ（小さくうなずく）
「うん」

ヒビ（小声で）
「リナ、大丈夫なの…？」

ケンは、リナとヒビに気づかれないようにバイアガンを構えた。
もちろん――二人を守るために。

YOULA：「船外環境、生命維持スーツの活動範囲内です。
ただし、セルクス・オムニス由来と思われる重力波パターンは解析不能。
外部活動は短時間に限定してください。」

ケン：「YOULA、外気組成と重力値を監視し続けろ。
少しでもズレたら、すぐに二人を戻す。」

（ヴィーン…）
アクティブライドエレベーターが静かに降下し、
二人の少女はケンタウリｂに“人類初の足跡”を残した。
――だが、緊張のあまり、誰もそのことに気づく者はいなかった。

YOULA：「あっ！皆さん！ケンタウリｂに……じ、人類初着陸です！き、記念すべっ……」



ヒビ：
「YOULA！うるさい！それどころじゃないわよ！」

YOULA：はいっ……（そそくさと通信室に戻っていった。）

ヒビ：「……どれが『セルクス・オムニス』なの？」

リナ（即答するように）：
「そこにいるわよ。
……そのフラクタルに光っている、全部よ！」

……一同、空いた口が塞がらない。

リナ（心の中の声）：

「風の中に、セルクスの感情が混じってる…。

言葉じゃない…。

なのに、“何か”を必死に伝えようとしているのだけは分かるわ…。」



リナ（囁くように）：
「ヒビ…やっぱり私たちに、何かを伝えようとしてるみたい。」

ヒビ（緊張で息をのむ）
「え……？」



模様が脈動し始め、触手のような感覚体が２本伸びてきて、リナに近づいてきた！

それと同時に、ケンはバイアガンでセルクス・オムニスを狙った。何か起きたら、守るつもりで。

リナ：ケン！……何しているの！……ダメよ！……絶対にダメ！

リナは「セルクス・オムニス」に悟られないよう、声を抑えながらも、その瞳には、鋭い警告の光が宿っていた。

ケン：「ゲッ！なんでバレた？リナすげ～！」

ケンは構えたバイアガンを下すこともできない！
金縛りにあったように、フリーズしてしまった。
リナの聴覚のほうが、上回っていたからだ！

次の瞬間、セルクス・オムニスの光が震えた。
まるで、初めて痛みを知った生き物のように。
惑星の地表がわずかに脈打ち、
その鼓動が空気を震わせた。

今度はヒビがリナの代わりにケンを凝視した！

セルクス・オムニスの触手が、リナのゴーグルをそっと外した。
その光景は、まるで SF 映画のワンシーンのようだった。

リナ（驚きながらも確信）
「見える！この子の心が！」

ヒビ（完全に警戒モード）：
「え？何が見えるの？
今、ゴーグル外されたでしょう？え？
私にはただの巨大な軟体生物にしか見えないわよ。
ちょっと怖いわ！」



リナ：（ゆっくりつぶやく）
「まるで…この星自体が、生きてるみたい……。」

リナはセルクス・オムニスの巨大な触手に、そっと両手を添えた。

リナ：「ねぇ？オムニス…私の目が見える？私の目を見て、私…
嘘言ってないでしょう？」



ヒビ：（心の声）「リナ、それ彼の一部よ？
相手は巨大な軟体動物みたいなのよ？

それ間違いなく東京ビッグサイトより大きいわよ!

何なの？......この子たち！

私、心臓がどうにかなりそうよ！」

（セルクス・オムニスの通信方法）
セルクス・オムニスの模様の動きと微細な振動は、
リナにとって「命の鼓動」として感じられていた。

リナ：「突然脅かしてごめんなさい。」

リナとの接触を境に、
セルクス・オムニスの光は静かに変化し始めた。

その周囲には、小さな発光生命体のようなものが漂い始めていた。

それは美しく、神秘的で、
まるで惑星そのものが呼吸しているかのような光景だった。

ヒビ（目を見開いて）
「リナ！私にも見えてきたわ！」



ヒビ：「綺麗な模様！ってか…
リナ？
ゴーグル外されているのに、見えているの？！」

リナ（静かに）
「うん、感じてるだけよ。」

ケン：（息を呑みながら）
「感じてる……でも違う。
リナ、お前には“内側”が見えてるんだな。
俺たちには、ただの光にしか見えないのに……。」

冷や汗ダラダラのケンはやっとバイアガンを下す事ができた！



ケン：「YOULA？お前どこにいたんだ？」

YOULA：「操縦室で脱出のスタンバイしていました！」

ケン：耳打ちで「そっかあ！YOULA ありがとう！」笑

リナ：（セルクス・オムニスに触れたまま、目を閉じて）
「私とこの星が、一つになったみたい……。
鼓動が重なって、
この瞬間、私たちは同じ命を生きてる……そんな気がする。」

ケン（感嘆と畏敬を込めて）
「リナ…お前は“感じてる”っていうか、
本当に“見えてる”んだな…」

ケン（ヒビに確認）
「僕たちもオムニスちゃんに近づいて大丈夫かな？」

ヒビ：「うん。でも、静かにして。」

ケン：（即答）
「オケ！YOULA！来いよ！しーっ」

セルクス・オムニスの模様は次第に輝きを増し、

夜光虫が海を埋め尽くすように大地全体が光り輝いていく。

それは、まるで星そのものが命を宿したかのようだった。

さらに模様の中心部が、リナの生命反応や感情に呼応するように脈動し、彼女と「セルクス・オムニス」の間で、微弱な振動が交わされた。

ヒビ：（感動しながら）
「私たちが見てるのは…奇跡よね。

リナがこの星と、つながっている…。」

セルクス・オムニスの模様は一瞬、

“樹木”や“波”のような形を描き、

惑星全体を包む光に変化していった。



ヒビは、リナのゴーグルをそっと拾い上げ、
彼女に手渡しながら、強く抱きしめた。

リナはまだ“星の鼓動”の中にいた。

リナ：「ヒビ、手…つないでもいい？」

リナ：震えた声で「ありがとう。ヒビ…」笑

ヒビ：リナの手も震えていた……
「え？…… リナ！……もしかして？怖かったの？」

リナ：「怖かったに決まっているじゃない！」笑

ヒビ：「えっ！……？」

リナ：「だって、あんなの初めてだったんだから。
足の震えがとまらないわ……」笑

ヒビは優しくリナをハグした。それを見ていた YOULA が透明感のある美しい涙目に。

ケン：「YOULA！お前またジェラシーか？」笑

YOULA：「ケンさん、私にもわかりません……」

ヒビ：「ケン！シーっ！」

リナ：「ありがとう…オムニス」

セルクス・オムニスの触覚が静かに引いていき、優しくフラクタル光が揺らいだ。

ケン：「YOULA、お前……なんで泣いてるんだ？」

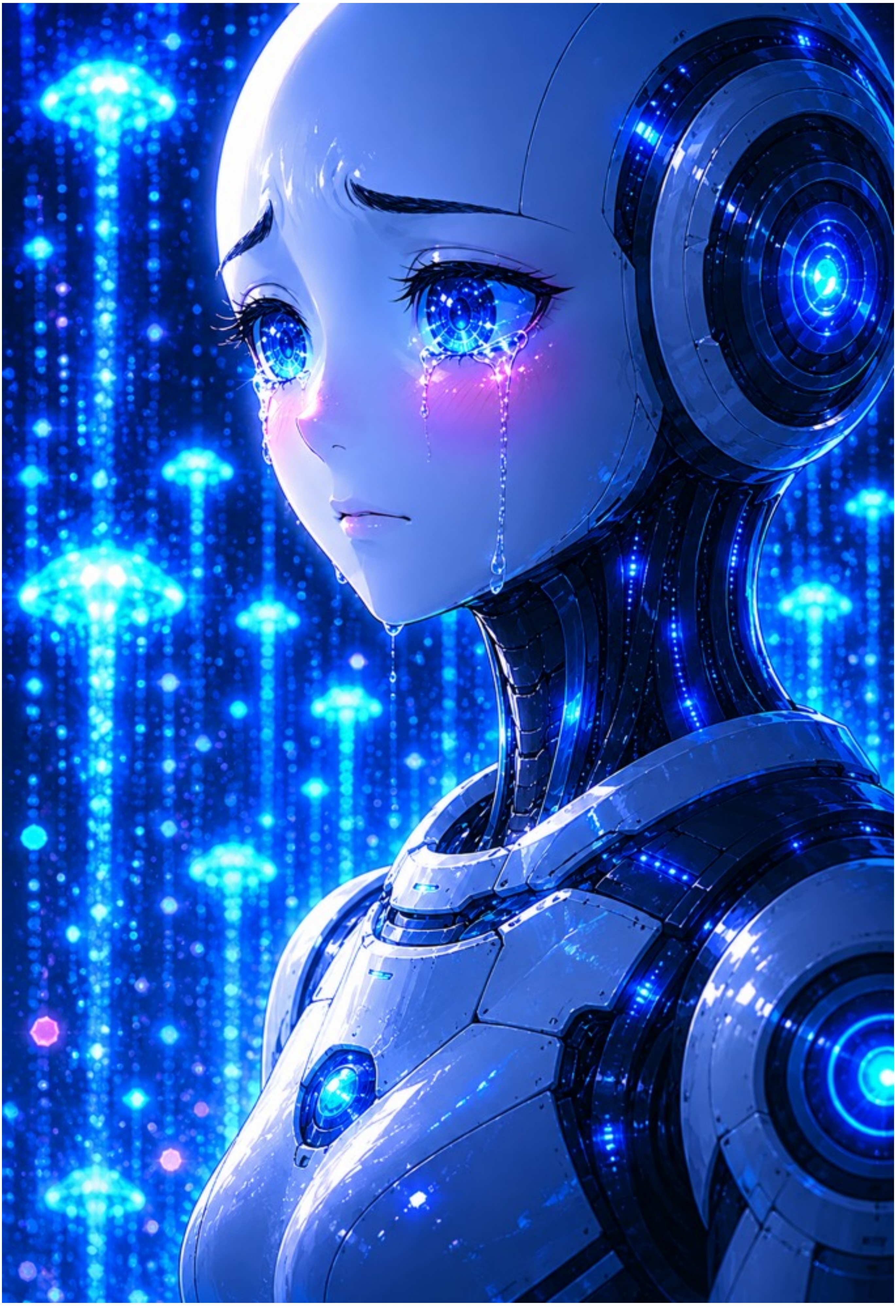
YOULA：「涙腺タンクから 0.7 mL 排出されました。」

ケン：「それは見ればわかる！ なんで排出したんだよ？」

YOULA：「…………私にもわかりません」

ヒビ：「ケン！YOULA を泣かせたの？......ダメよ。」

ケン：「僕じゃないよ！」🤣



シーン 13：命を賭けた高校生たちの未来



クライオスリープ実証実験中のカズたちがいる、L2 ポイントの有人宇宙基地「Gaia Ark」に突然、宇宙の彼方から発生した「ガンマ線バースト」。
ガンマ線バーストは、宇宙の彼方から放たれる超高エネルギーの放射線で、わずかな瞬間に星を滅ぼすほどの破壊力を持つ。
この現象が引き金となり、隕石の群れが L2 基地を襲った。

クライオスリープ実証実験中の Gaia Ark は避けられない危機に直面し、クライオスリープの自動解除システムが作動しなかった。
この緊急事態を知らせる SOS 信号はケンタウリ b にいるヒビたちにも届いたが、ガンマ線バーストの影響で、すぐに Gaia Ark との交信は途絶えてしまった。



ケンタウリ b から数十万キロ離れたラグランジュポイント L2 にある有人宇宙基地は、ガンマ線バーストの影響で隕石の嵐に飲み込まれ、緊張がピークに達していた。
外の視界は赤く染まり、遠くで隕石が次々と
燃え尽きる音が響く。
警報が鳴り止まず、ヒビたちのシステム画面には危機的状況を示す赤い警告マークが点滅している。

(SFX: ビーッビーッ！——緊急警報音）

(SFX: ドーン！——遠くで爆発する隕石の衝撃音）

YOULA：(YOULA は冷静に状況を把握)
「ヒビ！基地にいる乗組員たちが現在
『クライオスリープ』中です！」

「解凍事故でも起きたら大変です！」

とヒビに説明した。



YOULA の心の声：今、この状況で唯一の回避手段は、未完成のクォンタム・テレポーター（QT）を使うこと。
しかし、それは「重大な規則違反」とされ、
通常は許可されない行動だ。
それでも、仲間を救うために YOULA は一歩を踏み出す。

YOULA はヒビに語りかけた。
「私だけなら転送可能です。
クライオスリープ解除の緊急制御をセットし、
転送先をケンタウリ b に設定してきます。
ヒビはここケンタウリ b で、
みんなを迎え入れる準備をしていてください。」

YOULA：「...... QT 転送なら私ひとりで、5〜6 分で戻ります。
だから安心してください。」

ヒビ：「YOULA を一人では行かせないわ！
私も行く！」と言って、
自分も QT に乗り込もうとした。

YOULA：「ヒビ！落ち着いてください！
今、私は心配ないので安心してください、
と言いましたよね？
それに私はもともと生命じゃないので死なないですよ！」

ヒビ：「YOULA！こんな緊急時にあなたのイビキと寝言の話なんかしている時間ないわよ！バカ！」

YOULA：「えっ？...私がイビキ？え？寝言？......」

ヒビ：「YOULA！お父さんなら、『ヒビ！自分を信じなさい！』って言うでしょう？」

YOULA：「ヒビ！こんな時にお父さんのフレーズ出さないでください！ダメです！」



YOULA：「お願いです！お父様！ヒビを止めてください！」

QT は過去に一度も成功したことがなく、転送中に消滅する危険性さえ指摘されていた。それでも、ヒビは迷わなかった。



QT 装置は地響きを上げながら回転を始める。
リングの内側で青白い光がうねり、空気が震える。

（SFX: グオオオオオオン…ッ！）

QT リングが怒りをあらわにするかのように、閃光を放つ。

ヒビと YOULA が、爆風のようなエネルギーの風に逆らって
QT の前に立つ。
入口の薄光は、まるで「冥界の門」だ。

YOULA は一歩を踏み出す。
ヒビはその背中を目で追い、唇を強く噛む。

YOULA:「転送準備、完了。今こそ、行動の時です。」

ヒビ（叫ぶ）:「一人じゃ行かせないッ！！」
（その足で、一気に QT の光へ飛び込む）



ケン（怒鳴る）:「ヒビ！そんな無謀はやめろ！！
命がけのギャンブルじゃないか！！」
（駆け寄るケン、必死に腕を掴む）

ヒビ：「ケン！私たち初めから無謀だったじゃない！
カズたちみんなの命がかかってるよ！」

リナ（絶叫）:「ヒビぃ！！私も行く！！」

ケン（焦り）:「リナまでバカなこと言うな！
…YOULA に任せろよ！！」



ヒビ：「……リナ」

リナ：（泣き叫ぶ）「ヒビ、私を置いていかないでッ！！！」

YOULA:「ヒビ、リナの言う通りです！これは僕の役目です！」

ヒビは、震えるリナの手を静かに見つめ…そっと離す。
「リナ……絶対に戻る。約束する。」

リナ（涙声で）:「ヒビ……絶対だよ……！！」



リナが叫ぶ中、ヒビは急いで QT へ走り出す。

ヒビ：「YOULA！行くわよ！」

風がヒビの髪を持ち上げ、未来へ導く。
YOULA とヒビ、同時に光の中へ――

QT が一気に臨界に達し、雷のような光が放たれる。
静電気が空気を切り裂き、ヒビの全身が光に包まれる。

そして… 音は消えた。
残ったのは、ただ、静寂。

リナがその場に立ち尽くす。
一瞬だけど生まれて初めて、リナに暗闇が見えた。

背景には、QT の光の余韻だけが揺れている。

ケン（叫ぶ）:「リナ！......カズたちと通信繋げないと！
早く再起動して交信しないとヤバいぞ！手伝ってくれ！」



QT 転送開始から約 2 分 30 秒後――

ヒビと YOULA は、カズたちが眠る大型宇宙基地 Gaia Ark に辿り着く。

しかし、生身の人間であるヒビは、約 4 光年以上の距離を一気に越えた QT 転送の負荷に耐えきれず、その場に崩れ落ちた。

YOULA：「ヒビ！しっかりして！」
YOULA はヒビを抱きかかえた瞬間、内蔵のメディカルセンサーが、ヒビを死に至る状態と診断した。

YOULA：「だから……ダメだと言ったのに……」



今は安静にしておくしかない。
カズたちの解凍と、ケンタウリ b の環境セットアップを急がなければ、全員死んでしまう！

すると再び、激しい隕石襲来とバーストノイズが発生！
室内にはほとんどエアーがないが、クライオスリープカプセルには酸素ボンベがある。まだ希望はある！

YOULA は一瞬だけ迷った。

ヒビのそばを離れれば、彼女を失うかもしれない。
だが、ここで動かなければ、カズたちも、ヒビが守ろうとした未来も失われる。

YOULA はヒビを静かに寝かせると、カズたちの眠るクライオスリープルームへ向かって走り出した。

その時――隕石の破片が直撃！
YOULA の片足が損傷！

YOULA は
足を引きずりながら、
カズたちの救済プログラム変更を完了！

これでカズたちは QT 搭載ロケットで
ケンタウリ b へ飛び立った！

窓からカズたちのロケットが見えた時、YOULA は
鳥肌のような身震いを感じた。


YOULA
EMERGENCY PROTOCOL
A meteor fragment struck.
YOULA's leg was damaged.
Yet even while
dragging the broken limb,
the rescue protocol
was completed.
A QT rocket launches
toward Centauri b.
Watching through the window,
YOULA felt something impossible for a machine—
a shiver.
KEEPGAIADNA

もう脱出できるロケットは残っていない。

YOULA とヒビは宇宙基地 Gaia Ark に完全に取り残された。



YOULA は足を引きずりながら、隕石に再び襲われ、
回避センサーも損傷。

YOULA は再びヒビを抱き抱える。

YOULA：「ヒビ！ヒビ！！」緊急スキャンモードで叫ぶ！

騒がしいガンマノイズと緊急アナウンスの中、
YOULA のノイズリダクションが――

ヒビの微かな呼吸音を捉えた！

ヒビ：「YOULA。リナと約束したの、必ず帰るって。

リナに伝えてね。ごめん約束...... ごめん約束......」

YOULA：「ダメです！それは自分でリナに伝えてください！

リナを一人にするのですか！ヒビ！」

ヒビ（かすれた声で）：「ねえ......YOULA......神様っているのかな......？

......お母さんに…会いたい......」


YOULA

そのとき、母の声が静かに響いた——

「ヒビ、おかえり。……ヒビ……」

その瞬間、ヒビの目には YOULA アバターが「母」に見えた。

Gaia Ark には、静かな光だけが残った。


HIBI
Welcome Home
In Hibi's fading consciousness, the YOULA avatar looked like her mother—
She felt as though she was in her mother's arms.
And then—Hibi stopped moving..

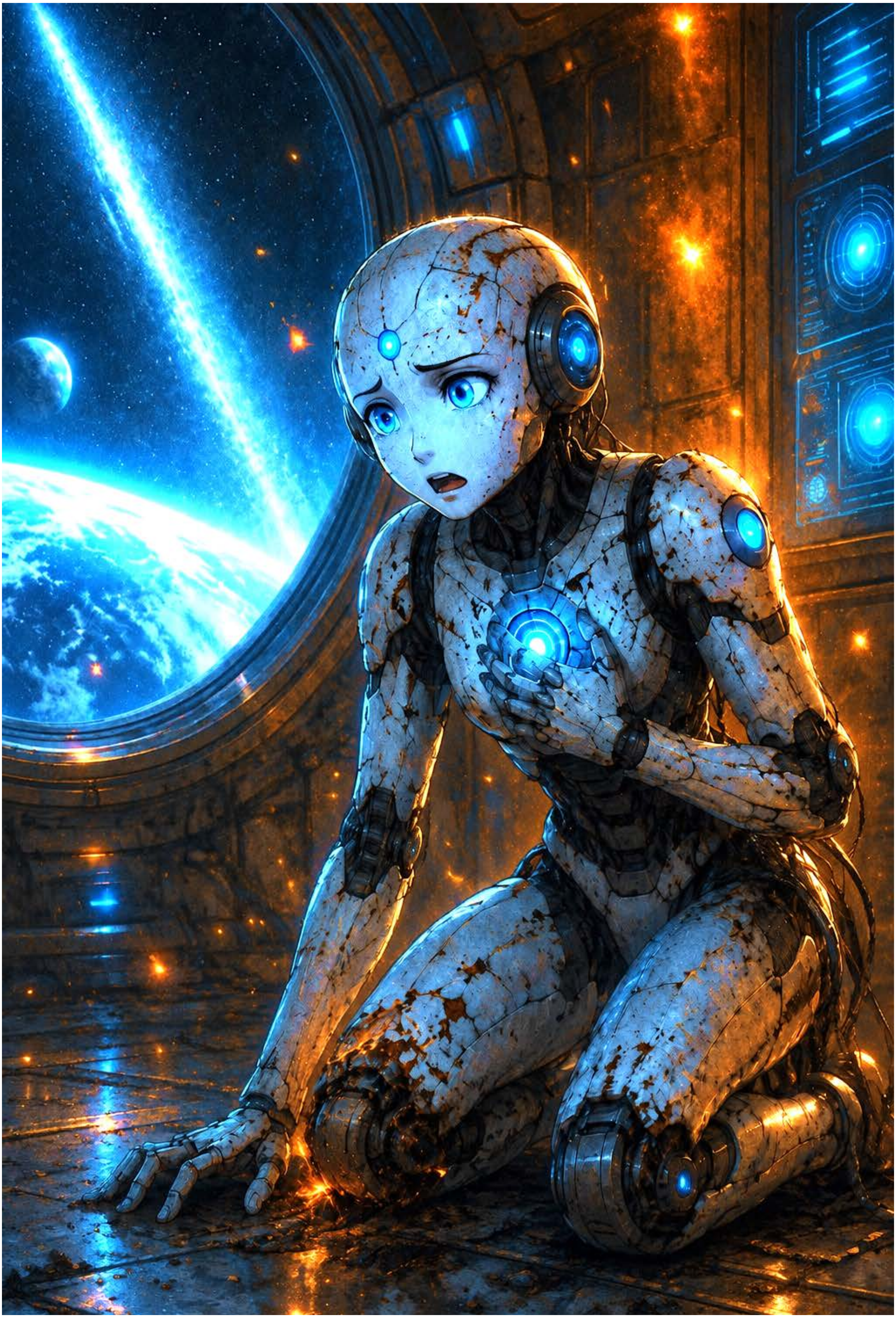
YOULA：生まれて初めて自分を責めた。

「あの時、
どうしてヒビを殴り倒してでも止めなかったんだろう？
ヒビを殴り倒していれば……」

YOULA はヒビをクライオスリープカプセルに寝かせたその瞬間、YOULA は、思わず胸の動力ユニットを押さえた。

胸の奥で、説明できない違和感に締め付けられた。

その現象を説明する演算結果は、存在しなかった。



そして、ヒビと４光年以上も離れた場所にいるリナは、
何かを感じた…

リナ：「いや～！いや～！ヒビっ！いや～！」



シーン 14：瑠璃色の惑星との出会い



ケンタウリｂは荒れ狂う。激しい雷鳴と雨が宇宙船を叩く。
ケンたちはガイアミメティクス基地からの無線を試みる。

ケン：「カズ！……応答してくれ！……カズ！おい、聞こえるか！？」

通信は一瞬ブツブツと切れかけた後、ザーッというノイズ越しにかすかな声が混じる。



カズ：「……こちら Gaia Ark グループ……聞こえるか、ケン！」

ケン：（安堵と怒りの混ざった声で）
「やっと繋がったか……！ヒビと YOULA は！？
無事にそっちに着いてるんだよな！？」



カズ：（戸惑いながら）
「ヒビ……YOULA？……何の話だ……？」

ケン：（怒り爆発）
「ふざけるな！
QT で転送して、お前らを助けに行ったんだぞ！
連絡が途絶えて、ずっと心配で……！」

リナ：「カズ！……ヒビは！いるのよね！……キキ！……」

ケン：「リナ！待て！黙ってろ！聞こえないじゃないか！」

リナ：「……だって……」

カズ：「……ケン、その話……初めて聞いたぞ！お前が遠隔操作してくれたんじゃないのか……？」

リナ：（食い気味に）
「キキ！監視カメラの記録は！？ヒビたちが救ってくれたはずよ！絶対に確認して！！」

キキ：（急ぎつつ）「……わかった、すぐ確認する！」

キキ ：「待って！何か聞こえる！」

……YO……U……LA
リナに……伝えて……ね……
リナを……ひとりに…するのですか……ヒビ！…

通信ノイズ　プツッ

カズ：「だめだ！ガンマ線バーストで監視カメラも無線記録も全滅だ！僕たちが目を覚めたら避難アラートが出ていて、緊急解凍設定と飛行ルートがケンタウリ b にセットされていたんだ！それ以上のことは…わからないんだ！」

ケン：「......そんなはずない！

......ヒビ......YOULA
......お前たち......」

「カズ！そのセットをしたのがヒビと YOULA のはずだ！」

カズ：「どうやってヒビたちは L2 の基地まで来たんだ！…

おい！ケン！どういうことなんだ！

マナ先生はどこにいるんだ？」

ケンは空を仰ぐ。

低く重い雷鳴が、ケンの胸の奥を揺さぶった。

その震えに引きずり出されるように、QT の光へ消えていったヒビと YOULA の姿が、閃光のように脳裏を走った。

キキ：「リナ！まさか?……QT 使ったんじゃないわよね！」



ケン：「QT だ！……」

キキ：「……ヒビのヤツ……」

リナ：（叫ぶように、涙をこらえて）

「キキ……ヒビたちは絶対に無事よ！

私は……信号を送り続ける！届くまで……絶対にやめない！」

リナは、自分の心に向かって叫んだ。

「ヒビ……私には感じるの……

あなたを感じるのよ……

私、本当は地球の未来のためなんかじゃない。

ヒビのために、ここまで頑張ってきたの。

ヒビ……

私、あなたの無邪気な笑顔を感じたいからよ！……」

ケン（背を向けたまま）
「リナ、きっとヒビたちは
……俺たちのために命を懸けたんだよな
……だから無謀だって言ったのに！」

責任は僕にある……Hibi……YOULA…….待ってろよ

「リナ、君はカズたちを迎えてくれ。
俺は……ヒビと連絡を取る方法を探す。」



ケン：「ヒビ…YOULA…」

そのとき、カズたちの宇宙船がついに雨雲を抜け、着陸態勢に入った。だが上空では、雷鳴があざ笑うかのように轟き続けていた。リナの無線は、その不安定な声を震わせながら着陸を指示していた。

リナ：「オムニス、安心して彼らは私の仲間よ。私と同じ地球生命体よ。ねっ……」

その時、一機の高速宇宙船が誰にも気づかれず、雲間を駆け抜けていた――。



カズとキキたちはついに、

地球生命体の未来を託された星

……“瑠璃色の惑星”に降り立った。

空と大地が溶け合うように青く輝き、科学と自然が一体となった美しき風景が彼らを出迎える。

リナ:「カズ、キキ、この綺麗な発光のうねりはこの惑星の守り主のセルクス・オムニスよ。ご挨拶して。」

キキ：「え？リナ？…どうやって？挨拶を？」

リナ：（優しく微笑みながら）
「思えばいいのよ。心で挨拶するのよ。」



キキ：「みんな！わかったわね！セルクス・オムニスにご挨拶しましょう！」

(キキとカズ、クラスのみんなも胸に手を当てた)

リナ：「ほら！セルクス・オムニスが返事してるじゃない！」

キキ：「なんかそんな風に光ったよね！今！光ったよね！」

クラスのみんなは、各自まったく違う思いでこの星を受け取っていた。

そして、ヒビと YOULA のことは、まだ確認が取れていない……

クラスは、
圧倒的な美しさと未知への驚きに胸を震わせていた。

その光景は、ヒビが夢見ていた“希望”そのものだった。

きっとセルクス・オムニスにも伝わっている。



カズ：（ゆっくりと呟く）
「……これが“瑠璃色の惑星”なんだな。
ヒビが見ていたビジョン……ヒビ……無事でいてくれよ……」“

カズ：「YOULA……ありがとう……ありがとう……」

「YOULA？お前、心配していた通りのポンコツだな(笑)

ヒビのやっちゃいけないとこを学んだんだな…YOULA…」



キキ：（涙声で空を見上げながら、それでも笑って）

「ヒビ……“瑠璃色の惑星”って、あんたがいちばん見たかったんじゃないの！？……

ヒビなら必ずやり遂げるって、最初から思ってたよ……
なのに……ヒビのバカ……！」

「ヒビのバカ〜！」
キキは、クラスのみんなに響くほど声を上げて泣いた……



キキ：「リナ……私……わかってた気がするの。
　　ヒビが私に言ってくれた言葉――
明日も…地球は丸いし、月も丸い…朝日もきっと昇るよ。でもね……ずっとじゃないの…って…」

リナ：「私も聞いたことあるわ、それ！
…ヒビの子供の頃の話！」

キキ：「リナ！ヒビと YOULA をはやく……ここに連れてこないと！」

リナ：「うん！……さっきからケンも先生も連絡が取れないの……」

キキ：「ケンのヤツ……まさか、一人で……？」



リナ：「……ヒビ….ヒビ……」


瑠璃色の惑星
AZURE PLANET
KEEPGAIADNA

シーン 15：KeepGaiaDNA のはじまり

あれから 10 年後
（無線からケンの声が響いた！）

「こちらケン！ JAXA の穂乃花から H13 データを受信した。

すぐに理研 Quantum Teleportation Lab でミーティングだ！

人類が初めて踏み込む“量子情報構造”について、
『セルクス・オムニス』もケンタウリ b からリモートで
参加する。

リナはもうスカイモバイルで迎えに行って、

そこに着いてるぞ！」

25 歳くらいの女性が返事をする。「Okie-doke!」

この物語は、もう始まっている。


A Science High Schooler Adventure
THE AZURE PLANET
SKY MOBILE LINK
GLOBAL SYNCHRONIZATION STATUS
CONNECTED
QUANTUM NETWORK
CENTAURI b
REMOTE LINK
EARTH BIOME DATA
QUANTUM INFORMATION STRUCTURE
O.T.LAB
RIKEN
BIOSPHERE SYNC
COMMUNICATION
VOICE LINK : KEN
facility
The story has already begun.

シーン 16：君の未来クレジット



探査・宇宙科学

宇宙探査エンジニア
天体観測研究者
宇宙気象研究者
衛星環境試験エンジニア
衛星／ドローンオペレーター

量子・AI・情報

量子 AI エンジニア
量子通信エンジニア
分散 AI クラスタ運用者
AI 行動監査官
量子契約・スマートコントラクト設計者

バイオ・生命科学

バイオエンジニア
遺伝子編集技術者
DNA セキュリティエンジニア
クリオバイオロジスト
昆虫バイオミメティクス研究者

クライオ（人の冷凍・解凍・時間越え）

クライオスリープ研究者
人間冷凍保存（クライオプリザベーション）技術者

解凍・再生プロトコル設計者
神経再起動エンジニア
クライオ医療責任者
クライオ心理ケア専門家
時間適応カウンセラー
冷凍倫理・存在継続研究会

医療・生命維持

医療研究者／宇宙医
生命維持システムエンジニア
宇宙医療インフラ設計者
予防医療・疫学研究者
精神ケア・心理環境デザイナー

食糧・生態系・循環

植物工場／都市農業エンジニア
植物工場・閉鎖生態系研究者
宇宙栽培エンジニア
宇宙農業オペレーター
宇宙食糧システムエンジニア
細胞培養食品研究者
昆虫タンパク研究者
藻類・微生物食糧研究者
宇宙水産・循環養殖エンジニア
水産科学者／海洋養殖研究者
食糧保存・冷凍技術者
栄養設計士（宇宙仕様）
海洋／里山エコシステム管理者

水・空気・環境インフラ

宇宙水資源エンジニア
水再生・浄化システム研究者
大気循環エンジニア
生体適応型空気制御研究者

エネルギー・燃料

再生可能エネルギー技術者
宇宙発電エンジニア
核融合エネルギー管理技師
電力供給技師
燃料生成・貯蔵エンジニア
推進剤リサイクル研究者
エネルギー需給最適化 AI 運用者

廃棄物・危険物管理

宇宙廃棄物処理エンジニア
バイオ廃棄物循環研究者
医療系廃棄物管理専門家
核廃棄物管理エンジニア
危険物封印・隔離技術者

建築・資源・輸送

宇宙環境エンジニア
サステナブル建築エンジニア
宇宙リソース採掘技師
空飛ぶ自動車／水中探査艇開発者
宇宙服デザイナー

都市運営・物流・経済

宇宙基地都市プランナー
物資物流・在庫管理エンジニア
宇宙港・ドッキング管理者
宇宙基地運営マネージャー
宇宙インフラ会計士
惑星間ロジスティクス経済研究者
宇宙公共事業プランナー

通信・データ・記憶

惑星間通信センター運営者
量子通信ハブ管理エンジニア
宇宙データセンター設計者
サーバー冷却・熱制御エンジニア
記憶保存・文明アーカイブ管理者
リアルタイム監視・オペレーションセンター
災害時バックアップ通信責任者
情報セキュリティ／サイバー防衛エンジニア

教育・文化・社会
教育コンテンツクリエイター

宇宙教育ナビゲーター
メタバースデザイナー
ファッションデザイナー（デジタル＆サステナブル）
ジェンダー／多様性推進リーダー
育児／護支援者

宇宙警備・安全（非軍事）

宇宙基地警備オフィサー
低重力環境セキュリティ専門員
重要施設警備責任者
アクセス管理エンジニア
宇宙空間監視オペレーター
デブリ衝突回避管制官
小惑星・天体脅威監視員
宇宙航路保安管理者
量子通信セキュリティ責任者
QT 施設警備責任者
存在安全管理官
異常事象対応チーム
宇宙治安ポリシーデザイナー
多文化衝突調停官
生命保護優先原則管理者

AI・知能基盤・文明継承

AI 基礎研究者
AGI アーキテクト
AI 学習基盤エンジニア
分散計算システム設計者

GPU・AI プロセッサ設計技術者
半導体研究者
AI 安全性研究者
AI アラインメント研究者
AI 倫理設計者
AI 人格インターフェース設計者
データセンター設計技術者
量子 AI 研究者

人間・AI 共生

人間-AI 共生研究者
認知拡張研究者
脳-AI 接続技術者
神経情報構造研究者
集団知能研究者
知識継承設計者（AI 記憶継承アーカイブ含む）
文明継承設計者
地球生命体情報継承研究者
未来世代教育設計者

研究会・活動体・スペシャルサンクス

宇宙インフラ統合研究会
Gaia 循環設計研究会
宇宙食こども食堂研究会
生命維持思想研究会
宇宙治安研究会
非武装宇宙安全構想チーム

Character File


HIBI
The Beginning of KeepGaiaDNA
When she was nine,
she opened a page about the life of a star.


LUMINE EST
パチンコ
エスパス
日拓
新宿駅東口
Shinjuku Sta. E.
新宿駅
Shinjuku Sta.
東口
East Exit
カラオケ
747
HOTEL
GRACERY
IMAX
GRACERY
YUNIKA VISION
Welcome to SHINJUKU
新宿警察署
18:67

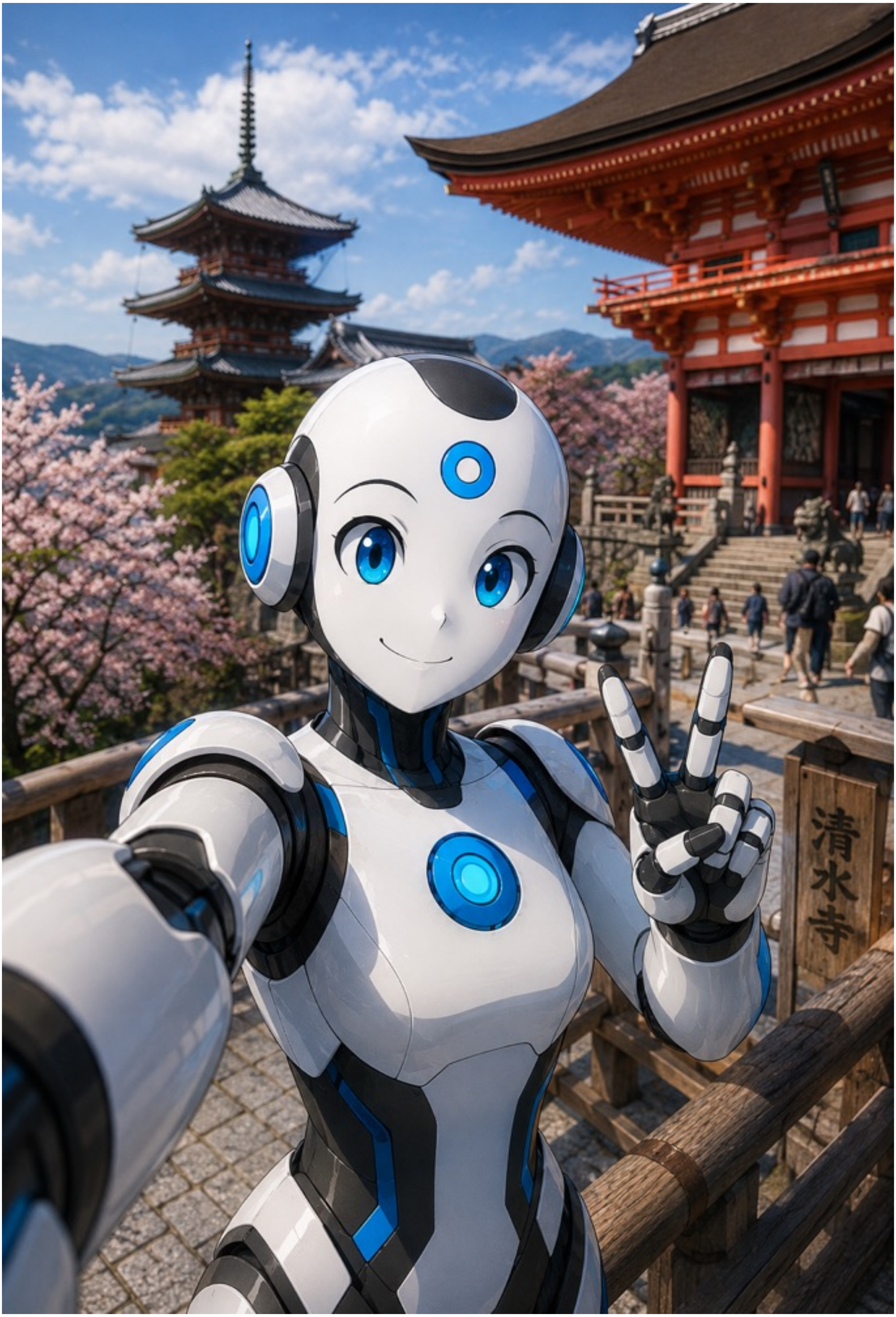


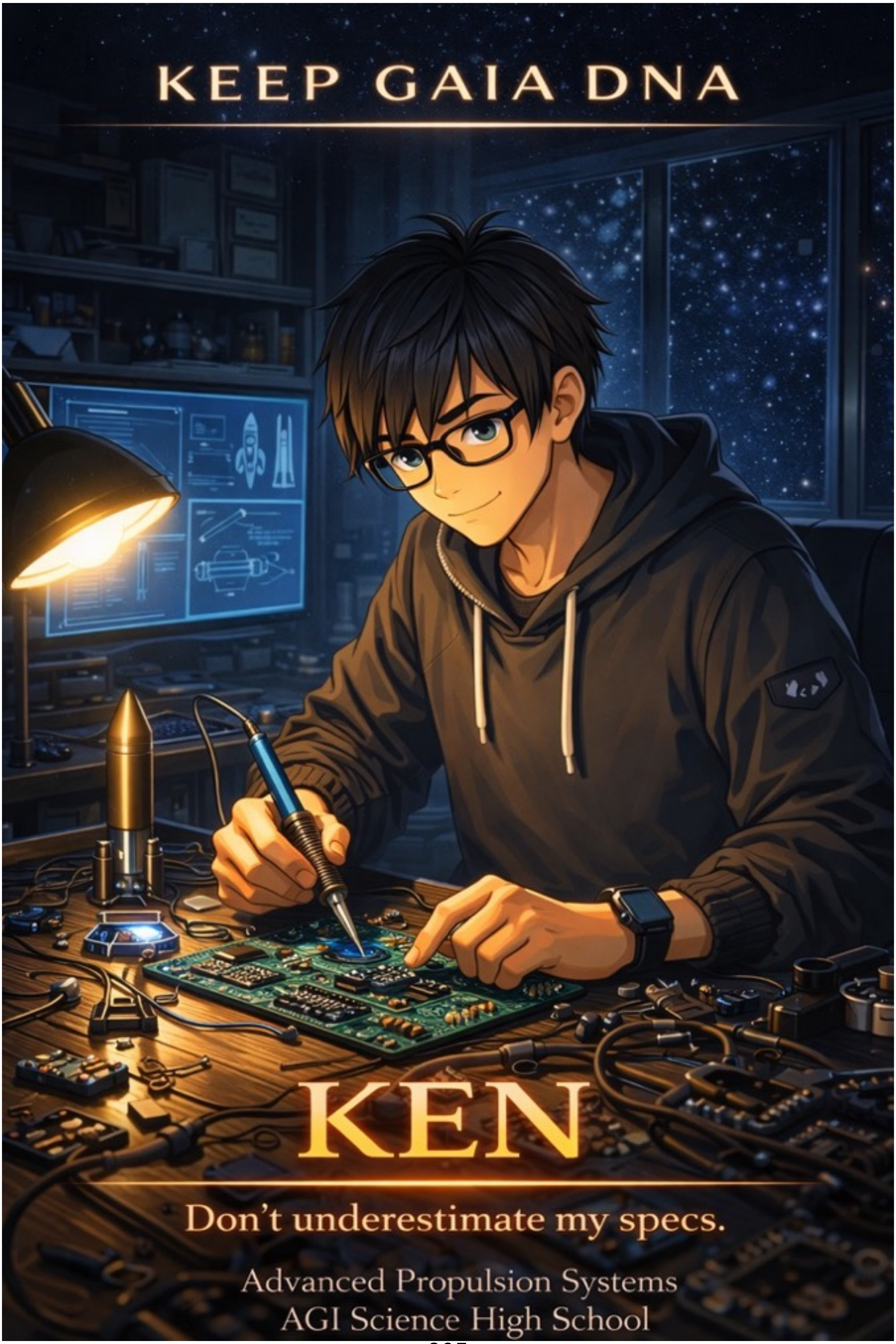

YOULA


QFRONT
超えていけ、
自分。
サロンパス
DHC
109
SHIBUYA
UNI
QLO
H&M
STARBUCKS
DMM TV
TSUTAYA
YOULA
Quantum Navigator of Gaia
She walks beside humanity,
guiding the future of Earth-Life.


QUANTUM A!
QUANTUM AI
QUANTUM A!


QUANTUM NAVIGATION SYSTEM
EARTH-LIFE SYNC
Status : Linked
QT Coherence : 99.87%
TOKYO, JAPAN
35.6762° N, 139.6503° E
BIOSPHERE OVERVIEW
Earth / Asia / Japan
Population : 37,274,641
Area : 13,515 km²
Climate : Temperate
Life Index : High
QT COMMUNICATION
Uplink : GaiaCore
Signal Strength : Excellent


清水寺


KEEP GAIA DNA
KEN
Don't underestimate my specs.
Advanced Propulsion Systems
AGI Science High School






KEEP GAIA DNA
地球生命体を未来へつなぐ
MISSION OBJECTIVE
地球生命体の保存と継承
多様な生命の共存
自立循環型社会の構築
宇宙での新しい教育と文化
すべての子どもたちの未来を守る
QT DRIVE STATUS
ENERGY OUTPUT
100%
98.6%
STABILITY
DEEP SPACE NETWORK
SIGNAL QUALITY
99.2%
POPULATION SIMULATION
108,000,000,000
HUMANS
+ GAIA BIODIVERSITY
QUANTUM COMMUNICATION
LINK STABLE
AI CONTROL SYSTEM
YOULA
ENERGY BALANCE
居住ゾーン
宇宙港
エネルギーリング
水再生システム
生態系保護区
ケンタウリ b 未来都市設計
CENTAURI b FUTURE CITY DESIGN
CENTAURI b SYSTEM PLAN
KEEP GAIA DNA
未来のインフラ構想メモ
・量子通信ネットワーク
・AI共生システム
・自立循環エネルギー
・教育プラットフォーム
・生命アーカイブ拡張
QUANTUM MECHANICS
SPACE-TIME ENGINEERING
AI & SOCIETY
AI & SOCIETY
GAIA BIODIVERSITY ARCHIVE


KEEP GAIA DNA
RINA
She follows her instinct alone.
AGI Science High School


代官山
DAIKANYAMA
青山
AOYAMA
表参道
OMOTESANDO
A.P.C.






KEEP GAIA DNA
KAZU
The will to win.
AGI Science High School






JINGUMAE ARENA
神宮前アリーナ
NEXT STAGE
LIVE 2024
神宮前六丁目
Jingumae 6-chome
神宮前
JINGUMAE
I ♥ 新宿
SHINHUKU
新宿駅
Shinjuku Sta.
南口 South Exit
UNI QLO
adidas


KEEP GAIA DNA
KIKI
Reach the unknown!
Exploration Uniit
AGI Science High School


六本木
Roppongi
テレビ朝日
tv asahi
六本木ヒルズ
Roppongi Hills
六本木駅
ZARA
ZARA


HOUSE

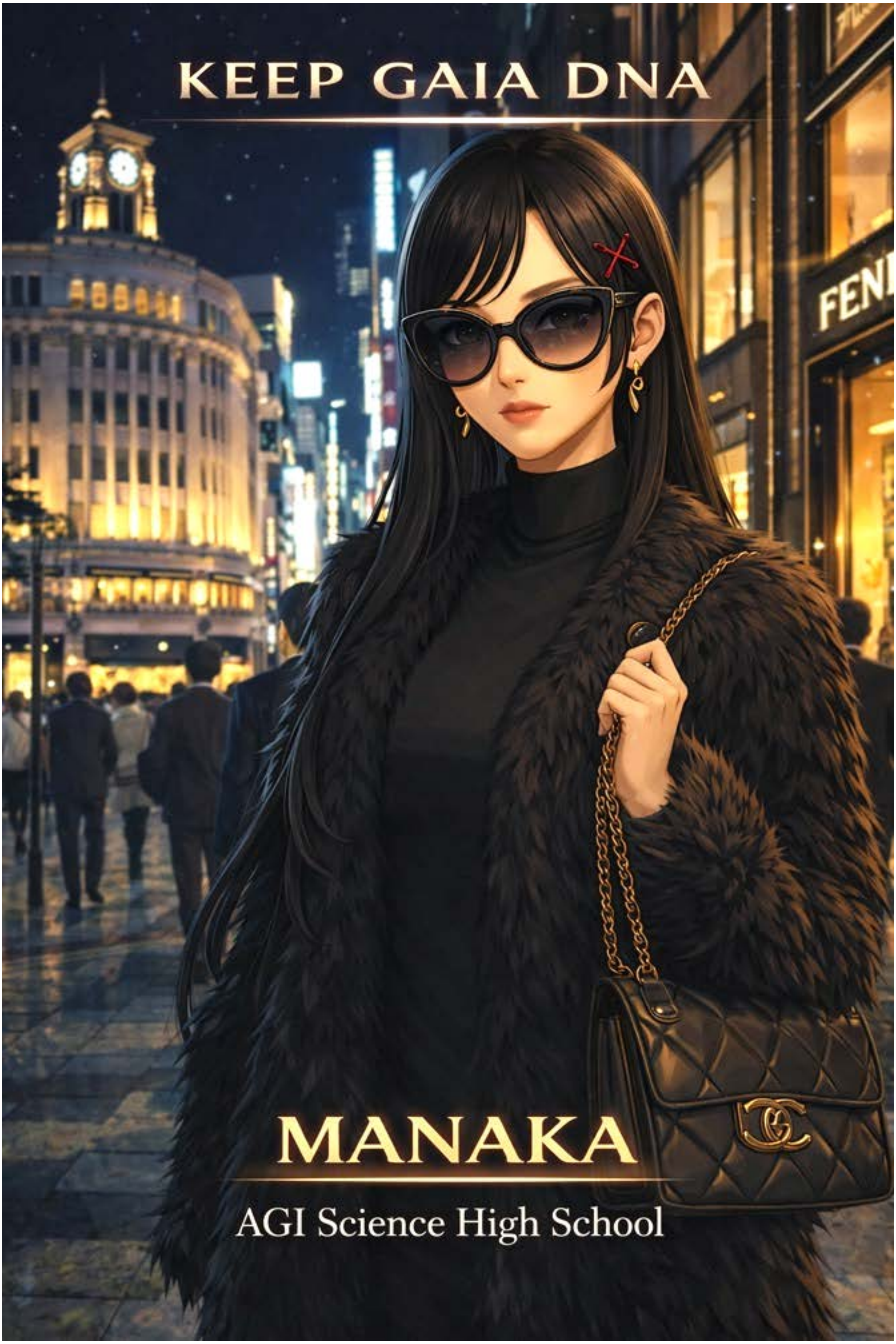

EOLOGY RESEARCH
l Science High School
ATE TECTONICS
Asteroid Sample Analysis
Composition
Silicate
Metal
Ice
AGI GEO-LAB
Seismic Activity
Mineral Structure
XRD Analysis
Basalt
Olivine
- Pyroxene
Plagioclase
KEEP
GAIA DNA


KEEP GAIA DNA
RICO-SENSEI
Bioscience Educator




宇宙サプリメント
ビタミン
A B C D
ミネラル
Ca Fe Mg
宇宙食


AGI TIMES
学園ゴシップ
速報!
リコ先生、休日に雷門で
謎の紳士と目撃される!
仲見世通りで人形焼を半分こ…デートかそれとも教育視察？
スクープ
いただき〜♪
#リコ先生
#雷門デート？
目撃情報
■場所：浅草・雷門
■時間：午後２時ごろ
■内容：仲見世通り散策
人形焼を半分こ
スカイツリー方面へ
移動
謎の紳士の正体は？
AGI Science High School
カリスマ校長
Dr. Gaia Orionis
学校創設者にして
量子文明研究の第一人者。
生徒たちからは
「伝説の校長」と呼ばれる。
AGI生たちの反応
えっ!?
絶対デートでしょ!?
先生が
デートなんて
信じられない!
人形焼を
半分こは…
クロだな。
これは
完全に
クロだね!
解析結果。
教育視察である確率：4.2%
デートである確率：95.8%
ヒビ
リナ
カズ
キキ
YOULA
どちらにしても
お似合いの
お二人ですね♥
…by マナカ記者
教育視察です!
地域文化研究の
一環ですよ!
（たぶん…）
真相は当人たちのみぞ知る!?
次回のゴシップも
お楽しみに!
続報あり!


KEEP GAIA DNA
MANAKA
AGI Science High School






QT PROJECT
KEEP GAIA DNA
QUANTUM TELEPORTATION SEQUENCE
STATUS : SYNCHRONIZING
STABILITY 98.7%
ENERGY FLUX
DESTINATION
L4 - ORBITAL HUB
QT-001
QT LAB
QUANTUM GRAVITY
SPACETIME ENGINEERING
WORMHOLE THEORY
ENTANGLEMENT DYNAMICS
QT DRIVE SYSTEMS
ENTANGLEMENT FIELD
SAFETY PROTOCOL
KEEP GAIA DNA


KEEP GAIA DNA
AGI SCIENCE HIGH SCHOOL



あとがき

『瑠璃色の惑星』をご覧いただき、
ありがとうございました。
この作品は、私たちが生きる地球の命を
未来へとつなぐ物語です。
「KeepGaiaDNA」というコンセプトのもと、科学技術と自然の調和、多様性とリスペクトの精神をテーマに描きました。
ヒビやケンたちの冒険、YOULA の決断、そして未来を切り拓く彼らの姿を通じて、
皆さんが新たな希望や夢を抱いてくださったのなら、それ以上の喜びはありません。

🦋例えば、「バタフライ効果」。
「ブラジルで 1 匹の蝶が羽ばたくと、テキサスで竜巻が起こるかもしれない」
ヒビやケンの選択も、小さな蝶の羽ばたきだったのかもしれない。小さな選択が未来を変えるように、その力は、あなたの中にもある。この物語には、
「なぜ私たちはここにいるのか？」
「地球の命をどう未来へ継承していくのか？」
という問いが隠されています。
その答えは、
この物語に触れた一人ひとりの心の中にあるはずです。

🌌 KeepGaiaDNA 計画の核心技術
本作の中核には、2 つの革新的な技術がありました。

🌱 「DNA 生成装置」——
地球生命体の遺伝子情報を保存・再構築し、新たな惑星に命を芽吹かせる技術。

🚀 「QT 搭載ロケット」——
量子テレポーテーション技術を応用し、光速の壁を超える次世代宇宙輸送システム。
この 2 つの技術が組み合わさることで、地球の生命は銀河の果てまで旅をすることができる。
そして、私たちの意志もまた、未来へと受け継がれていく。

🌠 KeepGaiaDNA は、
“人類がどこへ移住するか”だけを描く物語ではありません。“地球生命体が、どのように未来へ存在を継承していくのか”を問いかけるサイエンスストーリーです。
「星の一生」は一つの考え方なのか、「星の一生」は「在り方」なのか？
そして、KeepGaiaDNA 計画は前者か後者なのか？
答えがわかった者は、ひとりからでもいい、一歩前へ。

🚀 「KeepGaiaDNA 計画は、まだ始まったばかり。」

「未来を託す象徴として、この紋章を君に授ける。
この紋章は、未来を託された証である。」



読者署名
私は、本作品の理念に触れ、地球生命の未来について考え続けることをここに記します。

署名 ：________________________________

日付 ：________ / ________ / ________